

国 際 セ ン タ ー 年 報

第 19 号

平成 24・25 年度(2012・2013 年度)

大阪教育大学国際センター

目 次

第一部 寄 稿

巻頭言	向井 康比己	1
(国際センター長)		
日本留学の動機調査 ー台湾からの交換留学生を例としてー	城地 茂	3
(国際センター 国際事業部門)		
ドイツの大学における留学支援 ーエアランゲン・ニュルンベルク大学を を例としてー	赤木 登代	12
(国際センター 国際事業部門)		
オーストリアにおける「子ども虐待防止」 の取り組みー2011年9月と2013年3月 の訪問調査からー	中山 あおい	21
(国際センター 国際教育部門)		
韓国の教育大学からの海外インターン シップ受け入れ：その効果と意義	若生 正和	29
(国際センター 国際教育部門)		

第二部 学生便り

留学生の声

大教大での4年間	黄 掣	37
(教養学科情報科学専攻、中国)		
大阪教育大学での経験	ナズィファ・ヌール	39
(大学院 総合基礎科学専攻、アフガニスタン)		
日本の印象	バルタバエヴァ・アデミ	41
(日本語日本文化研修留学生、カザフスタン)		
Education in Japan	ルシャリ・ナラヤン・ジョシ	43
(教員研修留学生、インド)		

日本人学生の声

ドイツ留学体験記	小笠原 沙紀	46
(教養学科 芸術専攻音楽コース)		
“Keep in touch, buddy!!”	森田 あやね	50
(教員養成課程 美術・書道教育(美術)専攻 小学校コース)		

第三部 国際センター記録

平成 24 年度 国際教育部門活動報告	54
平成 25 年度 国際教育部門活動報告	65
平成 24 年度 国際事業部門活動報告	77
平成 25 年度 国際事業部門活動報告	82
平成 24 年度 国際センター行事	90
平成 25 年度 国際センター行事	106

付 記

平成 24・25 年度国際センター運営委員会委員名簿	118
平成 24・25 年度留学生宿舍運営委員会名簿	118
平成 24・25 年度国際交流委員会名簿	119
平成 24・25 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿	119
平成 24・25 年度留学生推薦選考会議名簿	120
平成 24・25 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿	120
平成 24・25 年度ダブルディグリー討専門委員会委員名簿	120
編集後記	122

巻頭言

向 井 康 比 己

国際センター長

本学の国際化を促進するために、旧留学生センターが国際センターに改組されてほぼ 6 年になります。この間、センターの教員増とともに国際教育と国際事業の 2 部門が設置され、センターの機能が強化されました。この 2 年間の活動状況とその成果がこの冊子にまとめられています。国際センターが改組されたときには、協定校は 24 校であったのが、40 校に増加しました。一時 100 名ほどに落ち込んだ留学生の数は、150 名を超えるまでにになりました。また、派遣学生も年間 10 名前後であったのが、2013 年度には 17 名になりました。本学の学生の海外留学を奨励し、派遣学生に対して経済的な負担を軽減するために授業料免除制度が新設され、本年度は 10 名の学生がこの制度を利用して留学しています。

留学生や国際交流に関する本来の業務に加えて、新しい取り組みやプログラムも実施してきました。アメリカ、オーストラリア、および韓国での研修を、教養基礎科目「海外文化研究」として単位化しました。日本語日本文化研修留学生や交換留学生のための体験型の授業、「大阪の文化」や「日本の伝統文化」も新たに開設しています。また、中国の提携校である同済大学と東北師範大学の間に、大学院におけるダブル・ディグリー制度が導入され、この制度に基づく学生が入学しました。さらに、2013 年度には、JASSO 留学生交流支援制度（短期受け入れ）に採択された 2 週間のプログラム、OKU SICEP (2013 OKU School Internship and Cultural Experience Program) を実施しました。日本に興味はあるものの、交換留学生として 1 学期以上日本に留学するだけの語学力のない学生のために企画されたものです。このようなプログラムが充実していけば、協定校からさらに学生が呼び込めると思います。

本学学生の英語力を高めるためには、教員の英語による講義も充実させる必要があり、各専攻において英語による専門の講義が 1 つぐらいあってもよいのではないのでしょうか。現在の教研生や日研生向けの授業を日本人の学生にも受講できるように単位化を検討すべきであると考えます。国際共同研究の実施や国際シンポジウム開催、海外からの研究者や研修生の受け入れなどに対しても国際センターとして積極的に支援しています。本学は現在 15 カ国・地域の 40 機関と交流協定を結んでいますが、今後、アジアではインドネシア、マレーシア、インドおよび中央アジアの国々、さらに中南米のスペイン語圏、北米・ニュージーランドなどの英語圏の大学、ヨーロッパの各地域の大学と国際交流を広げていくた

いと考えています。

2008 年 4 月に、国際センターの前身である旧留学生センター（2008 年 7 月に改組）長をお引き受けしてから、3 期 6 年の任期を無事務めることができたのは、国際センター・国際系の教職員はもとより、国際センター運営委員および国際交流委員の皆様、各事業に協力していただいている先生方のおかげであると感謝申し上げます。国際センターはさらなる変革が求められており、センターの全構成員が知恵を出し合い、心を一つにして次期センター長のもとでさらなる飛躍と新たな発展を遂げることを節に願っています。それとともに、全学教職員の一丸となった協力体制も必要ですので、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

日本留学の動機調査*

－台湾からの交換留学生を例として－

城地 茂

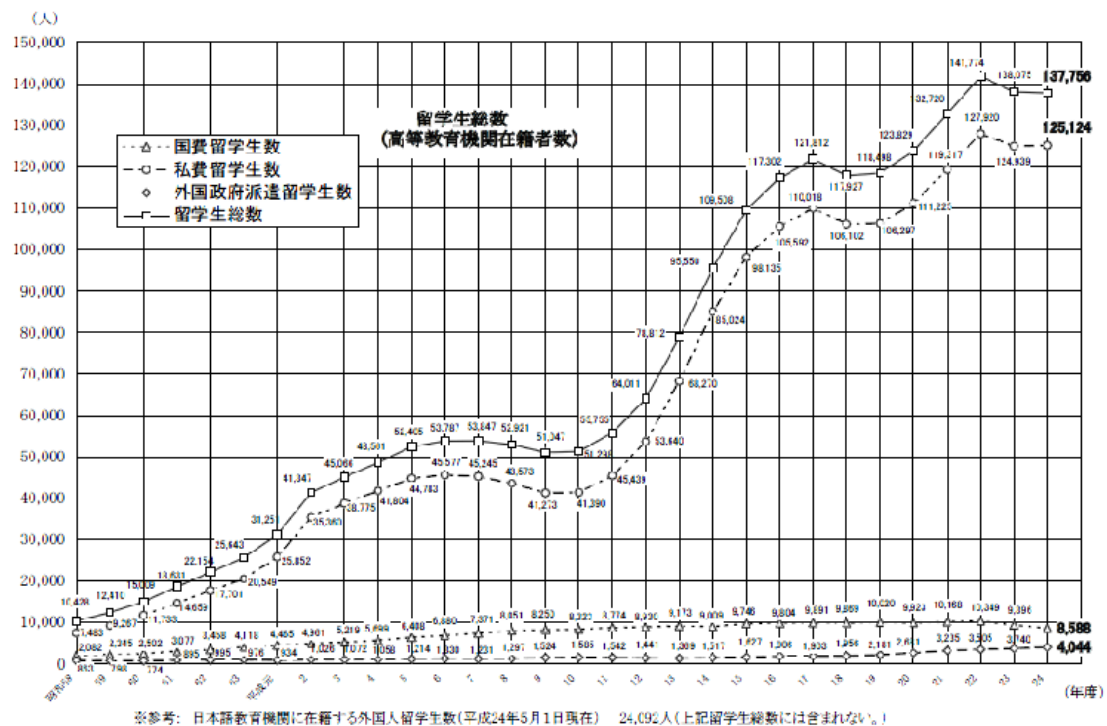
国際センター 国際事業部門

1. 諸論

1983年に中曽根康弘（1918-、首相在任 1982 年 11 月 27 日-1987 年 11 月 6 日）首相の提唱で「留学生 10 万人計画」が始められた。「教育」「友好」「国際協力」のための留学生を 2000 年までに 10 万人の受入れを目標とした¹。この目標は、3 年遅れの 2003 年であった。1993 年以降 5 万人程度のまま伸び悩んでいたが、2000 年以降増え始めて達成した（図 1 参照）。

図 1 留学生数の推移²（2012 年 5 月 1 日現在）

留学生数の推移(各年5月1日現在)



*本稿は、科学研究費助成金「(基代)国際的な態度形成に影響を及ぼす留学 0023653266 H23.4.1～H26.3.31 (研究代表者 森田英嗣)」の助成を受けた。

¹ 当時日本は 8,116 人の留学生であり、アメリカが約 31.2 万人、フランスが約 11.9 万人、イギリス約 5.3 万人、西ドイツ約 5.7 万人であった（寺倉憲一（2009）「我が国における留学生受入れ政策—これまでの経緯と「留学生 30 万人計画」の策定—」）。

² 日本学生支援機構「各種統計、外国人留学生在籍状況」

http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data12.html

2010年7月には、2020年に30万人の留学生受入れを目指す「留学生30万人計画」骨子が策定された。2012年5月1日現在の総数は、13万7756人であり、各校の希望は20万人前後が適正人数³と考えられる。実現するためには、抜本的な改革が必要だろう。

2012年現在、留学生の上位5か国は、中国86,324人(-1,209人(-1.4%))、韓国16,651人、(-989人(-5.6%))、台湾4,617人(+46人(+1.0%))、ベトナム4,373人(+340人(+8.4%))、ネパール2,451人(+435人(+21.6%))と圧倒的にアジアからの留学生が多い。

本学においても、上位3国・地域の順位は同じで、中国90人、韓国14人、台湾9人、タイ7人、フランス3人、オーストラリア3人の順であり、留学生総数は139人である⁴。

日本に比べて台湾では留学は極めて盛んである。日本人の海外への留学生数は、2008年では、66,833人である⁵が、台湾の2012年のそれは、57,859人である⁶。人口比から考えて、5〜6倍の多さと言ってよいだろう。そのうち、日本への留学生数は、6,591人、アメリカ24,818人、オーストラリア12,424人に次ぐ、非英語圏では最大の留学先である⁷。

歴史的文化的にも、地理的にも近い日本は、多くの台湾からの留学生を引き付けており、日本への留学がこのように多くなっている。

本稿では、こうした台湾の留学生のうち、交換留学生の留学動機と留学の効果をインタビューを通じて調査するものである。

2. 先行研究

留学生の調査のうち最も古いものの一つが岩男・萩原（1988）である。1975年と1985年に広範な在日留学生の実態を調査したものである。貴重な調査であるが、この調査は、2度目の調査からでも30年近く経ってしまい現在の意識と同じかどうかは疑問である。台湾では、1987年に戒厳令が解除されたが、この前後で留学に対する意識が相当異なってくるからである。また、この調査では、正規留学生を主な調査対象としており、交換留学生の在日期间が1年であることから、意識の相違を感じさせるものである。

譚・今野・渡邊（2009）では、2008年5月に中国人留学生140人に調査を行っている。その中で、「自律的留学動機づけ尺度」として、なぜ留学をしようと思ったかといった留学の動機づけを測定している。「同一化的動機づけ」は、「専門的な知識を勉強したいから」、

³ 横田雅弘（2006）『留学生交流の将来予測に関する調査研究（平成18年度文部科学省先導的大学改革推進経費による委託研究）』（受託先一橋大学）

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yokotam/publications%20rp%202.html>

⁴ 『2012年大学概要』、p.6による。

⁵ 文部科学省「日本人の海外留学者数」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/12/1300642.htm

⁶ 教育部国際及兩岸教育司「2012年主要国への台湾留学生数」

<http://www.edu.tw/USERFILES/101%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%90%84%E4%B8%BB%E8%A6%81%E5%9C%8B%E5%AE%B6%E4%B9%8B%E6%88%91%E7%95%99%E5%AD%B8%E7%94%9F%E4%BA%BA%E6%95%B8%281%29.PDF>

⁷ 教育部国際及兩岸教育司「2012年主要国への台湾留学生数」

「自分の外国語力を上げたいから」、「自分の将来の夢をかなえるため」という留学の重要性により動機づけられているという内容、「内発的動機づけ」は、「外国で生活することが面白そうだから」、「留学というものは楽しいから」、「外国での勉強は楽しいから」といった留学そのものが楽しい理由である。「取り入れ的動機づけ」は、「外国語を喋らないと恥ずかしいから」、「外国語を覚えなければならないものだから」といった留学が十分内在化されていないまま留学をしている因子である。「外的動機づけ」には、「友人(恋人)が留学したから、私も留学したい」の4つに分類し、対人関係との適応の相関を考察している。

若生・長谷川・中山(2012)では、韓国とアメリカの帰国交換留学生を対象に、2011年8月から9月にかけてインタビューを行い、留学動機と生活に与えた影響、交友関係の構築の仕方を考察している。韓国からの留学生は、日本語専攻学生と教員養成系大学から派遣された交換留学生がいる。そのうち、日本語専攻学生には、「同一化」的理由が多く、教員養成系大学からの交換留学生は単位取得や競争意識から逃れ、「内発的」な「自己決定性の回復」を求める動機が多かった。両者とも日本語学習だけではなく、学内外の活動にも積極的に参加し、結果的に正の留学効果を導いている。アメリカからの交換留学生は、日本語力の弱者に分類されるが、チューターやホストファミリーとの関わりを評価しており、日本人の親和性を高く評価していた。

本稿では、これらの先行研究を踏まえ、台湾からの交換留学生の動機と留学の効果についてインタビューによって考察したい。

3. 台湾の教員養成系大学

台湾の教員養成は、教職課程を教員養成系大学、もしくは一般大学の教職課程を設けている学科で、その履修をした卒業生が半年の教育実習をした上で、国家試験に合格した時点で、教員免許状が授与される。さらに、県レベル（県と同じレベルの省直轄市、さらには省と同じレベルの行政院直轄市もある）の採用試験に合格して、初めて教員になることができる。

教育大学という名称は、初等教育の教員養成系大学⁸であり、2005年にそれまでの師範学院（単科大学）が学部（学院）を3つ以上を設置して改称した。一方、師範大学という名称は中等教育の教員養成系大学である。2013年4月の時点で、師範大学は3校、教育大

⁸ 台湾の高等教育は、高等教育司（局）の管轄する一般大学（と独立学院（単科大学））、技術及職業教育司の管轄する科技大学（と技術学院）、中等教育司の管轄する師範大学と教育大学になっていた。義務教育が12年になるにともない、2013年1月1日に国民教育司（小学校と中学校を担当）、中等教育司（高校と師範教育を担当）が、国民及学前教育署（義務教育と学前教育を担当する庁レベルの機関）となった。国民及学前教育署は、高級職業学校（実業高等学校）も含む高等教育以外のほとんどの学校を所轄することになった。そのため、教員養成は、師資培育及芸術教育司（局）が担当することになった。

学は5校である。

教育大学の前身は、日本統治時代の師範学校が母体となっているものが多く⁹、本学と類似した沿革を持っている。台湾総督府の地方行政区分¹⁰である州ごとに置かれ、最大時で9校¹¹あった。現在では、教育大学として独立しているのは5校である。

師範大学は、校地などで日本統治時代の学校の伝統を引き継ぐものもあるが、中華民国時代（1945年以後）に創立したものである。

国立台湾師範大学	1946年	台北市大安区和平東路一段162号	旧制台北高校跡
国立高雄師範大学	1954年	高雄市苓雅区和平一路116号	
国立彰化師範大学	1971年	彰化県彰化市進徳路1号	白沙書院、彰化青年師範学校
台北市立教育大学	1895年	台北市中正区愛国西路1号	台北第一師範学校
国立台北教育大学	1896年	台北市大安区和平東路二段134号	台北第二師範学校
国立新竹教育大学	1940年	新竹市南大路521号	新竹師範学校
国立台中教育大学	1923年	台中市西区民生路140号	台中師範学校
国立屏東教育大学	1940年	屏東県屏東市民生路4-18号	屏東師範学校

本学は、このうち、2008年2月21日に国立台北教育大学、2010年4月20日に国立高雄師範大学、2010年4月22日に国立台北教育大学、2010年5月21日に国立台湾師範大学と学術協定を結んでいる。また、学生交流も行っており、台湾からは、2008年10月より1年（例外的に半年）の交換留学プログラムを受け入れている。2013年3月末日現在、22名の受け入れをしてきた。本学からの派遣は、まだ無いが、2013年度（台湾では8月1日より開始。ただし、実際に授業が始まるのは9月中旬頃）に派遣予定である。

4. 台湾の教員養成系大学学生の一般的日本語能力

台湾では、高校で第二外国語を履修することが可能である。2012年8月現在、台湾で251校が第二外国語を開講し、そのうち、日本語が1,071クラス39,229人¹²、フランス語240

⁹ 1957年に台湾省立嘉義師範学校が設立された。嘉義県・嘉義市は、日本統治時代は、台南州（現在の雲林県も含む）であった。

¹⁰ 1920年に台北州、新竹州、台中州、台南州、高雄州、台東庁、花蓮港庁および澎湖庁（1926年高雄州より分離）の5州3庁が設置された。

¹¹ 台北市立師範学院（1895年、台北州）、国立台北師範学院（1927年、台北州）、国立新竹師範学院（1940年、新竹州）、国立台中師範学院（1923年、台中州）、国立嘉義師範学院（1957年創立）、国立台南師範学院（1899年、台南州）、国立屏東師範学院（1940年、高雄州）、国立花蓮師範学院（1947年創立）、国立台東師範学院（1948年創立）の9校であった。台北州のみは、台湾総督府台北第一師範学校（現、台北市立教育大学）と台湾総督府台北第二師範学校（現、国立台北教育大学）の2校が設置されていた。

¹² 高校生（実業高校も含む）が約77万人なので、全体の5%程度しか日本語を学習していな

クラス 7,292 人、ドイツ語 152 クラス 4,711 人、スペイン語 164 クラス 4,704 人、韓国語 74 クラス 2,214 人、ラテン語 1 クラス 43 人、ロシア語 1 クラス 38 人、イタリア語 6 クラス 202 人、ベトナム語 24 クラス 634 人、インドネシア語 1 クラス 5 人となっている¹³。

このように、日本語の学習者は圧倒的に多く、数値的には、各校で 4 クラス開講している計算になる。これは、統計的には出てこないが、筆者の経験では、基礎クラスが 3 クラス、進階クラス（初級）クラス 1 クラスが開講されていることが多いように思われる。こうした課程を履修した場合、日本語能力試験 N5 レベル程度の語学力が身につく生徒もいる。1 コマ 45 分で、週 1 回の授業である。

高校の第二外国語最大の受講者を持つ日本語でも 4 クラス平均しか開講できないため、一部の国際学校を除き常勤の日本語教師を 1 校で雇用する事は難しいのが現状である。そのせいもあってか、教員養成系大学では、英語学科（児童英語教育学科なども含む）は設置されているが、日本語関連学科、大学院は置かれていない。そのため、台湾の交換留学生は、日本語が専門ではなく、大学の第二外国語や、街中に多い日本語塾に通い、独学で日本語を学習する人が多い。大学の第二外国語で履修する場合は、1 コマ 50 分を 3 コマ、1 学期は 18 週というのが一般的である。高校で、すでに履修した場合は、初中級クラスを開講している大学もあるため、日本語能力試験 N4 レベル程度まで可能である。

数少ない例としては、学部が日本語関連学科で、卒業後、教員養成系大学の大学院に進学した院生が交換留学生として派遣される場合もある。もちろん、絶対数は少ないのだが、校内で派遣留学生選抜試験を実施すると日本語の成績が突出するため、派遣されてくるのである。通常の日本語関連学科学部卒業生でも、日本語能力試験 N1 レベルに合格している例も珍しくない。大学院に合格しているのは、学部時代優秀であったわけであり、その日本語力は相当高いものである。

また、教員養成系大学も含めて、台湾では 1987 年 7 月 15 日に戒嚴令¹⁴が解除されるとそれまで制約を受けてきた台湾研究が盛んになり、台湾文化を研究する学科、大学院が増えてきた。台湾研究の史料の多くは日本語で記述されているため、こうした学科では、日本語が必修のところも少なくない。第二外国語を別途履修するだけの学生より、日頃から日本語史料を操作しているだけに、学習時間以上の語学力を有していることが多い。

5. 交換留学終了後帰国者へのインタビュー

2012 年 2 月 5 日（日）から 2 月 6 日（月）にかけて、5 名の交換留学修了者に対して台

い。

¹³ 教育部旧中等教育司統計、「歷年普通高級中学開設第二外語課程学校、班別及人数統計表」による。これは、「高級中学第二外語教育学科中心」

http://www.2ndflcenter.tw/class_detail.asp?classid=1 にも転載されている。

¹⁴ 1949 年 5 月 20 日から 1987 年 7 月 15 日まで続いた。

北市内でインタビューを行った。1 対 1 で行い、時間は 30 分から 1 時間であった。

T1 女 大学院

T2 男 大学院

T3 女 学部 3

T4 女 学部 3

T5 女 学部 3

の 5 名である。

(1) 留学の動機

台湾では、1945 年まで日本語教育がなされていたため、交換留学生の祖父母の世代で日本語を話せる人も少なくない。また、日本の歌謡曲やアニメ・漫画などの日本文化に影響されたと回答する留学生が多かった。また、日本旅行でそれが強くなった。

T2 さんはファミコン、T4 さんは日本のアイドルグループがきっかけであった。T1 さん、T5 さんは日本への観光旅行がきっかけで日本文化をより知りたくなったと回答している。T3 さんも、日本人と小学校高学年ごろから私的な交流を続け、それによって留学を決意したと述べているため、台湾からの留学生の多くは、「内発的動機づけ」と考えてよいだろう。これは、筆者も感じたが、2000 年ごろより、それまでの就職や商売のためという理由から、日本文化への憧れという理由に変化したように感じられる。

(2) 日本語能力

台湾からの交換留学生は、派遣校内で選抜があるため、日本語能力試験旧 2 級合格程度以上である。また、漢字文化圏であるので、読解の能力は高い。

T1 さんは大学院で、T3 さんは小学校から日本語の家庭教師を付け、さらに高校の第二外国語を履修し、日本語能力試験旧 2 級に合格している。T4 さん、T5 さんは、大学で英語を学ぶために塾に通いそこで日本語を学び¹⁵、日本語能力試験旧 2 級に合格している。T2 さんは、大学で副専攻¹⁶として日本語学科で履修し、日本語能力試験旧 1 級に合格していた。

¹⁵ インタビュアー注。台湾の語学学校では、英語だけではなく日本語も同時に学べる場所も少なくない。日本語を追加履修しても、わずかな追加料金で学習できることが多い。

¹⁶ 『大学法』(1948 年 1 月 12 日国民政府公布、最終改定 2007 年 01 月 03 日 修正) 第 28 条、『大学法施行細則』(1994 年 8 月 19 日行政院台 83 教字第 32075 号函核定) 第 25 条に規定があり、それに基づき各大学で内容を定めている。通常、該当学科の必修科目のうち指定した 20 単位以上を履修することで、証書が発給される。

(3) 帰国後の日本留学の影響

T1さんは、日本に仕事と私的な旅行で2度来日している。日本語能力試験旧1級に合格たいと希望を語っていた。T2さんは、卒業後、IT関連企業に就職したが、日本で触れたデザイン感覚が仕事に役立っているという。また、就職の際の面接試験では、日本留学が非常に効果的であったと述べている。また、ゼミでの飲み会も、現在の仕事に役立っているという。帰国後、私的に3回日本旅行をしている。T3さんは、台湾の大学院修士課程へ進学した。博士課程への進学も考えており、その場合は、日本留学を考えているという。将来、自分の子供が留学を希望した場合、明確な目標があれば、賛成するとのことである。

T4さんは、帰国し卒業後日本へ再留学し、研究生を経て、大学院修士課程に入学している。T5さんは、帰国後、台湾で日本語専攻の大学院修士課程に進学している。

このように、日本語を活かした進路を選んでいる。学部生3名も大学院へ進学したため、交換留学生全員が大学院修了または在学となり、日本語が直接的間接的（大学院入試の語学試験）に有利に働いている。

また、全員が、SNSを利用し、日本や同時期に他国から来た留学生と連絡を保っていた。

(4) 留学に有意義だった活動

留学プログラムで、日本の文化を理解したいという目的のために役立った活動は、日本人チューターとの交流、地域住民とのふれあいを挙げている。また、同時期に寮で一緒だった他国からの交換留学生との交流は、語学習得上でも役立ったと答えている。日本人とでは、速度や言語の裏の文化背景が分からないため、会話は難しかったという。これは、筆者の留学経験でもそうであって、2年目以降だと母語話者とも会話に慣れるが、1年の交換留学では、やむを得ないものだろう。そのため、T1さんは、日本語を母語としない、留学生同士の方が、会話の練習に役立ったという。これらの留学生間では、SNSを通じて、今でも繋がりを保っていた。また、帰国後も日本との繋がりはあり、1度は仕事関係で、もう1度は、旅行で日本に来ている。また、交換留学中に知り合った日本人家族が台湾へ来たこともあったという。

T2さんは、台湾の大学寮で日本からの留学生と同室だった。自らも、台湾で留学生のチューター経験があるだけに、本学のチューターが個人の資質に依存していることに、不満を持っていた。国際経験が豊富であるが、6回日本へ来たことはあったが、日本以外へ行ったことはなかった。そのため、中国本土からの留学生との交流が新鮮だったと答えている。これらの学生とは、SNSを通じて、現在も交流している。T2さんは、日本語が上手なため、日本で役立ったのは、授業の発表だったという。

T4さんも地域住民との交流が有益だった。交換留学当時の友人とはSNSを通じて、現在も交流を続けている。日本の大学院修了後は、国際交流の仕事をしたいと語っていた。

T5 さんも、交換留学中は、日本人と話すとき緊張してしまい、留学生寮の他国からの留学生との関係の方を評価している。これら他国との留学生とは、SNS を通じて、現在も関係を保っている。現在の専攻が日本語であるため、資料収集のために再来日している。大学院の受験勉強のため教員免許状の取得は断念している。

このように、日本語能力試験 N2 合格者でも 1 年間の交換留学では、日本の授業は難しく、他国からの留学生との交流が有益だったと答えた人が多かった。上級になると、日本人との授業が有益だったとしており、岩男・萩原（1988）にあるように、日本語力の低い留学生は、日本人の「親和性」を高く評価する傾向にある。

(5) インタビューのまとめ

このように、日本留学の動機は、内発的動機付けがほとんどであった。こうしたことから、日本人チューターやホストファミリーとの親和性を評価している。交友としては、チューターとの交流、ホストファミリーとの交流、寮や研修旅行を通じての留学生同士（他国からの）交流などが挙げられている。

語学力は、日本語専攻の学生でなくても日本語能力試験旧 2 級合格の能力を有し、しかも、漢字文化圏であるので、来日後の日本語力の伸展は顕著であった。

また、他国からの留学生との親和性を評価する回答も多かった。お互いに帰国後も SNS を通じて連絡を取り合っていた。しかし、これは、全員が帰国してから間もないということもあり、今後も長期間に渡って交流が続くのかどうかは不明である。また、今回の 5 名の被インタビュー者は、留学期間の時期が数年しか異ならないため、同じ正規留学生（4 年程度）との交流もあるため、個人の資質、関係に起因する部分も少なくない。そのため、留学生間の交流については、一般的なものなのか特殊な例であるのかは留意が必要である。

6. まとめ

台湾からの交換留学生は、漢字文化圏であるため、欧米からの交換留学生に比べて、日本語の語学力は高い傾向にある。来日以後の日本語力の伸展は顕著である。ところが、今回の調査対象者のほとんどは、チューターやホストファミリーとの関わりを評価している。岩男・萩原（1988）では、日本語力の低い留学生は、日本人の「親和性」を高く評価する傾向にあるとしているが、同じ台湾からの交換留学生でも日本語力の低い学生ほどその傾向があるにせよ、比較的語学力があっても、日本人との「親和性」を評価することもある。これは、日台相互の友好関係に起因するのかもしれないし、あるいは、台湾の交換留学生の動機が「日本文化に対する興味」という「内発的」な動機が多かったためなのかもしれない。

しかし、それ以上に、他国からの留学生との関わりを評価している。つまり、台湾の交

換留学生の場合、外国人との「親和性」を評価するということも示唆している。これは、比較的語学力があるということなのか、それとも内発的動機を持って留学したのかは、調査対象が少なく判断はできない。今後の課題としたい。

留学によって、進学、就職に効果があったことが考えられ、日本語専門の学生でなくても好影響が得られたようである。今回は、本学の台湾との交換留学の歴史が短いため、その後の人生の選択やキャリアにどのような影響を与えたまでは分析できなかった。これは、今後の課題としたい。

参考文献

- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生：社会心理学的分析』勁草書房。
- 譚 紅艷・今野裕之・渡邊 勉（2009）「異文化の対人適応における動機づけの影響—中国人留学生を対象に一」『対人社会心理学研究』9:101-108.
- 横田雅弘（2006）『留学生交流の将来予測に関する調査研究（平成 18 年度文部科学省先導的大学改革推進経費による委託研究）』（受託先一橋大学）
<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yokotam/publications%20rp%202.html>
- 寺倉憲一（2009）「我が国における留学生受入れ政策—これまでの経緯と「留学生 30 万人計画」の策定—」『レファレンス』59(2) (697):27-47.
- 若生正和・長谷川ユリ・中山あおい（2012）「日本留学の動機・体験・効果:交換留学生を中心に」『大阪教育大学紀要第IV部門』61(1):169-184.
- 城地茂（2011）「国際化とダブル・ディグリー制度—台湾を中心に」『(大阪教育大学) 国際センター年報』17:15-20.
- 城地茂（2012）「台湾における教育実習の法制と実態」『(大阪教育大学) 国際センター年報』18:8-14.

ドイツの大学における留学支援

ーエアランゲン・ニュルンベルク大学を例としてー

赤木 登代

国際センター 国際事業部門

1. はじめに

ドイツの大学における留学支援制度（派遣・受け入れ）の調査のため、エアランゲン・ニュルンベルク大学（Friedrich-Alexander Universität Erlangen-Nürnberg）を 2012 年 8 月に訪問した。エアランゲン・ニュルンベルク大学は 2001 年以来、本学と交流提携を結んでおり、学術交流および学生交換を活発に行ってきた。調査結果の報告の前にまずはホームページ¹を参考に大学のプロフィールを簡単に紹介しておく。

名称：フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルク

*エアランゲン（Erlangen）とニュルンベルク（Nürnberg）の 2 つの都市に大学の施設がある。ブランデンブルク・バイロイトの辺境伯フリードリヒが啓蒙主義君主として国を動かす優れた官吏を養成するべく大学を創設し、その後辺境伯アレクサンダーが大学の発展に寄与したことから、この二人にちなんだ正式名称を持つ。

沿革：1743 年フリードリヒ大学創立、1769 年フリードリヒ・アレクサンダー大学に改称

学生数：35,363 名、内 2,850 名の留学生在籍（2011 年 12 月 1 日現在）

教職員：12,000 名、内 4800 名が各学科とその管理部門に所属している。

教員：624 名、内 308 名が講座を持つ正教授（W3）、285 名が教授（W2）、そして 31 名がジュニア教授（W1）である。

学部：5 つの学部と 153 の専攻

- ・文学部と神学科
- ・法・経済学部
- ・医学部
- ・自然科学部

¹<http://www.uni-erlangen.de/universitaet/>（2013 年 3 月 20 日閲覧）

・工学部

姉妹校（交流提携大学）：全世界に 500 校

研究協力機関：全世界に 130 機関

年間予算：約 8 億ユーロ

このようにエアランゲン・ニュルンベルク大学は長い歴史を持ちながら、現代においてもドイツ有数の総合大学である。

2. エアランゲン・ニュルンベルク大学における派遣留学

日本においては若者が内向きになり、海外留学者数が減少していることが問題となっているが、ドイツでは逆に留学希望の学生が増加傾向にあるようだ。もっとも人気のある留学先はアメリカである。

ここではエアランゲン・ニュルンベルク大学が制度として留学をどのように支援しているかを報告する。まず、大学全体の留学（派遣・受入）を担当する部門「国際交流局 **Referat für Internationale Angelegenheiten**」があり、さらに経済学部、工学部、そして文学・神学部それぞれ国際係が置かれている。これらの学部の中には、在学中の留学（1 学期もしくは 2 学期）を卒業要件として義務付けている専攻もあり、大学として積極的に留学を支援する体制が整っていることがわかる。

留学を希望する学生のために作成されたパンフレット「国際交流－外国留学への最初の情報」**Internationale Angelegenheiten. Erste Informationen zum Studium im Ausland**を見てみよう。

あなたたちはエアランゲン・ニュルンベルク大学に入学し、在学中に海外留学をやりとげようとあれこれ考えをめぐらしているのではないですか。境界線を越えて見てみたいと思っている、なぜなら今日外国での体験はあらゆる職業にとって欠くべからざるものだ知っているからです。それならあなたがたはまさにわたしたちのところに来るべきなのです。

このように留学を考える学生に手を差し伸べ、さらに留学の有用性を説いている。

外国留学は単に言語や専門の知識をも増やすだけでなく、広い意味で視野を広げ、労働市場でのチャンスを拡大することにもなります。しかしながら、言語力、専門知識、資格、職業上のチャンスなどといったプラスの効果と並んで、ひとつ忘れてはいけないことがあるのです。そのすべてが楽しみをもたらすのだということを！

留学は語学や専門知識を増やし、将来就職に有利になるだけでなく、なにより「楽しい」ことなのだと言われている。そして、新入生向けのパンフレットだけあって具体的なアドバイスがコンパクトにまとめられている。

成功する留学のためには広範囲にわたる、そして長い期間を要する準備が必要です。その際、特に自ら率先して取り組むことが強く求められます。しかし、決して尻込みすることはありません。努力は報いられるのですから！

第一に学生の心構えとして留学には十分な準備が必要なことと自助努力が肝要である旨が述べられている。次に具体的な準備の手順が示される。

留学の準備は外国での勉学には様々なバリエーションがあるということから、それぞれ異なったものとなりますが、しかしたいは次のような段階を踏むことになるでしょう。

- ・留学の目的を定めましょう。研究留学なのか、実務経験を積むためか、あるいは語学力を伸ばすことが重要なのか。あなたの計画を履修プランにどのように組み込みますか。どの期間を留学に充てることができますか。特定の留学先を決めていますか。
- ・エアランゲン・ニュルンベルク大学の交換留学制度を詳しく調べてください。
- ・希望する国と行きたい大学について情報を集めてください。希望する大学が提供する勉学の可能性についてよく調べておくとならば後の応募が容易になります。
- ・資金について考えてください。もし奨学金が必要なら、準備期間がいくぶん延びることになります。
- ・言語やその他のテストの計画を立ててください。(テストセンターのテスト予約がいっぱいになることもありますし、テスト結果が出るまで時間がかかることもありますよ)
- ・奨学金の申請をしたいのなら、指導教員になってくれる人とコンタクトをとりなさい。指導教員となる人はあなたの人柄と学業成績をできる限りよく知っている人でなければなりません。
- ・外国での勉学の成果が認められるかどうかという問題を、こちらの専攻もしくは当該の試験局で明らかにしておいて下さい。
- ・留学したい大学への申請と同じく奨学金の申請については徹底して準備をして下さい。
- ・入学許可を得たのちしなければならないこと：エアランゲン・ニュルンベルク大学の休学手続き、健康保険、ヴィザ、留学先での住まい

続いて、適切な留学時期について熟考を促している。

正しい時期を見つけることが非常に重要です。外国に行く前に少なくともまず2学期間はエアランゲン・ニュルンベルク大学で学ぶのが賢明です。特にあなたが新しい学士コース、あるいは修士コースの学生なら、履修要件をよく調べるようにして下さい。受けなければならない試験ができるだけ少ない学期を留学のために選ぶようにして下さい。指導教員と相談して、特定の試験と選択科目を外国でも受けることができるか、もしくは現地で得た成績をこちらに振り替えることができるかについて情報を集めてください。

あなたの大学での勉学において留学がどのような位置づけになるのかよく考えてみて下さい。あなたがまず第一に既定の年数でエアランゲン・ニュルンベルク大学を卒業したいのなら、1年間留学するよりも1学期間の留学の方が間違いなく簡単にそれを実現できるでしょう。あなたが語学力の改善と留学先での勉学に大きな価値を置き、留学先での成績がすべてエアランゲン・ニュルンベルク大学で認められることがない場合、事情によっては在学年数の延長も受け入れなければならないでしょう。

「ボローニャ・プロセス」によって導入された新たなBA、MAコースでは、以前とは異なり学期ごとに履修する科目が厳密に定められ、既定の在学年数（学期数）で修了することが求められている。留学により、在学年数が延びることがあることに注意を促し、両立のためには1学期間の留学が望ましいと助言している。次は留学の資金面に関する情報である。

留学資金はただ一つの資金源で充足できることはまれです。たいていの場合組み合わせる利用することが必要となるのです。利用可能な資金としては、

- ・ EU のエラスムス・プログラム
- ・ ドイツ学術交流会(DAAD)
- ・ 他の機関やプログラム（たとえばフルブライト Fulbright)
- ・ 財団（たとえばドイツ国民勉学支援財団 Studienstiftung des deutschen Volkes)
- ・ 留学用 BAFöG（ドイツ連邦奨学金)
- ・ 学資ローン

があります。

続いて、留学に関する大学のサポートについて説明している。

わたしたちは提供しています。

- ・ 学内および学外の講演者による定期的な情報提供の催し
- ・ 情報センターにあるパンフレット類。そこには留学をテーマとした各種パンフレット

や参考図書が置いてあります。

- ・オンラインのニューズレターには公募や奨学金プログラムなどが掲載されています。
- ・オフィスアワーには留学に関するあらゆる種類の、さらなる疑問に対して個人的に相談に応じます。
- ・あなたの意志を具体化させるお手伝いをします。

ただし、効率よくアドバイスできるように、相談に来る前にある程度考えをまとめてくることを求めている。

相談に来る前に自分で計画についてある程度考えをまとめてから来て下さい。効果的なアドバイスは、あなたが留学で何を達成したいのかをしっかりとわかっていること、そしてあなたが最低限の情報は自分自身で得る覚悟ができている場合にこそ可能であるのです。あなたはこちらに来る前、問い合わせの際に、はっきりとさせておかなければならない項目に対する質問が書いてあるチェックリストを受け取ります。

次に、第一レベルの情報をどこから入手すればよいかが書かれている。

最初の情報源は、

- ・国際交流局のホームページ
- ・DAAD のホームページ
- ・留学から帰国した学生、または海外での経験を有する教員
- ・自分の所属する学部の国際交流係
- ・あなたの所属する専攻の教員
- ・あなたの所属する専攻の学生サービスセンター

そして、相談の機会が複数用意されていることが知らされる。

別の相談先として、

- ・専攻に特化した助言：あなたの所属する専攻の相談コーナー
- ・成績・単位の認定に関して：当該の試験課
- ・留学中の休学に関して：学生課

また、補足として大学の国際交流の活発さを示すプログラムの紹介が行われている。

最後に、国際的な「バディ・プログラム Buddy-Programm 」について紹介します。

このプログラムでは積極的なやる気のあるドイツ人学生が新たにやってきた留学生に対してエアランゲン・ニュルンベルク大学を知ってもらうお手伝いをしています。

個人の留学相談の窓口は3つに分かれている。

1. 入門と応用コースーアジアとヨーロッパ（エラスムス・プログラム以外）への留学相談
2. 応用コースーヨーロッパ（エラスムス・プログラム）とアメリカ
3. 応用コースーラテンアメリカ（交換留学）とカナダ(CREPUQ)

派遣留学に関する調査は1番の相談窓口を担当するアネマリー・デッパー Annemarie Döpper 氏へのインタビューと資料提供に基づいている。デッパー氏によると、学期期間中は毎月2〜3回のペースで、全学の学生を対象とし、留学に関する様々なテーマを設定してセミナーを開催しているのだそう。例をあげると「外国における留学と実習ープログラムと対象国の紹介」「アジアにおける留学と実習」「アメリカ留学ーフルブライト、交換留学、その他のプログラム」「オーストラリアとニュージーランドにおける留学」「エラスムスーヨーロッパにおける留学と実習」等である。

3. エアランゲン・ニュルンベルク大学における交換留学生受け入れ

2001年の交流協定締結以来、本学からエアランゲン・ニュルンベルク大学へ途切れることなく毎年1名から3名の留学生を派遣してきた。ここでは、交換留学生に特化してその受け入れシステムの特徴を紹介したい。

交換留学生受け入れに関しては、国際交流局のガルツァ氏 Elzbieta Garza にインタビューを行った。ガルツァ氏はポーランド出身でエアランゲン大を卒業生した後、母校で留学生受け入れのコーディネーターをしている。

交換留学生の申請は5つのステップで進む。

1. 派遣元の大学は交換留学生を選抜したら、その名前、滞在期間、専攻、メールアドレスをメールで担当者（ガルツァ氏）に知らせること。
2. 交換留学候補生はオンラインで入学申請し、情報もウェブから得る。
3. 学生はまずオンラインで申請書類をダウンロードし、それに記入する。
4. 申請書類を印刷し、必要書類を添付して郵便で国際交流局宛てに送付する。冬学期入学は5月31日、夏学期は11月30日が締め切りである。*2013年度の申請から必要書類をスキャンしてPDFファイルにして、メールに添付して送る方式に変更された。
5. 書類が完全に揃っている場合のみ、受付される。入学許可に関しては、メールと郵便で知らされる。入学許可証はドイツに来るときに持参せねばならない。

入学許可証が出たら、学生寮を希望する学生は「学生扶助組合 **Studentenwerk**」に寮の申し込みをする。寮は部屋のタイプによるが家賃は 130－230 ユーロ/月程度である。

交換留学生は授業料（500 ユーロ/学期）は免除されるが、寮や学生食堂を運営する学生扶助組合に毎学期 42 ユーロを支払わなければならない。これには地域の交通機関の定期券も含まれている。

留学生の受け入れ条件は EU 加盟国から来たものと EU 以外の国々出身者では数多くの点で異なっている。EU 出身者でないと、海外旅行保険の加入を推奨され、ドイツの健康保険の加入（約 70 ユーロ/月）を義務付けられる。また、留学費用をまかなえることを証明しなければならない。その金額は奨学金と両親からの援助を合わせて 659 ユーロ/月掛ける留学期間分となる。

交換留学生の求められるドイツ語能力は「ヨーロッパ言語共通参照枠 **Gemeinsamer Europäischer Referenzrahmen für Sprachen (GeRS)**」で A2 のレベルを修了していることである。しかし、実際には A2 というのは日常の簡単な会話や文章が理解できるレベルなので、学期が始まる直前（3 月、9 月）に 4 週間のドイツ語のインテンシブ・コース（授業料 320 ユーロ、ただしエラスムス留学生は 200 ユーロ）が設けられ、また学期中も無料の語学コースが開講されている。ただし、一部の理工系の専攻は英語で教育・研究が行われるので、それらに所属する留学生はドイツ語のブラッシュアップは必要ない。

さて、いよいよ交換留学生が入学許可をもらい、寮の申し込みを済ませ、エアランゲン大に到着すると、オリエンテーションが行われる。2012 年冬学期を例に説明すると、この時の交換留学生は約 220 名（エアランゲン 160 名、ニュルンベルク 60 名）で、4 つのグループに分けて 3 日間にわたって様々な手続きを終えたあと、全員に向けた多様なイベントが実施される。グループ 1 の日程を見てみよう。

2012 年 9 月 4 日（火）大学図書館 1 階の展示室に集合

- ・あいさつ、手続き
- ・健康保険 AOK の申し込み
- ・学生食堂のカード購入、食堂で昼食
- ・役所で住民登録

2012 年 9 月 5 日（水）エアランゲン貯蓄銀行（Sparkasse Erlangen）前に集合

- ・銀行口座開設、入学手数料払込
- ・学生扶助組合にて学生寮の賃貸契約書にサイン
- ・エアランゲン市内を案内

2012 年 9 月 6 日（木）国際交流局前に集合

- ・学籍登録とエクスカーションへの参加費の支払い

このようにグループごとに必要な手続きを一緒に進めていく。この際、空港や駅に到着時にも出迎えてくれた「バディ (Buddy)」と呼ばれるボランティアのドイツ人学生たちが付き添って留学生たちをサポートする。これら必要な手続きを終えると全体のオリエンテーションが始まる。その行事は、目的により2つに分けられよう。一つは、実際の大学生活に役立つもので、キャンパスツアー、語学コースのオリエンテーション、アルバイト情報提供会等である。もう一つは、留学生活を楽しむためのもので、居酒屋での定期的に行われる「コンパ (Stammtisch)」や映画鑑賞会、近隣の都市への日帰り旅行 (参加費有料) 等である。

学生はこれらのオリエンテーションに際して、留学生活のあらゆる疑問に答える「情報セット (Info-Paket) (ドイツ語版・英語版)」を受け取る。これには、

- ・各種手続きのやり方

- ① 住民登録 ②健康保険 ③学生登録 ④滞在許可 ⑤アルバイト許可

- ・国際交流局のオフィス・アワー

- ・学生寮について

- ・重要な情報とネット・アドレス

- ・アルバイトに関する注意一年間 120 日 (半日なら 240 日) のアルバイトが認められているが、それには労働許可証 (Arbeitserlaubnis) と所得税記録簿 (Lohnsteuerkarte) が必要である。

- ・緊急時の電話番号一覧 (警察、消防、タクシー、救急車、電話局、救急薬局、鍵の救急車、救急の歯科医、大学病院等)

- ・各種相談窓口 (心の悩み、薬物依存、妊娠、電話相談等)

- ・自転車利用に関して

- ・公共交通機関 VGN、KHG、ESG およびドイツ鉄道 DB について

- ・「病気になったら？」

- ・インターネット利用の手引

- ・ドイツにおける携帯電話の使用方法

- ・観光パンフレット

- ・市街地図

が含まれている。

4. まとめ

以上、国際交流局の担当者2名へのインタビューと彼女ら二人から得た資料をもとにエアランゲン・ニュルンベルク大学の留学生派遣および受け入れシステムの概略を説明した。ドイツの大学においては、留学生の派遣・受け入れの両方が限られたスタッフながら、制

度が整っており、効率よく実施されていることがわかった。日本の留学支援と比較するともっとも特徴的なのは、とにかく留学には学生自身の自主性がもっとも大切だと強調していることであろう。

付記：この調査は科学研究費補助金の採択課題「国際的な態度形成に影響を及ぼす留学経験の比較研究（2011－13 年度）」（研究課題番号：23653266）により実施したものである。

オーストリアにおける「子ども虐待防止」の取り組み

ー2011年9月と2013年3月の訪問調査からー

中山 あおい

国際センター 国際教育部門

1. はじめに

オーストリアでは、児童虐待は“Gewalt an Kindern”というドイツ語で表されるが、これを直訳すると「子どもに対する暴力」となる。ただし、その定義は「身体的虐待 (körperlich Misshandlung)」、「性的虐待 (Sexuelle Gewalt)」、「心的、身体的ネグレクト (Seelische und körperliche Vernachlässigung)」、「心理的虐待 Psychische Gewalt)」となり Gewalt (暴力) という言葉には幅広い意味が込められていることがわかる。例えば“Gewalt an Schulen (学校での暴力)”といえ、校内暴力や、身体的、心理的いじめも含まれる。さらに、オーストリアでは、両親の間の“Gewalt”も、子どもの成長に悪影響を与えるものとして、児童虐待に含まれている。また、オーストリアでは国連で採択された「子どもの権利条約」も 1992 年と比較的早く批准しているが、それは児童虐待に対する市民の危機感が強かったためと言われている¹。ウィーン市の青少年福祉担当部局は MAG11 と呼ばれるが、そのソーシャルワーカーであるスザンネ・ピヒラー (Susanne Pichler) 氏によれば、2011 年にはウィーン市内だけでも青少年福祉のソーシャルワーカーが対応した虐待は 10,518 件に登り、その 15%が身体的虐待、30%が心理的虐待、2%が性的虐待であり、そして半数以上の 53%がネグレクトであった。このように虐待通告の件数は決して少なくない。また、MAG11 によれば、子どもの家族や友達、近所の人々からの通告が増えているという²。こうした虐待への市民の危機感をもとに、オーストリアでは虐待防止の試みが進んでいる。

ここでは、オーストリアにおいて、どのように“Gewalt an Kindern”に対する取り組みが行われているのか、2011 年～2013 年の訪問調査結果をもとに検討したい。

2. 児童虐待に関する法制度

1989 年にオーストリア議会は、スウェーデン (1979)、フィンランド (1983)、ノルウェー (1987) に次いで 4 番目に、子どもへの暴力や身体的、心的苦痛をともしう子どもへのしつけを違法と定めた (§146 ABGB)。それまでのオーストリアにおいても、1975 年

には「親のしつけの権利 (elterliche Züchtigungsrecht)」を法的に定め、「家庭におけるしつけは、子どもの身体に害を及ぼすような虐待 (Misshandlungen) に至るようなことがあってはならない」と制限しており、1974 年の学校教授法、1982 年の連邦法においても、身体へのしつけ (体罰) や暴言は禁止されている。しかしながら、1989 年の「子どもの権利の改革 (Kindschaftsrecht-Reform)」までは、「未成年の子どもは親の指示に従う」ものとされ、「親はその指示を遂行するために、子どもの年齢や、発達段階、人格を顧慮しなければならない」とあり、その手段としての身体的、心理的な苦痛をとまなう「しつけ」も許容されるのではないかという解釈の余地を残していた。それが 1989 年に「子どもへのいかなる暴力 (Gewalt) や身体的、心的苦痛をとまなうしつけを行ってはならない」と明示されたことにより、子どもの養育において“Gewalt”が完全に禁止されることになった。同年、青少年福祉法においても、「未成年の世話や授業等を行う施設や公的機関は、特定の子どもに対する危害を防ぎ、回避するために青少年福祉担当者に事実を通告しなければならない」と定めている。こうした法の流れは、1997 年の「家庭内暴力保護法」にも受け継がれ、家庭内暴力から子どもを守ることに力点が置かれている。

1989 年の法の改定の前後で家庭にける体罰の頻度を比較した調査によると (表 1)、6 歳以下の子どもをもつ母親において、よく軽い体罰を行うと答えたものが 1991 年には 30, 5%だったのに対し、2008 年には 4.1%に減少している。父親も同様に 17.0% (1991) から 2.2% (2008) に減少している。また、重い体罰に関しては、一度もないと答えた母親は 67.5% (1991) から 77.6% (2008)、父親は 69.0% (1991) から 78.2% (2008) へと増加している。

表 1

			6 歳以下の子ども をもつ母親 (%)	6 歳以下の子ども をもつ父親 (%)
軽い体罰 (例、平手打ち)	一度もない	1991 年調査	8.5	15.6
		2008 年調査	31.4	33.9
	よくある	1991 年調査	30.5	17.0
		2008 年調査	4.1	2.2
重い体罰 (例、打撲、物でたたく)	一度もない	1991 年調査	67.5	69.0
		2008 年調査	77.6	78.2
	よくある	1991 年調査	4.0	5.2
		2008 年調査	1.7	1.1

出典) Bundesministerium für Wirtschaft, Familie und Jugend(2009), *Familie-Kein*

Platz für Gewalt! (?), S.35

このように、軽い虐待が大きく減少するとともに親の虐待に関する意識の変化が読み取れ、虐待防止のための法的整備は一定の効果があったと言えるだろう。さらに 2013 年には、「子どもの幸福 (Kinderwohl)」について、以下の項目が重要であると連邦法には記されている (§138 ABGB)

- ・子どもの適切な世話、特に栄養、医療や衛生、居住場所を伴う世話と、きめ細やかな養育
- ・子どもへの配慮、安全、子どもの心身の統合 (バランス) を守る
- ・親は子どもを尊重し受け入れる
- ・子どもの素質、能力、興味、発達可能性を促進する
- ・子どもの理解や考える能力に応じて、子どもの意見を考慮する
- ・子どもの意思に反することをさせることで与える苦痛を防止する
- ・自分もしくは大事な関係者への暴力に苦しむ危険を避ける
- ・両親や子どもにとって重要な関係者とのつながりを確保する
- ・(両親が不仲な場合) どちらかの親への忠誠心に葛藤する、あるいは、悪いのは自分だと子どもが感じないようにする
- ・子どもの権利、要求、関心を守る
- ・子どもやその親、その他の子どもをとりまく生活環境を確かなものにする

このように、子どもに対する親の行いについて、親の不仲による子どもの心的苦痛まで言及し、それを阻止するためにきめ細かく法に定められている点に、オーストリアの児童虐待に対する姿勢がうかがわれる。

ウィーンでは MAG11 を中心に、親への相談や支援、親の教育 (Eltern-Bildung) を行っている。また、所得の低い家庭や親が一人の家庭に対しては 2009 年 9 月から、保育施設等での食費を無料にしており、2011 年にはその総額は 5,089,275 ユーロに上った³。

3. 学校の取り組み

学校においては前述の 1989 年の青少年福祉法において通告の義務が定められており、さらに 1986 年の学校教授法においては、養育者がその義務を明らかに果たさない場合、校長は少年福祉局に通告する義務があると記されている。実際、MAG11 によれば、2011 年の通告の 30% は警察、24% は他の機関や当該児童の家族から通告され、16% が幼稚園や学校からの通告であった⁴。この数値から、幼稚園や学校が虐待を発見するケースは少なくないと言えるだろう。また MAG11 は「学校と青少年福祉事務所」というパンフレットを教師のために作成しており、そこには学校との協働の重要性が書かれているだけではなく、虐待を受けている恐れのある子どもの前兆等について記され、さらに教師が通告す

るためのフォームが添付されている⁵。

このように虐待の防止や発見において、学校の果たす役割が期待されているが、学校ではどのような取り組みがなされているのであろうか。

(1) 経済・家族・青少年省 (Bundesministerium für Wirtschaft, Familie und Jugend) の聞き取り調査から

経済・家族・青少年省のマリア・オルトホーファー (Dr. Maria Orthofer) 博士は虐待防止のために必要な教育について、以下のように語った。

予防のためには、第一に、子どもを人格として強く育てていくことが大切である。第二に、小さいときから性教育をすることである。子どもが何をされているかはわからないから教えていくことが必要である。第三に、幼稚園のときから、コンフリクトを暴力なしに解決する力を学んでいくことが大切である。

今の子どもはインターネットの発達などで、コンフリクトの解決能力が落ちているのではないかと考えている。家はコントロールできないので、学校で暴力は解決にならないことを学ぶことが大切である。学校できちんと学んでいけば、暴力によらない解決ができるようになると考えている。

また、子育てに関わって、北欧は昔から男女同権がなされていて、子ども達がお互いに尊重することを学んでいる。ここでも、北欧と同様に子育てにおける暴力を禁止している。1979年にスウェーデンが禁止し、フィンランド、ノルウェーに続いて、オーストリアは4番目に禁止した。昔に比べると、体罰はいけないと考えている親は増えている。

虐待の要因はコンフリクトを暴力なしで解決する力がないためだと理解している。やるが多すぎて、またパートナーとの向き合い方も難しく、体罰をしてしまうことがあると考えている。

教員養成としては、コミュニケーションとコンフリクトトレーニングが必要であると考えている。情報教育よりは、コンフリクトトレーニング授業が大切である。

このように、オルトホーファー氏は虐待防止のためには性教育の他にもコンフリクトをコントロールする教育が重要であることを繰り返し語ったが、どちらも小学校においては Sachunterricht (事実教授) という日本の生活科に似た教科で扱われている。以下、Sachunterricht の教科書に着目して検討してみたい。

(2) Sachunterricht

ここではまず、Sachunterricht についての学習指導要領 (Lehrplan der Volksschule)

について検討したい⁶。Sachunterricht はオーストリアの小学校 1 年から 4 年までに教えられる必修科目で、内容は①共同体社会（Gemeinschaft）、②自然、③空間、④時間、⑤経済、⑦技術（Technik）からなる。「空間」では、住んでいる場所から始まり、市や州、オーストリアと、より広い地域について地理の知識とともに学習していく。「時間」は過去から現在までの社会的、政治的、経済的、文化的な発展を扱う。

性教育は、「自然」のなかに組み込まれ、「人間の性についての基本的な知識とポジティブな姿勢」の育成が目指されている。具体的には、体の部位の名称や、男女の身体の相違、成人するまでの体の変化と心への影響、妊娠、出産を扱う。具体的に教科書“Tipi”⁷とその指導書を見てみると、2 年生ですでに男子と女子の身体の違いが絵で示され、乳幼児から小学校に入学するまでの子どもの発達を写真で振り返る学習が含まれている。3 年生では成人になるまでの男女の身体変化、受精卵から出産の過程の知識、そして最後に乳幼児を世話する親の写真から、親と子どもの気持ちについて話し合う活動へと展開する。4 年生の教科書では、さらに「Nein sagen（ノーと言う）」という項目があり、自分の身体を守るために、煙草や飲酒を勧められた時だけではなく、虐待の恐れのあるときに「ノーと言う」必要性が描かれている。また、信頼できる人に相談するように促している。4 年生の指導書には「自分の身体を守る意味を知る。（子ども自身の）権利、ノーと言うことを学習する」と学習目的が記されている。

他の出版社の 4 年生の教科書“Lasso”においても性教育は「自然」で扱うが、「ノーと言う」という学習項目は「共同体社会」のなかで学習される⁸。そこでは「子どもが幸せだと感じない絵はどれですか」という設問の下に、いくつかの絵があり、さらに「どんなときにノーと言いますか」という設問が続く。また、「ノーと言っても効果がない時に、相談できる人を少なくとも 3 人考えましょう」とあり、ここでも他者への相談を促すとともに、子ども相談の電話番号が記載されている。さらに、「子どもの権利」という学習項目が続き、国連の定めた子どもの権利条約と、それを祝う「子どもの権利の日」（11 月 20 日）についての説明、さらにその日にどのような活動を行って祝うことができるか、絵で示されている。例えば、子どもの権利条約について、世界の子どもの生活環境について、あるいは子どもの権利の歴史についてポスター発表をしている絵や、エレン・ケー、モンテッソーリ等の子どもの権利に関連の深い人物、オーストリアにある里親施設「SOS 子どもの村」等、子どもの権利に関する様々な言葉が絵とともに記されている。この絵から、子どもがこれらの言葉の意味や歴史を調べ、子どもをとりまく様々な環境や、子どもの権利について知識を深める学習へと発展することも可能だ。

また、オルトホーファー氏が虐待防止のために必要だと挙げている「コンフリクトを暴力なしに解決する力」については主に「共同体社会」で扱われている。前述の“Tipi”の 2 年生の教科書では「家族」や「近所の人々」が学習項目となっており、多様な家族の形態

と様々な出身者からなる近所の人々が描かれている。そして、教師の指導書の目標に「互いに対する寛容を育てる」ことが挙げられている。また3年生では「世界の子どもたち」「だれもが違っている」「友だち」が学習項目となっており、指導書にも「他者を異なるものとして受け入れ、尊重する」ことや「問題解決のストラテジーをつかう」ことが学習目標として記されている。「だれもが違っている」では、「他者と協働するときには、それぞれの特性や性質を容認することを学ぶ」ことが目指されている。さらに「もう君とは話さない」という学習項目では、喧嘩やコンフリクトの場面が描かれ、それについて子どもたちはどのように助言すべきか、どうしたら解決できるのか、話し合いながら解決していくように促されている。発展学習としては、クラスで起きる喧嘩やもめ事を1週間ノートに記録し、クラスで一緒に解決方法を話し合う活動が紹介されている。そして、4年生ではオーストリアには様々な出身の人々が暮らしていることや移民の歴史を学習する。さらに「だれが私を理解するの」という学習項目では、それぞれの好みや関心が異なること、それが理解されず、誤解されることがあること、それが喧嘩につながるものが描かれている。指導書の学習目標には「他者の好みを尊重すること」とある。

このように家族から近所の人々、友だち、クラスメートなど子どもが接する人々との関係について考えさせ、問題があるときに話し合いで解決するように子どもたちは促されている。さらに、移民を含めた人々の多様性について低学年から触れられているのも、オーストリアに特徴的であり、多様性を認めること、違いを受け止めることから、個々人への尊重が生まれるという思想が教科書を通して見えてくる。

(3) 暴力防止プログラム（文部科学省での聞き取り調査から）

文部科学省のビアトリクス・ハラー博士（Dr. Beatrix Haller）によると、2008年から暴力防止のための戦略をウィーン大学が中心になって行っている。思春期の子どもや小さな子どもに対するプログラムがあり、様々なレベルがあるが、例えばいかに怒りとつきあうか（アンガーマネジメント）やエンパシーなど、基本的なスキルを育てることを目指している。そのために教師用の研修がある。それは、暴力とは何かを気付かせるプログラムであり、教師の社会性を強めることが目指されている。また、子どもの社会性も強めることが必要である。

学校と劇場が提携したプログラム（Theater Projekt、「学校を劇場にしよう」というスローガン）があり、暴力やいじめをテーマに劇場と学校が提携し、劇場の監督に協力してもらい、子どもが演じ、一つの劇を作っていく。そうすることで生徒は、先生と生徒と親がいかにうまくいくかを考えていくものである。このプログラムに対しては、文部科学省が賞を与え、助成金を出している。

また、いかにお互いにつきあっていくかを考えさせる授業プロジェクト（Unterecht

Projekt : Ich weiß, Ich kann, Ich tun. 「私は知っている、私はできる、私は行動する」)があり、学校状況に応じて子どもが学校をよくしたいと考えるテーマを選び、授業で互いにインタビューをする。そして、自分は何ができるかを子ども達に考えさせる。また、有能感を育てることが大事である。

さらに、学校ではピアエデュケーションが重要である。ピアチームは4-6人の子どもで行う。10歳以下は出来ないので10歳以上で実施する。600校くらいの学校で実施している。ピアはストレスがかかるので、教員は支えなければならぬし、ピアを指導する教員は養成を受けていなければならない。

これらのプロジェクトの拡大のため、文部科学省ではホームページ、情報提供、ネットワーク作りを行っている。

以上のハラー博士の言葉から、オーストリアでは暴力防止のプログラムが様々に開発され実践されていることがわかる。Olweus (2006) の調査によると、オーストリアの初等教育と中等教育の生徒の15%が「時々」いじめの加害者もしくは被害者になったことがあると答えており⁹、暴力防止に力点をおいている実情がうかがえる。

4. おわりに

以上、オーストリアの虐待防止の取り組みについて、法的整備と学校で行われている授業 *Sachunterricht* に着目して述べた。虐待防止に関しては、学校では授業の他にも外部の民間団体、例えば“Happy Kids (子ども虐待と暴力予防のための協会)”を学校に招き、同団体が開発している虐待防止プログラムを出前授業として子どもたちに実施することもある。また、学校では様々な暴力防止プログラムが開発され、実施されていることがわかったが、暴力防止プログラムの力点はいじめや校内暴力に置かれているため、これが、虐待防止にもつながるという意識をどれだけの教員がもっているのか疑問が残る。文部科学省のハラー博士は、家庭の中での暴力と学校の中での暴力との関係について、「家庭で出来ないことを学校で予防することが大切である。人とどうつきあうかを学校で教えることが大切である。学校でこのような授業を受けた子は将来、虐待をしないと考えている」と語ったが、今度、暴力防止プログラムと虐待防止プログラムの接点を考えていくことも必要なのではないだろうか。

今回の調査を通して、オーストリアでは虐待に関する法的整備が進んでいる点が明らかになった。さらに学校教育においては、性教育の必要性や「ノーと言えること」、そのために子どもの権利について自覚させるとともに、コンフリクトを暴力なしに解決する力を育てることなどが大切であると考えられていることが確認された。

註

1. 東京都政策報道室広報部「オーストリア・ウィーン/性的虐待など封じ込めへ先進的取り組み（子どもの権利保障）」『政策情報 海外特集号（13）』1999、38 頁
2. MAG ELF, *Mag Elf 2011 Jahresbericht der Mag Elf-Amt für Jugend und familie*, 2011,S.11
3. ebenda,S.26
4. ebenda,S.11
5. MAG ELF, *Kooperation Schule-Jugendamt*
6. Ministerialrat Dr. Willi Wolf, *Lehrplan der Volksschule*, Leykam, 2011
7. Hilde Köster, *Tipi 2 Sachunterricht zum Forschen, Fragen, Staunen*, Veritas, 2009
Hilde Köster, *Tipi 3 Sachunterricht zum Forschen, Fragen, Staunen*, Veritas, 2009
Hilde Köster, *Tipi 4 Sachunterricht zum Forschen, Fragen, Staunen*, Veritas, 2009
8. Horst Bartnizky u.a., *LASSO Sachbuch 4 mit Regionalseiten Salzburg*, Öbv, 2011
9. bm:uk, *Gewaltprävention in der Schule Informationen und Materialien*, 2007

参考資料

Bundesministerium für Wirtschaft, Familie und Jugend, *Familie-Kein Platz für Gewalt! (?) 20Jahere gesetzliches Gewalt in Österreich Vergleichende Untersuchung Österreich - Deutschland - Schweden - Frankreich -Spanien*, 2009

本稿は、平成 23 年度～25 年度科学研究補助金基盤研究 B（研究代表者：岡本正子）「『子ども虐待防止の実践力』を育成する教員」の調査結果の一部である。

韓国の教育大学からの海外インターンシップ受け入れ：

その効果と意義

若 生 正 和

国際センター 国際教育部門

1. はじめに

グローバル化の進展に伴い、自国の文化・社会と海外との比較は日常生活のあらゆる場面で行われるようになっていく。絶えず発展が求められる教育現場でも他国との比較は、教師が自らの指導法や教育理念を客観視するのに有効なのではないだろうか。

大阪教育大学では国際センターが受け入れの窓口となり、海外協定校の教育学専攻の学生を中心に、日本の学校現場を観察・体験できるように学校見学の機会を提供してきた。本校で取り上げるソウル教育大学のグローバルインターンシップ¹⁾もそのうちの1つである。

ソウル教育大学グローバルインターンシップは同校からの委託を受け、2010年度から始めたプログラムである。2011年1月に実施した第1回目は約2週間の期間で小学校実習のみのプログラムであったが、その時に明らかになった様々な問題を考慮して2011年度（2012年1月から2月実施）からは約4週間のプログラムに発展させ、現在まで継続してきている。2013年度までに4回実施してきたが、本稿では2014年1月から2月に実施した第4回目のグローバルインターンシップを例に内容を整理し、教育実習を含む日本文化研修の受け入れの効果と意義について考察する。

2. ソウル教育大学グローバルインターンシップの概要

ソウル教育大学からグローバルインターンシップを受け入れるようになった経緯については若生（2011）に整理した。初回となった2010年度のプログラム（2011年1月実施）はソウル教育大学の要望通りに2週間のプログラムとし、そのほとんどの日数を小学校での教育実習（韓国の教員養成カリキュラムとは関係の無い観察主体の実習）に充てた。しかし韓国から渡日してすぐに小学校に配置し、実習を開始することにより生じる問題がいくつか判明したため、翌2011年度のプログラムからは期間を約4週間（26日）に延長し、小学校配置前の準備期間に充てることにした。この前半2週間では、教員養成課程の授業で日本の大学教育を体験しつつ、日本語運用能力を向上させ、プログラム全体及び後半の小学校実習の目標を明確化できるように日程が組まれている。また、学生の立場からはこ

の期間に日本人の友人を作り、大阪や周辺地域の史跡等を訪問・見学することで日本文化をじっくり学ぶことができる期間でもある。

参加学生の日本語能力であるが、小学校実習で教員や児童と日本語である程度の意思疎通が必要だと考えられるため、2012 年度まではソウル教育大学側で日本語能力試験 2 級 (N2) 程度という基準で参加学生の募集・選考を行った。実際に申請・参加した学生は必ずしもこちらが指定する語学力に達していない場合もあったが、日本語能力試験 1・2 級取得者と中級程度の日本語会話能力を持つ学生がほとんどであった。それに対し、2013 年度は日本語能力試験 2 級以上の受験・合格者が少なく (2 名)、日本語学習経験がほとんど無い学生も含まれていたため、大学での研修期間後半の多くを日本語集中講座に充てた。2013 年度の全体日程を資料 1 として添付する。

3. インターンシップ参加学生の動機・目標

2013 年度のインターンシップでは、2 日目 (1 月 15 日) にプログラムの参加動機と、期間中の目標について「大学研修の目標」、「小学校実習の目標」、「その他の目標」の 3 項目に分けて考え、記録する時間を設けた。その内容を以下に整理する。

(1) 参加動機

- ・メディア (アニメ、ドラマ、歌、野球) を通して日本・日本語に関心
- ・日本語学習
- ・日本文化体験
- ・日本の小学校実習 (日本の小学校を知る、日本の授業から学ぶ)
- ・大阪教育大学での生活体験
- ・総長や友人からの推薦・紹介

(2) 大学での目標

- ・友人作り、日本の友人・大学生との交流
- ・日本語学習
- ・日本文化体験
- ・日本での大学生活体験
- ・韓国文化紹介

(3) 小学校実習の目標

- ・日本の小学校の授業内容・形式などを知る
- ・日本の小学校の良い点を学ぶ

- ・日韓の小学校の比較
- ・日本の小学校の児童との交流
- ・児童が韓国に親しみを持つようにする

(4) その他の目標

- ・大阪と周辺地域の探訪・見学
- ・日本人の友人作りと交流
- ・インターンシップ参加者同士の交流を通しての自己発展

参加の動機を見ると、メディアを通して日本文化（アニメ、ドラマ、歌、野球）に触れたことで日本語、日本文化に関心を持ち、今回のインターンシップ参加につながっている学生が多い。ソウル教育大学の教育実習中心のプログラムとは言え、この点は他の留学生と同様の傾向が見られる。また、ソウル教育大学の総長や学生からの推薦・紹介がきっかけになった学生もあり、回を重ねることで送り出し大学においても好意的に評価されている様子が窺われる。

大学での目標は、日本語学習や日本文化体験の他、「友人作り、日本の友人・大学生との交流」を挙げる参加者が多かった。(3) の回答に見られる「日本の小学校の児童との交流」と合わせ、日本人との交流に期待する参加者が多い。また、少数だが「韓国文化紹介」を大学での目標に挙げる学生もいた。

小学校実習の目標は「日韓の小学校の比較」、「日本の小学校の授業内容・形式などを知る」、「日本の小学校の良い点を学ぶ」というように、教員養成課程の学生が当然関心を持ちそうな回答も多かったが、「児童が韓国に親しみを持つようにする」という回答も見られた。先の(2)で指摘した「韓国文化紹介」とともに、日韓両国の相互理解の深化のために、積極的に自国文化や自分たちの考え方を紹介しようという姿勢が現れている。

4. インターンシップの体験と学び：感想文と日誌の分析

インターンシップ期間中、大学での研修については簡単な日誌（国際センター作成の様式使用）と2週間経過時点での感想文を書かせ、小学校実習中は国際センターで作成したA4サイズの様式を用いて毎日1枚ずつ日誌を書かせた。大学研修中、小学校実習中ともに、毎日夜11時までにその日に書いた日誌を写真に撮ってSNSに投稿させ、確認した。また大学研修日誌、小学校実習日誌ともにインターンシップ終了時に提出させ、コピーを作成した。以下、主に大学研修については感想文、小学校実習については日誌を通してインターンシップ参加学生が何を体験し、どう考えたのかを記述する。

(1) 大学研修

大学研修中の感想文で、まず多く見られるのがチューターに関する記述である。ソウル教育大学グローバルインターンシップでは、第2回から、主に大学研修中の学習・生活のサポートをする目的でチューターを配置している。今回もインターンシップ生1名に大阪教育大学学部生1名をチューターとして付けていた。

ほとんどのインターンシップ生は「チューターが親切、役に立った」と書いている。国際センター側がチューターに主に期待しているのは日本語学習支援（会話練習など）であるが、それだけにとどまらず、週末に大阪府内や周辺地域に見学に行く際も同行し、案内していた。インターンシップ生とチューターが会った回数も、ほとんどの場合5回以上であり、チューターも韓国の学生の友人として交流を楽しみながら活動していたと思われる。今回のチューターは2013年9月に実施した韓国文化体験研修（ソウル教育大学）に参加した学生が多く、その後も過去に韓国人学生との交流経験がある者がそろっていたので、チューター側にも積極的に活動する動機づけがあった。それが結果としてインターンシップ生のチューターに対する高い満足度につながった。

次に、授業についての感想を見てみたい。今回のインターンシップでは、通常開講されている教員養成課程の科目である「社会」（2回）と「アジア理解教育」（1回）、教養基礎科目「韓国の言語と文化」（1回）、留学生対象科目の「日本の文化と教育（Japanese Culture and Education）」（1回）に参加した。「社会」は1回目が通常の受講生とのグループディスカッション、2回目が「社会」受講生を前にした韓国文化紹介の発表であった。「韓国の言語と文化」では週末の「日本文化自立研修」の成果をパワーポイントでまとめて発表した。また「アジア理解教育」では教員が準備した韓国の絵本を日本人学生と一緒に読み、その内容についてディスカッションを行った。「日本の文化と教育」は留学生対象の英語による授業で、インターンシップ生が参加した回は学期末の学生発表が行われ、インターンシップ生はその発表を聞き英語で質疑応答に参加した。

これらの授業のうち、「社会」と「アジア理解教育」は日本人学生との出会い・対話の場所として機能したようである。これらの授業で、これまで韓国に強い関心を持たないで北日本人学生と、韓国文化について話を分かち合うことは、日本人学生の考え方を知るとともに、自国文化紹介の機会にもなり、チューターとの交流とはまた違う満足感をインターンシップ生に与えたものと思われる。

一方、「社会」の2回目と「韓国の言語と文化Ⅱ」では日本人学生の前で日本語による発表を行った。これは日本語学習の観点から有益だったと考えているインターンシップ生がいる一方、日本語能力があまり高くない学生たちにとっては負担の大きい課題だった。しかし、難しい課題に挑戦し、失敗したと感じながらも、その過程から日本語を学び、また日本語を使うことに対する自信を深めてもいるようであった。

(2) 小学校実習

小学校実習について、ほとんどのインターンシップ生は「日韓の小学校の比較」しつつ「日本の小学校の授業内容・形式など」を知り、「日本の小学校の良い点を学ぶ」ことを目標としてあげていた。彼等は実際、何を観察し、どのように学んでいたのだろうか。以下、学生の実習日誌から一部を抜粋する。

- ・校門に立っての朝のあいさつ（児童に礼儀正しさを模範となって示す）
- ・教師と子どもたちとの距離の近さ（教師が児童の名字・名前に「さん」を付けて呼ぶ一方、児童は教師に敬語を使わない）
- ・ゲームを使った体育の授業
- ・荒れた児童がいても忍耐強く授業を進める教師の姿勢
- ・低学年で児童が集中できるように教師が全身で大げさに表現する様子
- ・低学年で子どもたちが答える時間を十分に与えて配慮している姿
- ・音楽の授業で児童が楽しんで学ぶ姿勢
- ・教師は一見厳しくなさそうなのに子どもたちが規律正しく行動する様子

インターンシップ生たちは、教師と児童の双方から、自分たちが教師となった時に適用すべきことを見だし、学んでいたようである。

その一方で、自国の教育現場と比較して、客観的・批判的（批難的ではない）に観察する姿勢も見られる。例を挙げると、外国語（英語）の時間に「ネイティブスピーカーが話す内容を日本人教師が通訳してしまうため、児童が英語を使う機会を少なくしてしまっている。」と記録した学生をはじめ、韓国の方が初等教育における外国語（英語）教育は進んでいると記した学生が数名見られた。初等英語教育については 1990 年代からの蓄積がある韓国の方が、学生の視線からも一日の長があると見えたかもしれない。また、ICT 教育の基盤となるコンピューターと大型液晶モニターが韓国ではほぼ各教室に設置されているのに対し、日本の小学校ではまだ未設置の場合が多いなど、施設面で韓国の方が整備されていると感じられる部分もあったようである。

このように、冷静に日韓の小学校現場を観察し、英語教育や ICT 教育環境など韓国の先進性を確認しつつも、教師が児童と関わる姿勢や授業の指導法などについては素直に感心し、多くのことを学んでいたことが指導日誌から窺うことができた。

ところで、小学校実習の目標として「児童が韓国に親しみを持つようにする」と書いていた学生たちがいた。彼等の目標は達成できたであろうか。実は、指導日誌に「児童から『竹島』といわれて驚いた」と書いた学生がいた。おそらく言われた直後は心穏やかではいられなかったと想像するが、この学生をはじめ、同じ小学校で実習したインターンシッ

プ生たちはその後も実習日誌で子どもたちが「純粹」で「かわいい」という記述を繰り返している。そのようなインターンシップ生の気持ちが伝わったのか、小学校実習終了時には皆が児童たちと手紙を交換して別れを惜しんでいたことを記している。また、小学校の先生からは「最初は『なぜ来たのか』と言っていた子どもが、最後には『もう終わっちゃうの?』と寂しがっていた」というお話も伺った。

マスメディアが政治面での日韓対立を強調する時勢は小学生の国際情勢理解にも暗い影を落としつつある。しかし韓国の学生たちが忍耐と愛情を持って子どもたちと接し続けることにより、子どもたちの中のわだかまりが解け、相互理解が深まったのではないだろうか。小学生の頃から様々な国・地域の人々と出会い、交流することは他国の人々を尊重する心を養うに違いない。そういう意味でも、海外からの教育実習受け入れが果たす役割は大きい。

5. 海外からの教育実習受け入れの効果：韓国人学生と日本人学生

最後に、ソウル教育大学グローバルインターンシップの効果について韓国人学生に及ぼす効果、日本人学生の及ぼす効果を考察する。

4 節で見たように、ソウル教育大学のグローバルインターンシップ生たちは大学での授業参加や学生交流、また小学校での観察実習や授業体験（韓国文化発表）から多くのことを学び取っていた。では、インターンシップが終了した後、その経験と学びは学生たちの今後にどのような意義を持つのだろうか。アンケートの結果を通して分析してみる。

インターンシップ終了時に質問紙を配布し、インターンシップの評価に関するアンケートを実施した。その中の「今回のグローバルインターンシップは卒業後の進路選択に良い影響・効果があると思いますか。」と「今回のグローバルインターンシップは就職後の自分の仕事に良い影響・効果があると思いますか。」という 2 つの質問に対する回答は、両方とも「強くそう思う」6 名、「そう思う」2 名だった（その他の選択肢は「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」、「よく分からない」）。元々の動機づけはアニメ・ドラマ等の日本文化だった学生も少なくなかったが、プログラム終了時点では全員が大学研修・小学校実習の体験と学びを自らの進路・職業と関連づけて考えていることが分かる。

一方、ソウル教育大学グローバルインターンシップの受け入れは韓国人学生だけではなく、本学で学ぶ日本の学生の国際的視野形成にも寄与しうるものである。その点について、一例として「社会」の授業でインターンシップ生と交流した学生たちの感想から見てみたい。

日本の学生たちは、韓国の学生と日本の芸能人や若者文化を共通の話題として話せることや、感覚の近い部分を発見することで韓国の学生に対し親近感を持ったようである。その一方、韓国の人々の教育熱心さや、韓国で小学校教師が尊敬され人気のある職業である

ことなど日韓で異なる点も知り、韓国だけではなく世界に目を向けるきっかけになる一方、お互いに相手の国の言語を知らないために言いたいことを思い通りに伝えられなかったという経験を通して、外国語学習の重要性を認識する機会にもなった。

このように、大学での授業参加・学生交流と小学校での教育実習を組み合わせたインターンシッププログラムは、韓国人学生だけではなく、日本人の学生の国際的視野形成にも効果があることが分かった。また先に見たように、韓国の学生がインターンシップの実習生として小学校に入っていくことは、児童たちが世界に目を向けさせ、外国人を尊重する姿勢を養うという、肯定的な効果をもたらす。

今後の課題としては、大学での学生交流を小学校での実習と関連づけていくことが挙げられる。江島他（2009）が紹介する愛知教育大学と晋州教育大学（韓国）との教育実習を核とした日韓交流プログラムでは、教育実習で行う授業体験（児童の質問に答える形での韓国文化紹介）の準備を日韓の学生が協力して行ったことを、学生たちの自発的な取り組みとして意義深いとしている。このような取り組みは韓国の学生の職業意識だけではなく、日本の学生にも職業や進路について考える機会にもなるであろう。また教師を目指している学生にとっては韓国の学生を支援すると同時に、韓国の教育事情から学ぶところも大きいはずである。本学でも教育実習の部分に日本の学生が参加できないか検討してみたい。

注

- 1) 本プログラムは「韓国学生による教育実習を中心とした日本文化研修」として日本学生支援機構の留学生交流支援制度（短期受入れ）に採択され、研修参加者には奨学金が支給された。また日韓文化交流基金の平成 25 年度人物交流助成（草の根交流）の対象事業として助成金を受けて実施された。

参考文献

- 江島徹郎・山根真理・上田崇仁・梅田恭子（2009）『『教育実習』を核とした日韓交流プログラムの発展－2008 年度愛知教育大学・晋州教育大学校の学生相互訪問を中心に－』『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第 12 号、99-106.
- 若生正和（2011）「ソウル教育大学「グローバルインターンシップ」受入報告－海外における教育実習の可能性と課題－」『国際センター年報』（大阪教育大学）第 17 号、25-40.

2014年(2013年度)ソウル教育大学グローバルインターンシップ日程表

大学研修(1月16日(月)～1月25日(金))

大学研修(1月16日(月)～1月25日(金))								
		1/13(月)	1/14(火)	1/15(水)	1/16(木)	1/17(金)	1/18(土)	1/19(日)
午前	1限 9:00 ～ 10:30	/		ポートフォリオ作成 「研修の目標」		事務手続き 宿舎移動	日本文化 自律研修	日本文化 自律研修
	2限 10:45 ～ 12:15		11:05 関西空港到着 11:30 出迎え 12:00 関空出発	社会 (小林和美)	日韓関係について考える (裴光雄)			
午後	3限 13:05 ～ 14:35		13:00 大学到着・昼食 14:00 事務手続き 15:00 宿舎チェックイン 15:30 オリエンテーション	日本語練習(1) (日本人チューター)		小学校訪問 ・長瀬北小学校 ・八戸の里小学校		
	4限 14:50 ～ 16:20				教育実習 オリエンテーション(1) 「小学校について調べる」			
	5限 16:35 ～ 18:05		17:30 歓迎会					
	夕方							

		1/20(月)	1/21(火)	1/22(水)	1/23(木)	1/24(金)	1/25(土)	1/26(日)
午前	1限 9:00 ～ 10:30	宿舎移動	日本語集中講座	日本語集中講座	日本語集中講座	日本語集中講座		
	2限 10:45 ～ 12:15	日本語集中講座	日本語集中講座	社会Ⅰ (小林和美)	日本語集中講座	日本語集中講座		
午後	3限 13:05 ～ 14:35	日本文化自律研修 成果報告資料作成		日本語練習(2) (日本人チューター)		ポートフォリオ作成 「大学研修のふり返り」		
	4限 14:50 ～ 16:20		Japanese Culture and Education (中山あおい)		教育実習 オリエンテーション(2) 「実習目標の深化」	アジア理解教育 「絵本ワークショップ」 (小林和美)		
	5限 16:35 ～ 18:05	韓国の言語と文化Ⅱ 「日本文化自律研修 成果報告会」 (若生正和)				宿舎移動		
	夕方							

小学校研修(1月27日(月)～2月6日(木))

日付	1/27(月)	1/28(火)	1/29(水)	1/30(木)	1/31(金)	2/1(土)	2/2(日)
内容	小学校実習: 東大阪市立長瀬北小学校、八戸ノ里小学校					自由行動	
日付	2/3(月)	2/4(火)	2/5(水)	2/6(木)	2/7(金)	2/8(土)	2/9(日)
内容	小学校実習: 東大阪市立長瀬北小学校、八戸ノ里小学校				11:00 修了式 13:00 報告書作成 夕方 懇親会	学生帰国	/

大教大での 4 年間

黄 掣

教養学科情報科学専攻

(中国)

中国では、「吃得苦中苦方为人上人」という諺があります。この諺を日本語に訳すると「苦しみの中の苦しみを味わってこそ、人の上に立てるものだ」という意味になります。六年前に、この諺のように人以上に苦勞する決意をして日本留学を決めました。

日本に来たばかりのころのことを思い出すと苦勞したときがたくさんありました。食事にかかる出費を抑えるために、包丁を触ったこともなかったのですが、自炊を始めました。生活費と学費を稼ぐために、30 回以上の面接を受けてやっと人生の初めてのアルバイトを始めました。アルバイトで人生での初めての給料をもらったときに、お金の重さを深く感じました。日本語学校で初めて奨学金をもらったときの嬉しさなどなどの人生の初体験がたくさんできました。

最初の二年間は日本語学校で過ごしました。毎日午前授業を受けて、午後からアルバイトという単純な繰り返しでしたが、毎日午前勉強した日本語を覚えるために、午後からのアルバイトの職場では、日本人と練習することに心掛けていました。それ以外の時間はほとんど大学受験のため、勉強に使いました。日本に来てからの二年目の 2009 年の 2 月にやっと大阪教育大学の情報科学専攻に合格しました。合格通知がもらった瞬間に我慢できず、涙が出ました。二年間の努力が無駄にならず、報われました。

そこから大阪教育大学での四年間学生生活が始まりました。一年目は世界各国からの留学生と交流したり、学校の LSB というダンスサークルに参加したり、国際センターが主催した国際フェスティバルや文化体験研修などの活動に参加したりして、すごく楽しい一年間でした。

二年目は専攻の授業がいきなり多くなって、勉強に集中して、一生懸命頑張った一年間でした。三年目はいろいろ困ることがあった一年間でしたが、留学生のことなら、何でも助けてもらう国際センターの先生方のおかげで、順調に過ごせました。

四年目は卒業を迎えて、指導教員の藤井淳一先生からアドバイスをいただきながら、卒業研究に力を入れて、卒業論文を仕上げて無事に卒業することができました。非常に充実した大学生活が送れたと思います。

卒業後、会社に就職するか大学院に進むか、少し迷っていましたが、大学生活を思い出すと、大教大のことが恋しくなってきました。そして、自分の研究能力を高めていくため、

続けて大阪教育大学の大学院に進むことを決めました。

最後に、大教大と大教大でお世話になってきた皆さんに心から感謝します。そして、これからの二年間もよろしくお願いします！



大阪教育大学での経験

ナズィファ・ヌール
大学院 総合基礎科学専攻
(アフガニスタン)

私は今から約2年半前の2010年9月に大阪教育大学に入学しました。日本での生活は初めてで、慣れないことがたくさんありました。でも、大阪教育大学のスタッフは何か問題や緊急事態が起こった時はいつでも助けてくれて、家族といるような気持ちになりました。そのおかげで、国とは全く違う社会に慣れて、違う文化に適応することができました。

私は、支援して下さった大阪教育大学の全ての方に感謝します。特に、指導教員の永田元康先生は、調子のいい時も悪い時もいつも私に寄り添って支えてくださいました。それから、長谷川ユリ先生は、教師であるだけでなく、母親か友人のような存在で、助けが必要で誰かを頼りたい時、本当の家族のように接してくださいました。

国際系のスタッフの方々が学生のために責任を持って仕事をしていることは、特筆すべきことです。特に、日本に来たばかりの外国人は新しい環境の中で、いろいろな規則を知らなければなりません。私たちが新しい、見知らぬ社会に慣れて落ち着くまで、係の皆さんはいろいろなサービスを提供してくださいました。

日本語の授業は、有能なプロの教師によって、すばらしい方法で教えられていていました。私は日本に来る前に日本語が全然できませんでした。日本語が分かるようになるのは無理だと思っていましたが、日本語の授業のおかげで、基礎的な、そして中級レベルの日本語ができるようになりました。そして、私は日本の文化だけでなく、世界中の色々な文化について学びました。様々な交流プログラムや文化研修などを通じて、とても貴重な体験をしました。

大学院の総合基礎科学専攻では、学生たちが社会人としてのキャリアを始めるために必要なことが全部学べます。私も、整った環境の中で、研究を進め、研究に関連した実験を行うことができました。先生方もとても親切で、忍耐強く指導してくださいました。

一言で言えば、大阪教育大学の学生であったことは、今までで一番すばらしいことで、私のこれからの人生の転機になるようなものだと思います。ここで得たすばらしい経験と幅広い知識は、今後の目標に向かう時の支えになってくれると信じています。



日本の印象

バルタバエヴァ・アデミ

日本語日本文化研修留学生

(カザフスタン)

日本という目には浮かぶのが私の最も幸せな場所です。いつも笑顔で話している日本人の先生方も、知り合いや友達も、外国人の友達もいつまでも私の記憶に残っています。誰かがただ「日本」と話し始めたら、その一瞬で日本で過ごした留学の一年が心に浮かんで来て、笑みがこぼれます。

今も目の前に縁の美しい周りや青い海と空があります。空港から大学へ行って、やっと住むところに着きました。とても優しい先生が微笑みながら自分のことを紹介して、部屋まで送ってくださいました。部屋で初めての外国人の学生と知り合いになりました。その時、彼女は私の何よりの親しい友達になるとは思いませんでした。「自分」の部屋に入って、窓を全開にして外を見ました。青い空、暖かくて晴天でした。わずかに虫の鳴く音が聞こえました。外は穏やか。道を歩いて黄色の帽子をかぶっている二人の小さい可愛い子供が楽しそうに話して家に向かっていました。変な感じでした。他の言語で話している人々から開き方が違う窓まで不慣れなことばかりでした。変な感じでも快かったです。晴天も笑顔の人たちも暖かい歓迎をしているような感じでした。疲れのせいか、見ていたものがだんだん曖昧な絵のようになって、虫の音を聞きながら畳のうでで寝てしまいました。こういう風に私の日本での夢のような生活が始まりました。これから日本について驚く事ばかりの毎日を送っていました。

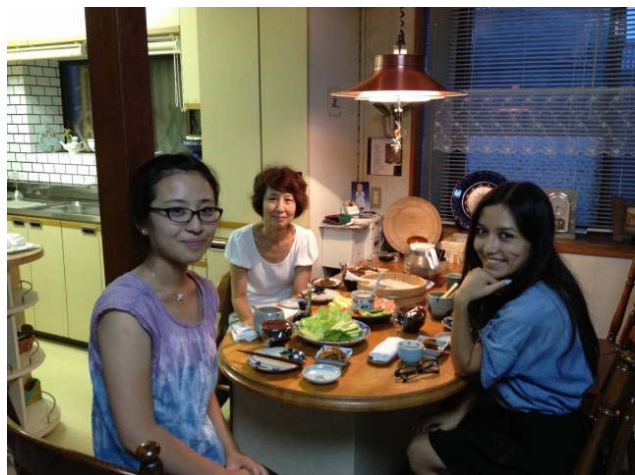
日本についていくら話しても話し切れないと思います。特に私の母国とまったく違う国ですから驚かされるものが山ほどあります。たとえば、外でゴミ箱がありませんが、きれいであまりゴミや落書きなどがなくてびっくりしました。しかし、これは珍しいことの一部にしかすぎません。

日本で撮った写真を見て、そのころのことを度々思い出しながら過ごしています。私が一年間勉強していた美しい景色の大阪教育大学で過ごした日々、大学で実施された様々な

日本文化研修で勉強したこと、見たこと、発見したことは私にとって二つとない宝物です。地図で和歌山、岡山、長島などの名をみると心が踊ります。

また、日本では先生についての画一的なイメージがまったく変わりました。それまで自分の国で厳しくて真面目な先生ばかり見ました。しかし、日本へ来て正反対の先生を見ました。その先生はいつもいろいろな冗談を言って、みんなを笑わせる面白くて明るい先生でした。私も将来先生になれるなら私の先生のようにすばらしい人になりたいという気持ちが出てきました。

一言でいうと、日本で生活していた間に会った人々、過ごした楽しい日々はすでに私の魂に刻みこまれています。今全部思い出すと泣きたいほど寂しいです。こんなチャンスをくださった神様に感謝します。



Education in Japan

ルシヤリ・ナラヤン・ジョシ

教員研修留学生

(インド)

It was a pleasure for me to study about the education system in Japan under the teacher's training program sponsored by MEXT in the year 2012-2013. I could acquire new perspectives for the process of education. The international program provided opportunity to interact with the teachers from different parts of the world other than Japan; Ghana, Madagascar, Thailand and China. We were a good team. The interaction between the groups was an important sharing of thoughts and views about the education system in one's own country and Japan. Since no education system in the world is perfect it is essential to have international cooperation for the inputs to the system for the betterment of it. The times are rapidly changing. We require global citizens with a strong bond of humanity all over the world, for enriched human life to handle major global challenges to maintain peace and sustainability.

Through this writing I would like to state my impression about the education system in Japan. The education system in Japan is dedicated to create the future citizens of the country. One can observe that, everywhere in Japan and in all the fields of society. The society is trained in one pattern including TV shows, celebrities, sports personalities, common working class people and so on. The education in Japan is not located only in the school, but outside as well. Children learn how to apply the concepts in real life.

My domain of study is Visual Art education. Japanese Government and society has a positive attitude towards art education. Music, art and craft, sports are equally important subjects along with other subjects in the curriculum. My journey for the research for art education showed several facets of art education beyond my previous training and experience as an art teacher. It was also important for me to learn about Japanese culture, language, society, manners along with the education system and art education.

The aesthetic supremacy gives positive meaning to the formation of human being. Art education in elementary schools in Japan creates minds that can think creatively. The teaching-learning process provides opportunities to experience and express, to think and express the thoughts, to feel and express feelings with various ways to express. The system is based on the belief that “Experience is a core menace of education.” Children learn that personal signature is important, keeping in mind the thought that they are one of a core part of the society. They are engaged in meaningful learning process. Art and craft is not only about creating beautiful artworks, but to enjoy the processes of making art. The vision is founded on a balanced cognitive, emotional, aesthetic and social development of children and youth. The government, school administrations, teachers and society work together for the future of Japan. My believe about Japanese people as efficient and hardworking becomes stronger in the process of study in Japan. Japan gave a fulfilled experience of life as a human being and a teacher. Thank you Japan!

A study was conducted with the aim of understanding the course content in Primary Schools in Japan and the methods of execution to reach the goal of art and craft education. To understand the cognitive function in teaching – learning process of art and craft. Japan maintains balance between technology, culture, traditions and etiquettes. This research is about how art education in Japan helps to create creative minds with the potential to apply the ideas they have learnt to everyday life.



ドイツ留学体験記

小笠原 沙紀

教養学科芸術専攻音楽コース

(平成 24 年度 交換留学生)

私はドイツの Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg 大学に平成 24 年の 9 月から翌年の 8 月末まで留学していました。留学動機は、自分の専門分野の音楽の本場であるドイツで勉強してみたいということと、ドイツ語力を磨くこと、そして今の自分に何が必要かを知るためでした。留学を考えていたのは一回生の頃からで、音楽コース所属だった私は、ドイツ語を専門的に学んでいるわけではなかったため、大学で開講されているドイツ語の授業とその他の自主勉強を続けて留学に備えていました。

留学先に着いてから最初の一ヶ月は、短期集中語学クラスがありました。テストによるクラス分けの後、それぞれのレベルに応じたクラスで授業を受けていました。クラスでは、ロシア、ルーマニア、中国、イラク、パキスタン、アメリカ、コロンビア、台湾などの様々な地域の国からの留学生と一緒に勉強をしていて、「発言する」ということに関して、日本人がいかに消極的であるか思い知らされた一ヶ月でした。授業の内容としては、毎週文章を作成する課題や、個々のプレゼンテーションなどが印象的で、信じられないほどの量の宿題を毎日よくこなしていたと、今になって思います。大学にはタンデムという交換授業制度があり、日本学部のドイツ人学生のパートナーと週に二回ほど会い、ドイツ語と日本語の交換授業をしていました。ドイツ人のパートナーとお互いに語学を勉強することは自分のドイツ語に対するモチベーションにとって非常に効果的だったと思います。時には自分の悩みを聞いてくれたり、どこかへ遊びに行ったり、いろんな意味でのパートナーでした。

語学以外の専門分野の授業に関しては、シラバスで事前に確認をした上で直接教授に受講許可をもらいにいきました。ゼミや実技が伴うものに関しては、受講できるレベルに到達しているかどうかを確認する事前テストがありました。教会音楽研究の授業では、バッハのカンタータに関する考察の授業、音楽理論などの講義を受講しました。実際講義に行くと周りはお年寄りの方ばかりで、学生がほとんどいませんでしたが、熱意は素晴らしいものでドイツのお年寄りの方のパワフルさには驚かされました。講義では先生が話される曲の歴史的背景の説明を理解しようとしていましたが、留学生活の初期に講義の全てをドイツ語で理解することは非常に困難でした。しかし、まずは分からなくてもそのスピードに慣れることはとても大切だと思います。ゆっくり話すと分かるというのは、その時は理解でき

るので必要なことかもしれませんが、まずは分からなくても実際のスピードに耳を慣れさせるということも語学の上達には必要なことかもしれません。実際この授業は、バッハのカンタータを聞きながら先生の早くて訳の分からないドイツ語を一時間半聞くのですから、私にとって最初は辛いものでした。

しかし、音楽というのはやはり言葉がなくても伝わるものがあるもので、お互いに音を通じてコミュニケーションがとれる喜び、楽しさを実感できた一年だったと思います。ある日、偶然窓の外に壁にペンキを塗っている知らないお兄さんが居たのですが、私がピアノで一曲弾き終わると、手に持っていたペンキをわざわざ置いて窓の向こう側から笑顔で拍手をしてくれたことがありました。買い物帰りのお母さんがネギを握りしめたまま立ち止まって聴いてくれたこともありました。その一時一時の嬉しさは忘れられません。何の為に弾いているのか、この問いに今まで漠然としか考えていなかった自分にとって、少しハッとさせられた瞬間でした。毎週日曜日には近くの教会のミサに行っていました。ドイツは至る所に教会があり、ミサはドイツの人々の生活に密接に結びついています。日本にはない独特の神聖な空間の中で、それぞれが願い、望み、感謝し、ときには懺悔し、そういった対話の空間であることを深く考えさせられました。

学期休みになると、ニーダーザクセン州の Oldenburg の近くの Wardenburg という小さな街の夫婦の家でホームステイをさせて頂きました。几帳面なご夫婦で、毎日どこかへ連れて行ってくださったり、日本料理、ドイツ料理と一緒に作ったり、自国の話をしたり、様々な文化交流をしました。奥さんが先生をなさっていた関係もあって、Grundschule と Hauptschule の 2 クラスにて、日本についてのプレゼンテーションをし、約一時間ずつ生徒さんと質疑応答する機会を頂きました。また、小学生ぐらいの年齢の子どもたちと一緒にドイツ語の授業を受けたり、職員室の様子や、ホームルームの様子を見学させて頂き、日本とは全く違う学校環境で驚きました。発言する機会が非常に多いこと、先生がニックネームで呼ばれていたこと、選択教科が多いこと、どこを見ても子どもたちそれぞれの個性を大切にしていることが表れていました。子どもたちの日本に対する興味として印象深かったのは、「制服を着てみたい!」という意見が非常に多かったことです。ドイツは私服で、化粧、ピアスなどの禁則もほぼありません。ドイツ語を一日中聴き、話すというのは少々疲れるときもありましたが、ドイツの家庭での日常生活、人間関係などを非常に身近で体験することの出来た 2 週間でした。ホストファミリーも丁寧にドイツ語を話してくださり、一緒に会話するのがとても楽しかったです。北ドイツというのもあり、南よりもかなり明瞭なドイツ語に感じました。

後期に入ってから、専門の授業も取るようになりました。日本学部の学生との合同授業では「ドイツ、ドイツ人に対する日本人の偏見と先入観、そしてその変化」について一時間発表させて頂きました。留学初期の印象と半年後のドイツへの印象や、逆にドイツ人

学生から見た日本、日本人像という視点についても意見を求めたことで、更に議論が深まり非常に面白い授業となりました。

留学をして分かったことですが、自分から行動しなければ新しい知識、そして刺激のある経験は得ることが出来ません。待っていても期待しているような留学生活はなかなか送ることが出来ません。他の大学から来ていた留学生はよく「語学力向上のために来たけれど、話せたところで何になるのだろう」とよく呟いていました。「まずは語学を」という考えもひとつですが、限られた時間の中で、興味のあること、自分にとって少し高いハードルのものに挑戦することで自分にとって価値があるものが見えてくることもあると思います。そして、その過程も自分の語学力に繋がっていくと思います。

私は、大学で開講されている授業以外にドイツで開講されている専門分野の特別クラスを自分で探して参加したことが素晴らしい経験になりました。参加するまでの複雑な手続きや、参加の準備などの精神的負担もありましたが、自分の目標が新たに見つけられた経験となりました。

私は、ドイツの方から「Langsam!! ゆっくり」と注意されることが多かったのですが、せっかちな性格なこともあり、それに対して最初は「何で？」と思うことが多かったのですが、この「ゆっくり」というのは、決して怠けるという意味ではなく、「心に余裕を持って、ちゃんと深呼吸して何事も落ち着いて対応するように」ということだと教えて頂きました。大学の3年間をひたすらまっしぐらしていた私でしたが、今の私にはその部分がどうやら欠けているようです。もちろん留学中にはたくさんの失敗や、挫折もありましたが、それも全て自分を強くする経験です。今までと全く異なる環境での一年は非常に濃いものであり、これからの人生の機転となる一年と言えます。音楽、人との出会い、自然、建築、ドイツで感受したもの全てが今の自分のエネルギーに繋がっています。

私は帰国後まもなく、世界のどこにも属していないような気分になり、孤独感で胸一杯の時期もありました。ドイツに居た時は日本の良いところがたくさん見えていたのに、日本に帰国したとたん嫌な部分がたくさん見えるようになり、自分はどこに在るべきなのか、これからどうすべきか、と非常に鬱々とした気分のときもありました。今でもまだ悩むときがありますが、これからの日々の中で、ドイツと日本での双方の経験が自分の中で共存する 때가くると思います。一年ではやっと生活に慣れたという時点での帰国だったのもありますが、苦勞したね、と言われるような留学ではなかったと思います。派遣留学生という身で甘えられ、守られた部分は大きかったのではないかと感じます。いつか自分の力で道を切り開いて渡独できる日を夢見て、日々精進して参りたいと思います。

この留学の機会を与えてくださった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



“Keep in touch, buddy!!”

森田 あやね

学校教育教員養成課程 美術・書道教育（美術）専攻 小学校コース
（平成 24 年度 オーストラリア語学研修）

私は 2012 年 2 月 7 日から 2012 年 3 月 18 日まで、オーストラリア・クイーンズランド州ブリスベン市の Griffith University で Griffith English Language Institute(以後 GELI) の学生として約一ヶ月半の語学研修を受けさせていただきました。オーストラリア滞在中は全日ホームステイでの生活、大学へは市バスを利用して授業へ参加します。私はその年の参加者の中で一番大学から離れた、バスで片道 40 分、シティへは 1 時間以上掛かる「閑静な住宅地」にステイしていました。

オーストラリアでのステイ生活は予想していたよりもずっと健康的で充実したものでした。私のホストファミリーは、お孫さんもおられる、二人暮らしで年配のご夫婦でした。日本では考えられない事ですが、オーストラリアでは町のお店は朝の早いと 7 時頃には開店して夕方 5 時頃には閉まってしまいます。飲食店も大概 9 時には明かりが落ち、朝まで開いているのは数少ないセブンイレブンとバーやクラブの類だけです。町の人もみんな **Early Birds** で起床は朝 5 時。床に就くのもとても早いです。私のホストファミリーや私自身も例外ではありません。朝の 5 時には起きてトーストとシリアルの朝食を食べ、7 時頃には家を出てバス停に向かっていました。GELI での授業は 8 時過ぎから 12 時過ぎまでの 4 時間みっちり、ママが持たせてくれるサンドイッチやフルーツのランチを食べたらもう放課後です。シティやショッピングモールに行ったり遠出したり、それぞれに楽しんでいました。

この研修の参加者は、英語に囲まれた生活を送る事が出来るすばらしい環境に居るわけですが、ただ参加するだけでは滞在中に語学力が「上がったような気分になる」だけで終わってしまいます。それは滞在期間が一ヶ月半と短いことや、GELI で学ぶ留学生の半数以上(私のクラスは 10 人中 7 人)が日本人であったことが原因の一部だと思います。どうしても日本人の学生が周囲に沢山居ると、困ったときにすぐ日本語が出てしまいます。しかし、常に「日本人相手でも英語で話す」、「困ったことがあればネイティブのサポートスタッフに聞く」ということを心掛けて実践していれば、一ヶ月半でも十分英会話力は向上します。要するにこの一ヶ月半を有意義にするかどうかは自分次第だということです。

例えば私の場合、自由に動ける午後の時間のうち、週に二日はシティで開催されているフリースクール **Your English Corner**(以後 YEC)で過ごしていました。GELI では日本人学生が多いというだけで、授業内容は「生きた英語」がとても面白く、他には無いほど勉

強になるものばかりですが、やはり同年代のネイティブとの交流をするのには少し物足りなさを感じていました。その点 YEC は、GELI ほど考えられた授業内容ではありませんでしたが、講師は全員ボランティアで現地の定年退職後の学校の先生や現地の学生が行っており、集まった学生も世界各国から大学留学やワーキングホリデーなどで滞在しており、年齢も幅広い方々で、「積極的に英語でコミュニケーションを図る」にはもってこいという環境でした。週二日の授業を切っ掛けに、授業以外の日もそこで出会った現地の学生や留学生仲間と遠出して遊びに行ったり、先生のお宅に招かれて現地の学生との交流パーティーに参加したりと、予定の入らない日が無いほど毎日が楽しく、語学力の面でも充実した日々を過ごすことが出来ました。

なにも留学をしたらフリースクールに行け、という訳ではありません。しかし、たとえ短くてもせつかくの語学留学のチャンスを、「楽しかった」で終わらせるのは勿体ない気がしたのです。滞在期間は短く、文字通りの「英語漬け」の生活は帰国したら送れませんが、その短い滞在期間の間に自分には一体何ができるか、どんな努力や工夫ができるかは十分に考えることが出来ると思います。私は帰国後も GELI や YEC で出会った友人と Facebook や Skype などメールや電話のやり取りを続けています。私同様母国に帰国した留学生仲間ともコンスタントにやり取りしています。この繋がりのお陰で私は英語に対する意識が自分の中でも常に保たれていると感じていますし、様々な文化や考え方を聞くことで今でも滞在中の楽しさに似た面白さを感じながら日本でも生活をしています。

帰国を数日後に控えた頃、GELI や YEC など現地で出会った沢山の友人から“**We'll miss you, keep in touch, buddy!**”と言われました。その言葉がとても嬉しく、留学中に聞いたどんな英語よりも心の中に残っています。一ヶ月半はあっという間でしたが、その滞在期間に得た物は時間以上のものが本当に多くありました。自分の視野を広げ、大きく成長できたこの語学研修に参加させていただくことができ、本当に良かったです。

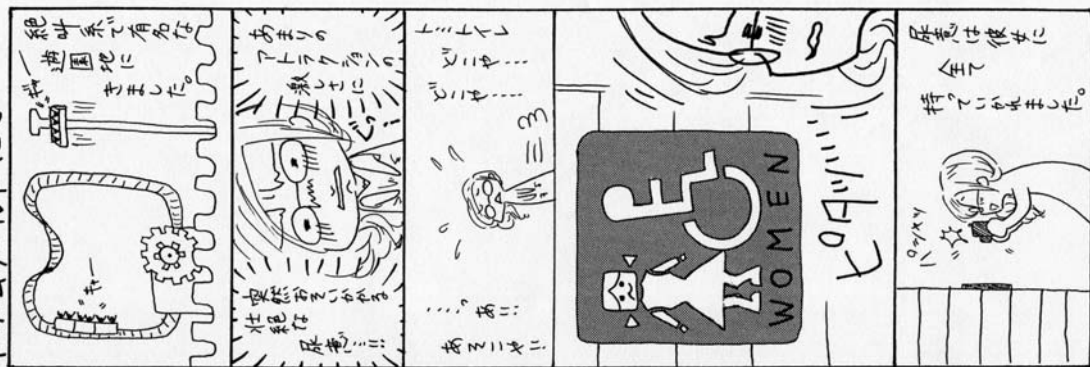
参加を迷っておられる方がいらっしゃるなら、是非参加してみて欲しいです。自分次第で、滞在期間の長い短いに関係なく、新しいものやことに挑戦して成長できる切っ掛けはいくらでも作れます！あなたもお互いに“**Keep in touch!!**”と言い合える素敵な友達と英語を学んでみませんか？

最後に、帰国後私が描いた留学ルポ漫画(一部抜粋)をお見せしてこの体験記を締めくくりたいと思います。

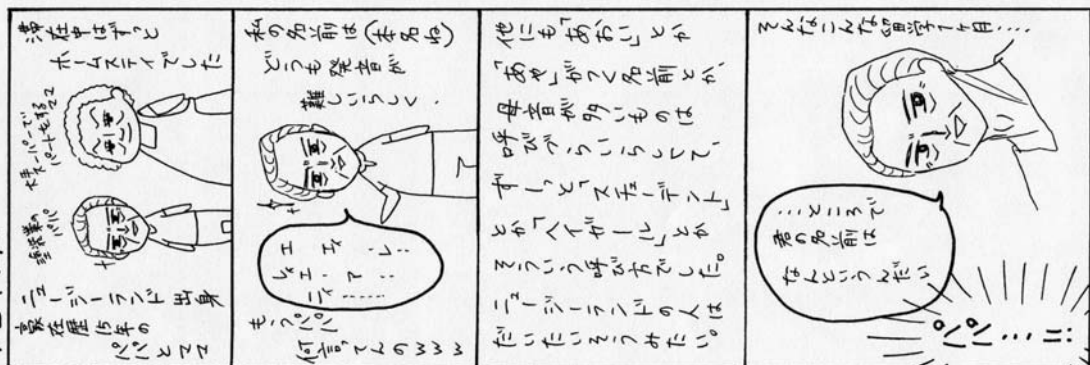
ブリスバンハンター ポムくん



ドリームワールドにて



プロナンス



平成 24 年度 国際教育部門 活動報告

1. 日本語・日本事情教育

平成 24 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本語読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅰ	村井卷子
	日本語作文Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	若生正和
2回生	日本語演習Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ	中山あおい

教養基礎科目・専門科目（※日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・Ⅱ	長谷川ユリ
	東アジア言語文化論	2（前）	水・Ⅰ	若生正和
	国際理解	2（後）	水・Ⅱ	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	月・Ⅲ	城地茂
3回生	日本語教育	2（後）	木・Ⅳ	長谷川ユリ

日本語日本文化研修留学生（日研生）、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
中上級	日本語中上級聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	村井卷子
	日本語中上級読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅱ	長谷川ユリ、間晶子
中級	日本語中級文法Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語中級会話Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅰ	間晶子
初中級	日本語初中級会話aⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語初中級会話bⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅱ	若生正和
	日本の社会と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅲ	中山あおい
	日本の言語と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅳ	若生正和
	日本文化史Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅲ	城地茂
	日本近現代史	2（前）	木・Ⅳ	城地茂
	大阪の文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅳ	国際センター教員
	日本文化研究	2（前・後）	集中	指導教員

教員研修留学生（教研生）のための授業（補講）

科目名	曜日・時限	担当教員
教研生用日本語 日本の教育	月・Ⅱ、火・Ⅱ、火・Ⅲ 水・Ⅱ（前）	長谷川ユリ、間晶子、井ノ口智佳、 中山あおい

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	32
大学院生、研究生	2
教研生	6
日研生	7
交換留学生	29
計	76

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	32
大学院生	1
教研生	6
日研生	10
交換留学生	21
計	70

前期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	33
韓国	9
台湾	8
アジア・中央アジア	12
欧・米	8
オセアニア	3
中東・アフリカ	3
計	76

後期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	31
韓国	10
台湾	7
アジア・中央アジア	10
欧・米	7
オセアニア	2
アフリカ	3
計	70

日研生のための授業「大阪の文化」

「大阪の文化Ⅰ」「大阪の文化Ⅱ」は、講義とフィールドワークを組み合わせた日研生のための授業で、大阪および周辺の地域の歴史や文化を体験を通じて学ぶことができるように工夫されている。受講者による授業評価でも、「本で勉強するだけでなく実地研修によって理解が深まるので非常にためになる」と好評である。国際センターでは、平成24年度教育研究活性化推進経費（教育実践改善経費）として学内予算「戦略的な留学生獲得に向けた「大阪の文化」（日研生対象科目）の改善と発展」を獲得し、授業内容の充実をはかった。

フィールドワークを行った場所は大阪歴史博物館、仁徳天皇陵古墳、適塾、大阪くらしの今昔館、法隆寺、明日香などで、見学を行う前に事前講義を行うことにより、大阪や関西の歴史に対する理解をより体験的に深めることができるようになっている。現地で学芸

員による解説を受けることもあった。また、大阪市在住の観世流能楽師（シテ方）の山中雅志氏をお招きし「大阪と能」についてお話しいただき、本物の面を着けて視界の狭さを体感したり、謡や扇子を持つての仕舞いの稽古を行うなど、ユニークな内容の授業も実施した。



2. 修了レポート発表会

平成 24 年度の「修了レポート発表会」は、前期は日研究生と交換留学生の人数が多いため 8 月 2 日と 8 月 3 日の 2 日間に分け、後期は 2 月 3 日に開催された。優れた発表を行った学生を選び、前期、後期の修了式において表彰した。

前期	2012/8/2 10:30～15:30	日研究生	7
	2012/8/3 10:30～15:15	交換留学生	26
後期	2013/2/4 13:30～15:45	教研究生	6
		交換留学生	3

3. 交換留学（受入と派遣）

受入	中国	3	21 名
	台湾	6	
	韓国	5	
	タイ	1	
	アメリカ	1	
	フランス	3	
	オーストラリア	2	
派遣	アメリカ	4	14 名
	フランス	3	
	ドイツ	2	
	フィンランド	2	
	スウェーデン	1	
	中国	1	
	韓国	1	

交換留学生の受入れは、23年度には32名と前年比1.3倍で過去最高の人数であったが、今年度は21名であった。日本人学生の派遣は、23年度の9名から24年度14名と約1.5倍に増えた。派遣先としては欧米の12名に対し、アジアは2名と少数派である。しかしながら、23年度にはアジアへの留学が皆無だったのに比べると、変化は見られる。

国際センターでは、日本人学生が留学する機会を増やすため、様々な取り組みを行っている。5月23日に交換留学説明会を行ったほか、教養学科欧米言語文化講座との共催により、11月21日にTOEFL説明会も行った。留学したいと思っても経済的な事情や教育実習とのかね合いなどから断念する学生も多く、今後もきめ細かい指導が求められる。

学内選抜を経て今年度の留学が決まった日本人学生のためには、2月2日と7月11日にオリエンテーションを実施し、留学までの流れ、提出書類や申請手続き、海外での安全のための注意事項、海外留学保険や在留届などについて詳しく説明した。また、渡航先別に個別指導も行った。

4. 日研生、教研生の受入

日本語日本文化 研修留学生	キルギス	2	10 名
	カザフスタン	1	
	モンゴル	1	
	カンボジア	1	
	タイ	1	
	スイス	1	
	エストニア	1	
	ロシア	1	
	エジプト	1	
教員研修留学生	中国	2	6 名
	タイ	1	
	インド	1	
	ガーナ	1	
	マダガスカル	1	
研究留学生	ニュージーランド	1	1 名

日本語日本文化研修留学生（日研生）の受入れ人数は、22 年度 2 名、23 年度 7 名、24 年度 10 名と増加傾向にある。教員研修留学生（教研生）は、本学での研修や修了レポートの作成に取り組みつつ、現職教員としての知見や経験を生かし、地域における異文化学習講座の講師も担当した。

5. 語学研修・文化研修

大阪教育大学では、平成 24 年度はアメリカ、オーストラリア、タイ、韓国、台湾で語学研修・文化研修を実施し、合計 44 名が参加した。語学研修・文化研修の参加者数は年によって変動が激しいが、今年度は 23 年度の 45 名に次ぐ人数であった。

国・地域	研修期間	研修先	人数	計
タイ	2013/8/4-8/19	ラジャパット大学	9	44
台湾	2012/8/9-8/18	国立台北教育大学	3	
	2013/3/4-3/13		3	
アメリカ	2012/8/20-9/21	University of North Carolina Wilmington	4	
韓国	2012/9/3-9/15	ソウル教育大学	6	
オーストラリア	2013/2/6-3/17	Griffith University	19	

ここでは、国際センターが中心となって企画・実施しているアメリカとオーストラリアの語学研修、韓国の文化研修について報告する。

(1) アメリカ語学研修

アメリカ語学研修では今年度も約3週間半の語学研修と、現地の小学校での3日間の観察実習を行った。参加学生は UNCW のウェルカム・パーティやカンバセーション・パートナーとの課外活動に参加したり、1泊ホームステイでアメリカの家庭の生活を味わったり、ESL の授業以外でも充実した日々を過ごした。小学校での観察実習では子どもたちといっしょに給食を食べ、校庭で遊び、授業以外でも積極的に交流を楽しんだ。最終日には子どもたちに英語で日本の遊びを教えるなど、文化交流を行った。



(2) オーストラリア語学研修

約5週間半の語学研修の間、学生たちはホームステイしながら現地で生活する。大学へのバスでの通学、ホストファミリーとのコミュニケーションなど、始めは慣れずにとまどうことも多い。しかし、次第に慣れていき、大いに成長することに意義がある。平成24年度の参加者19名のうち大学院生1名は、現職の高校の教員であったことから、オーストラリアの高校に定期的に通い、理科の授業の観察実習も行った。他の参加者も、自然豊かなオーストラリアで充実した時間を過ごした。



(3) 韓国文化研修

ソウル教育大学の協力の下、韓国文化体験研修プログラムが平成 24 年 9 月 3 日（月）から 9 月 15 日（土）まで実施された。約 2 週間にわたった本プログラムには 6 名の学生が参加し、第 1 週目に基礎的な韓国語講座を受けながら昌徳宮をはじめとする世界文化遺産などを訪問して韓国文化を学び、第 2 週目は引き続き韓国文化を学びながら 3 回の初等学校観察実習を行った。初等学校での観察実習は 9 月 11 日（火）にミドン初等学校、12 日（水）にソウル教育大附属初等学校、14 日（金）にシンデリム初等学校を訪問した。参加学生は、日韓の授業の進め方や学校生活の相違点・共通点を発見する一方で、韓国の初等学校から学べる点を熱心に観察した。またシンデリム初等学校では、本学の参加学生が授業実習として 2 名 1 チームになって日本の文化を紹介した。シンデリム初等学校での実習は、平成 20 年度にソウル教育大学からの交換留学生として本学で学び、現在同校に勤務している金載鎬（キム・ジェホ）先生のご協力により実現した。

なお本研修は日本学生支援機構「平成 24 年度留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）」採択プログラムである「日韓教育大学学生現地研修プログラム」の一環として実施されたものである。



6. 海外教育研修の受入・協力

平成 24 年度は海外協定校から以下の通り訪問団・研修団等を受け入れた。受入にあたっては、国際センター教員が学校見学・本学授業見学などのアレンジや、来訪中のチューター・学生通訳の手配等により研修の支援に当たった。

派遣元大学（国）	プログラム名	受入れ期間	参加者数（引率教員）
UNCW（アメリカ）	International Studies Program	2012/6/18 ～2012/6/21	8 名（1 名）
忠南大学（韓国）	人文学部日語日文学科新入生キャンプ	2012/6/27	25 名（1 名）

ラチャナカリン・ラジャパット大学 (タイ)	学生訪問団	2012/10/11	7 名 (3 名)
ラジャパット大学 (タイ)	短期文化研修	2012/10/19 ～2012/11/20	10 名 (1 名)
ソウル教育大学 (韓国)	グローバルインターンシップ	2013/1/15 ～2013/2/9	10 名

ここでは、UNCW、忠南大学、ソウル教育大学のプログラムについて告する。

(1) UNCW海外教育研修プログラム

アメリカの協定校である University of North Carolina Wilmington (UNCW)は、教育専攻の学部生・大学院生を対象とした海外教育研修プログラムを実施している。このプログラムの目的は、約 2 週間の日本滞在中、広島、京都、奈良、金沢等を訪問し、日本文化について見聞を広めるとともに、大阪や奈良での学校訪問を通じて日本の教育について学ぶことである。参加者の中には現職教員も数多く含まれ、それ以外の学生は、卒業後ほとんどが小・中・高の教員となる。

平成 24 年度は、6 月 18 日から 21 日までの 4 日間、研修グループの学校訪問、観察実習に際し、スケジュールの調整、通訳や案内をセンター教員や本学教職員、交換留学・語学研修経験者等が担当した。訪問先の学校では、児童生徒との交流を楽しみ、教員との意見交換を行った。参加学生数、訪問先等は以下の通りである。

日程	訪問先	参加者数
2012/6/18	大阪教育大学附属幼稚園、小・中・高	8 名
2012/6/19 ～2012/6/21	奈良県三郷町立三郷北小学校	5 名
	大阪市立花乃井中学校	3 名



(2) 忠南大学人文学部日語日文学科新入生キャンプ

6月27日（水）に、韓国の忠南大学人文学部日語日文学科の新入生キャンプ参加学生25名と引率教員が大阪教育大学柏原キャンパスを訪問した。教養基礎科目「東アジア言語文化論」に参加して韓国文化紹介の発表をし、本学の受講生と交流した後、キャンパスツアー、サークル学生との交流会などを行った。なお、忠南大学とは平成25年3月、学術・学生交流協定を締結した。

(2) ソウル教育大学グローバルインターンシップ

本年度は、昨年に続きソウル教育大学から「グローバルインターンシップ」の実習生を10名受け入れた。本プログラムは、日本学生支援機構の留学生交流支援制度に採択され、研修参加者には奨学金が支給されている。全部で4週間のプログラムで、前半の2週間は大阪教育大学で講義を聴講し、日本人学生とも交流した。また、学外研修を2回実施し、白頭学院建国学校、法隆寺を見学した。後半の2週間は、3グループに分かれて東大阪市内の小学校に通い、子どもたちと触れあいながら、韓国文化の紹介などの実習授業も体験した。最終日には、大阪教育大学で修了式を行った。

日程	研修の内容	参加者数
2013/1/15 ～2013/1/25	大阪教育大学での授業参加、学外見学	10名
2013/1/28 ～2013/2/8	東大阪市立荒川小学校	3名
	東大阪市立太平寺小学校	4名
	東大阪市立長瀬北小学校	3名



（東大阪市立長瀬北小学校にて）



（大阪教育大学にて）

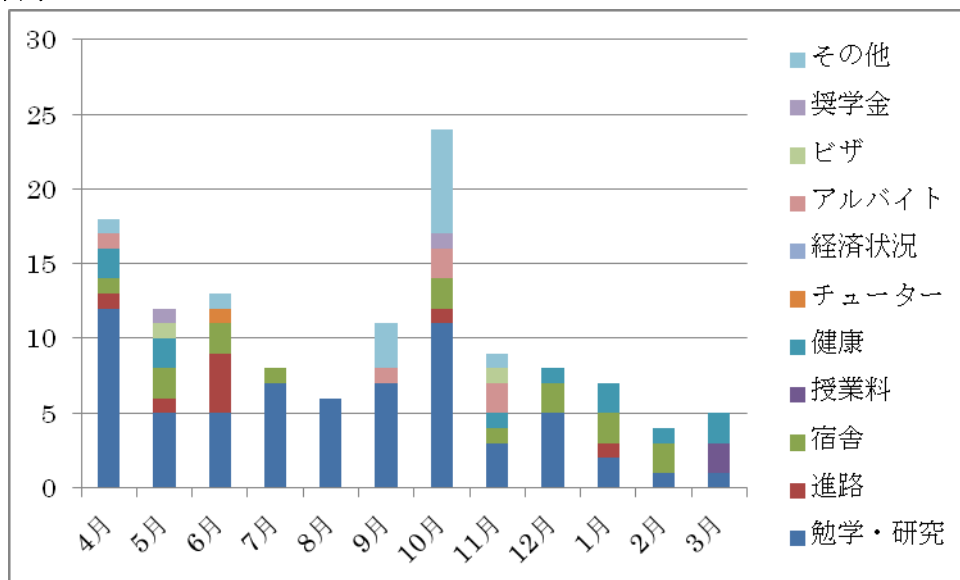
7. その他の活動

平成 24 年度に大阪教育大学の公開講座「日本語教育入門講座－外国語としての日本語教育－」を開講した。国際センターが公開講座を担当するのは初めてである。この講座は、地域の日本語学習支援に関わっている方たちを対象としたもので、受講者は 15 名であった。日本語を母語としない人たちとどのようにコミュニケーションを取ったらいいのか、日本語はどのような特徴を持つ言語か、外国語として学習する時はどのようなことが難しいのかということ、5 回シリーズで講義した。参加者からは、「興味深い内容で勉強になった」「実践的な内容で役に立った」等の感想が寄せられた。来年度以降も継続する予定である。

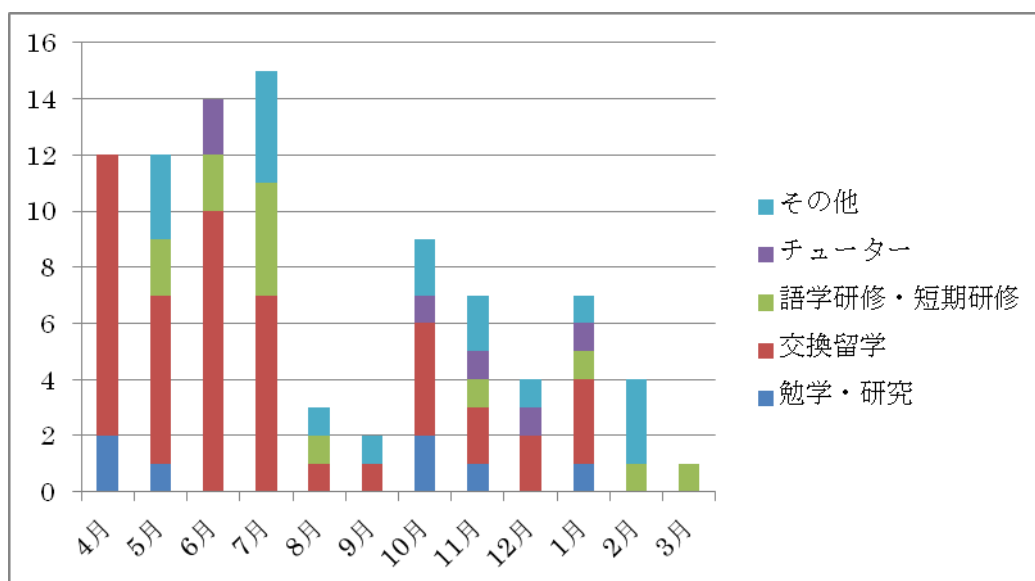
日時	講義の内容	担当者
10/6	日本語について学ぼう	有田節子 (大阪樟蔭女子大学)
10/13	海外の日本語教育事情：台湾編	城地茂 (国際センター)
10/20	日本語と韓国・朝鮮語の比較	若生正和 (国際センター)
11/10	年少者の第 2 言語習得と日本語教育	中山あおい (国際センター)
11/17	教室活動と教材の活用	長谷川ユリ (国際センター)

8. オフィスアワー相談記録（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月）

(1) 留学生



(2) 日本人学生



平成 25 年度 国際教育部門 活動報告

1. 日本語・日本事情教育

平成 25 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。
今年度は、受入れ人数が増加している日研生のための授業として「日本の伝統文化」を、
以前よりニーズのあった交換留学生向けの初級レベルの授業「総合日本語」を、新規開講した。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本語読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅰ	村井卷子
	日本語作文Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	若生正和
2回生	日本語演習Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ	中山あおい

教養基礎科目・専門科目（※日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・Ⅱ	長谷川ユリ
	東アジア言語文化論	2（前）	水・Ⅰ	若生正和
	国際理解	2（後）	水・Ⅱ	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	月・Ⅲ	城地茂
3回生	日本語教育	2（後）	木・Ⅳ	長谷川ユリ

日本語日本文化研修留学生、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
中上級	日本語中上級聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	村井卷子
	日本語中上級読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅱ	長谷川ユリ、間晶子
	日本語上級漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅱ	若生正和
中級	日本語中級文法Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語中級会話Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅰ	間晶子
初中級	日本語初中級会話aⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語初中級会話bⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅱ	若生正和
初級	総合日本語a	2（前）	月・Ⅱ	中山あおい、間晶子
	総合日本語b	2（前）	火・Ⅱ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語c	2（前）	火・Ⅲ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語d	2（後）	火・Ⅱ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語e	2（後）	火・Ⅲ	長谷川ユリ、井ノ口智佳

日本の社会と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅲ	中山あおい
日本の言語と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅳ	若生正和
日本文化史Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅲ	城地茂
日本近現代史	2（前）	木・Ⅳ	城地茂
大阪の文化Ⅰ、Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅳ	国際センター教員
日本の伝統文化	2（前）	月・Ⅳ	中山あおい他
日本文化研究	2（前・後）	集中	指導教員

交換留学生、教員研修留学生のための授業（補講）

科目名	曜日・時限	担当教員
基礎日本語	月・Ⅲ（後）	長谷川ユリ
日本の教育	水・Ⅱ（前）	中山あおい

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	28
大学院生	3
教研生	7
日研生	10
交換留学生	22
計	70

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	27
大学院生	3
教研生	7
日研生	15
交換留学生	25
計	77

前期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	33
韓国	11
台湾	5
アジア・中央アジア	11
欧・米	7
中東・アフリカ	2
中南米	1
計	70

後期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	36
韓国	8
台湾	7
アジア	9
欧・米・オセアニア	14
中東・アフリカ	1
中南米	2
計	77

日研生のための授業「大阪の文化」

「大阪の文化Ⅰ」「大阪の文化Ⅱ」は、本学が大阪にあるという特色を生かし、大阪やその周辺の文化や歴史について、講義とフィールドワークを通して学んでいくオムニバス形

式の授業である。見学先は大阪歴史博物館、くらしの今昔館、仁徳天皇陵古墳、インスタントラーメン発明記念館等で、大阪以外に京都や奈良へも行き、関西について広く学んだ。フィールドワークをより効果的に行うために、それぞれの見学の前に講義を行った。外から専門家を講師として招く授業もあり、前期、後期とも大阪市在住の観世流能楽師（シテ方）の山中雅志氏をお招きし、八尾市の高安や大阪周辺を舞台にした能や高安流の能などについてお話しいただいた。受講した学生たちは、実際に本物の面をつけたり能管を吹く体験を通じて、能に関する知識を深めることができた。



日研生のための授業「日本の伝統文化」

この授業は、国際センターと保健体育、美術教育、音楽教育の教員によるオムニバス授業として今年度から開講されたものである。留学生は三味線、剣道、陶芸などを体験する。7月には「河内音頭」を取り上げ、柏原市在住の民舞踊中野正子社中・会主の中野正子氏を講師に招き、河内音頭の「おどり」の中から基本的なカリキュラムである「手おどり」「豆かち」「パラパラ」を実演指導してもらった。練習を重ねたあと、8月24日（土）に柏原市内で実施される「第27回河内音頭おどり全国大会」に参加することができる。

受講した留学生からは、「少し難しいところもあったが、面白かった。本番のおどりに浴衣で出てみたい」などの感想が寄せられた。河内音頭を通して地元・大阪の伝統文化の一端にふれることができ、学生にも好評であった。



2. 修了レポート発表会

平成 23 年度の「修了レポート発表会」は 8 月 2 日と 2 月 4 日に開催され、教員研修留学生、日本語日本文化研修留学生、交換留学生が勉学、研究の成果を発表した。指導教員をはじめ、日本語科目の担当教員、チューター等の日本人学生から活発な意見や質問が出された。また、優れた発表を行った学生を選び、前期、後期の修了式において表彰した。

前期	2013/8/2	日研生	10
	9:00～17:30	交換留学生	18
後期	2014/2/4	教研生	7
	13:00～16:15	交換留学生	4

3. 交換留学（受入と派遣）

受入	中国	6	27 名
	韓国	8	
	台湾	7	
	タイ	1	
	アメリカ	1	
	フランス	4	
派遣	アメリカ	3	17 名
	フランス	5	
	ドイツ	2	
	スウェーデン	2	
	フィンランド	1	
	オーストラリア	1	
	台湾	2	
	韓国	1	

交換留学生の受入れ人数は年によって変動があるが、ほぼ 20 名から 30 数名前後で推移しており、平成 25 年度は 27 名であった。このうち、韓国の 2 名、中国の 1 名は半年間の受入れである。一方、日本人学生の派遣は、23 年度 9 名、24 年度 14 名、25 年度 17 名と、このところ順調な伸びをみせている。国際センターで行っている日本人学生の留学支援の成果が少しずつ見られるようになったと言えよう。パンフレットや交換留学説明会などによる情報提供のほか、オフィスアワーでの留学相談、教養学科欧米言語文化講座が実施し

ている交換留学希望者のための TOEFL-ITP への協力など、できるだけ日本人学生が留の機会を得ることができるよう努力している。また、アジアへの留学希望者を増やすための取り組みとして、今年度、教養基礎科目「韓国の言語と文化」を新規開講した。

学内選抜を経て今年度の留学が決まった日本人学生のためには、2月5日と7月24日にオリエンテーションを実施し、留学までの流れ、提出書類や申請手続き、海外での安全のための注意事項、海外留学保険や在留届などについて詳しく説明した。また、渡航先別に個別指導も行った。

4. 日研究生、教研究生、研究留学生の受入

日本語日本文化 研修留学生	タイ	3	15 名
	インドネシア	1	
	ベトナム	1	
	中国	1	
	ニュージーランド	1	
	ポーランド	3	
	スウェーデン	1	
	デンマーク	1	
	ブルガリア	1	
	ロシア	2	
	メキシコ	1	
教員研修留学生	フィリピン	3	2 名
	タイ	1	
	シンガポール	1	
	韓国	1	
	チリ	1	
	モロッコ	1	
研究留学生	中国	1	1 名

日本語日本文化研修留学生（日研究生）の受入れ人数は過去最高の 15 名となった。このうち、大使館推薦が 14 名、大学推薦が 1 名である。日研究生全体の受入れ人数が増えていることや、日研究生のためのプログラムを充実させていること、日研究生のための宿舎を確保する努力をしていることなどが主な要因として考えられる。

5. 語学研修・文化研修

大阪教育大学では毎年海外の協定校の協力を得て2週間～5週間程度の語学研修・文化研修を行っているが、平成25年度には、研修先として新たにドイツ、フランスが加わり、合計46名が参加した。今年度より一部の研修が単位化され、アメリカ、オーストラリア、韓国の研修参加者には、出発前の事前講義の受講、帰国後の発表を含む全ての条件が満たされた場合、教養基礎科目の「海外文化研究」の2単位が与えられるようになった。ここでは、単位化された3つのプログラムについて紹介する。

国・地域	研修期間	研修先	人数	計
韓国	2013/5/12-5/18	大邱韓医大学	2	46
	2013/9/3-9/15	ソウル教育大学	7	
ドイツ	2013/8/3-9/1	エアランゲン大学	4	
フランス	2013/8/3-9/1	リヨンカトリック大学	1	
タイ	2013/8/7-8/23	ラジャパット大学	7	
アメリカ	2013/8/19-9/21	University of North Carolina Wilmington	11	
オーストラリア	2014/2/5-3/16	Griffith University	11	
台湾	2014/3/4-3/13	国立台北教育大学	3	

(1) アメリカ語学研修

今年度もアメリカ語学研修では、約3週間半の語学研修のあと、UNCW 教育学部の Dr. Walker のご協力により、中学校で1回、小学校で2回、合わせて3日間の観察実習を行った。参加学生は、タブレットを使用した授業やチームティーチングなど、日本の学校教育に参考になる点を見つける一方で、給食の違いに驚き、食育や文化の相違を発見することができた。最後に、習字や折り紙など、日本文化の紹介活動を行い、子どもたちとの交流を深めた。



(2) オーストラリア語学研修

オーストラリアの語学研修は、今年度もブリスベンのグリフィス大学附属語学学校で実施した。このプログラムの特徴は、約 5 週間半の語学研修の間、ホームステイをしながらオーストラリアの文化を体験することである。ホストファミリーとのコミュニケーションがうまく行かず、始めはホームシックになる学生もいるが、次第に慣れていき、最後には涙ながらに別れる光景が見られる。英語の授業が終わったあと、クリケットやケーキ作りなど、大学が提供する様々な活動に参加する学生も多い。スポーツ専攻の学生が大学のプールで地元のスイミングチームと一緒にトレーニングをするなど、それぞれ充実した毎日を過ごした。なお、このプログラムは 2 月から 3 月にかけて実施されるため、帰国後の発表は次年度の 4 月に行い、単位は次年度に与えられる。



(3) 韓国文化研修

ソウル教育大学の協力を受けて実施された今年度の韓国文化体験研修プログラムは、第 1 週目に基礎的な韓国語講座を受けながら、キムチ作り体験や水原華城等の世界遺産見学を通じて韓国文化を学び、第 2 週目は引き続き韓国文化を学びながら 5 回の初等学校観察実習を行った。初等学校観察実習は、9 月 9 日（月）にコチョク初等学校、10 日（火）にユンジュン初等学校、11 日（水）にミドン初等学校、12 日（木）にソウル教育大附属初等学校、13 日（金）にシンデリム初等学校の計 5 校で行われた。このうち、シンデリム初等学校では参加学生に授業実習の時間が設けられ、2 チームに分かれて日本の文化を紹介する授業を行った。同校には平成 20 年度に交換留学生（ソウル教育大学）として本学で学んだ金載鎬（キム・ジェホ）先生が勤務されており、実習の準備にあたりとともに体験授業の通訳も引き受けてくださった。学生たちは日韓の授業の進め方や学校生活の相違点・共通点を発見する一方で、充実した施設や先進的な英語教育の実践の様子など、韓国の初等学校から学べる点を熱心に観察していた。

なお、本プログラムは日韓文化交流基金の平成 25 年度人物交流助成（草の根交流）の対象事業として助成金を受けて実施された。



6. 海外教育研修の受入・協力

国際教育部門では、協定校が実施している海外教育研修等に対する協力を行っている。
平成 25 年度の受入れは以下の通りである。

派遣元大学（国）	プログラム名	受入れ期間	参加者数（引率教員）
UNCW（アメリカ）	International Studies Program	2013/6/17 ～2013/6/20	9 名（2 名）
忠南大学（韓国）	日語日文学科新入生 キャンプ訪日団	2013/6/26	20 名（1 名）
ラジャパット大学 （タイ）	短期プログラム	2013/10/17 ～2013/10/18	10 名（1 名）
ソウル教育大学（韓国）	グローバルインター ンシップ	2014/1/15 ～2014/2/9	8 名
忠南大学（韓国）	人文学部訪日団	2014/1/14	16 名（2 名）
韓国の各大学	JENESYS2.0 韓国青 年訪日研修団	2014/1/21	27 名（2 名）

(1) UNCW海外教育研修プログラム

アメリカの協定校である University of North Carolina Wilmington (UNCW)は、教育専攻の学部生・大学院生を対象とした海外教育研修プログラムを実施している。このプログラムの目的は、約 2 週間の日本滞在中、広島、京都、奈良等を訪問し、日本の社会や文化について見聞を広めるとともに、大阪や奈良での学校訪問を通じて日本の教育について学ぶことである。参加者の中には現職教員も含まれ、それ以外の学生は、卒業後ほとんどが小・中・高の教員となる。

平成 25 年度は、6 月 17 日から 21 日までの 4 日間、本学附属学校園をはじめ、公立小学校、私立幼稚園を視察した。視察先では授業の様子を注意深く観察し、給食や昼休み等休憩時間には児童や園児と交流を楽しんだ。小学校や幼稚園では絵本の読み聞かせを行う機会もあった。

また、学校視察を通して感じた日米間の教育現場の違いについて、幼稚園の理事長や小学校の教員と熱心な質疑応答・意見交換を行った。さらに、博士課程に在籍する学生と引率教員が大阪府教育委員会を訪問し、担当者から、教育委員会の役割、児童・生徒の学力の達成目標や現在直面する問題などについて説明を受けた。

日程	訪問先	参加者数(引率教員)
6 月 17 日 (月)	大阪教育大学附属幼稚園、小・中・高	9 名 (2 名)
6 月 18 日 (火)	奈良県三郷町立三郷北小学校	2 名 (1 名)
6 月 19 日 (水)	やまなみ幼稚園 (大阪府寝屋川市)	1 名 (1 名)
6 月 20 日 (木)	奈良県三郷町立三郷北小学校	9 名 (2 名)



(2) ソウル教育大学グローバルインターンシップ

ソウル教育大学からのインターンシップ生受入れは今年度で 4 年目となる。4 週間の期間中、インターンシップ生は、前半 2 週間は柏原キャンパスで日本語の授業、教員養成課程の授業を中心に受講し、日本人学生とも活発に交流した。後半の 2 週間は東大阪市内の 2 つの小学校で観察実習を行い、子どもたちと触れ合いながら、韓国の文化を紹介する実習授業も体験した。実習先の小学校は韓国・朝鮮半島にルーツを持つ子どもたちが多く、児童たちも韓国の学生たちに大いに関心を持ち、良い影響も受けていると好評である。最終日には、大阪教育大学で修了式を行った。

なお本プログラムは、「韓国学生による教育実習を中心とした日本文化研修」として日本学生支援機構の留学生交流支援制度（短期受入れ）に採択され、研修参加者には奨学金が支給されている。また日韓文化交流基金の平成 25 年度人物交流助成（草の根交流）の対

象事業として助成金を受けて実施された。

日程	研修の内容	参加者数
2014/1/14 ～2012/1/24	大阪教育大学の授業、学外見学	8 名
2013/1/27 ～2014/2/6	東大阪市立長瀬北小学校	4 名
	東大阪市立八戸の里小学校	4 名



(3) JENESYS2.0 韓国青年訪日研修団

JENESYS2.0 韓国青年訪日研修団（主催：公益財団法人 日韓文化交流基金）を、本学としては初めて受入れた。JENESYS2.0 は 2013 年 1 月 18 日、インドネシア訪問中の安倍晋三総理大臣により発表された、アジア大洋州諸国との間の青少年交流事業であり、研修の目的は、地方でのホームステイや日本企業の訪問、日本の大学生との交流活動を通し、クールジャパンを含めた日本の魅力に対する理解を増進させ、日韓の相互理解と信頼関係の増進に寄与することである。

当日は、長尾彰夫学長と研修団団長の南二淑（ナム・イスク）群山大学日語日文学科教授による挨拶のあと、訪日研修団学生と本学学生の懇談会が実施された。懇談会では、まず研修団の学生が韓国文化を紹介し、その後 9 グループに分かれて両国の流行などについてディスカッションを行った。昼食をはさんで、午後はキャンパスツアー、図書館見学などをを行った。研修団の学生の中には、昨年度の「ソウル教育大学グローバルインターンシップ」の学生が含まれ、本学からは韓国文化研修経験者が多数参加するなど、本学と韓国の交流が活発になっていることを伺わせた。



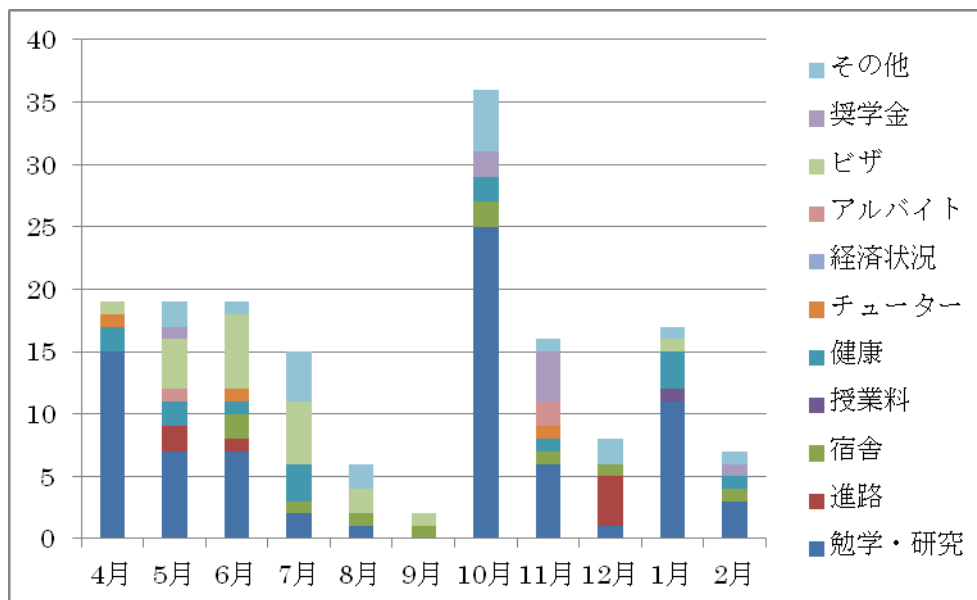
7. その他の活動

平成 25 年度も、前年度に引き続き、公開講座「日本語教育入門講座－外国語としての日本語教育－」を開講した。この講座は地域の日本語学習支援に関わっている方たちを対象としたもので、定員 20 名を超える 30 名の申し込みがあった。日本語を母語としない人たちとどのようにコミュニケーションを取ったらいいのか、日本語はどのような特徴を持つ言語か、外国語として学習する時はどのようなことが難しいのかということを、5 回シリーズで講義した。参加者からは、「内容が深いため、もっと時間をかけて学びたかった」「知らないことばかりで興味深かった」「教える時に参考になった」「あらためて自分が使っていることばについて考えるいい機会になった」「実践的な内容で役に立った」等の感想が寄せられた。来年度以降も継続する予定である。

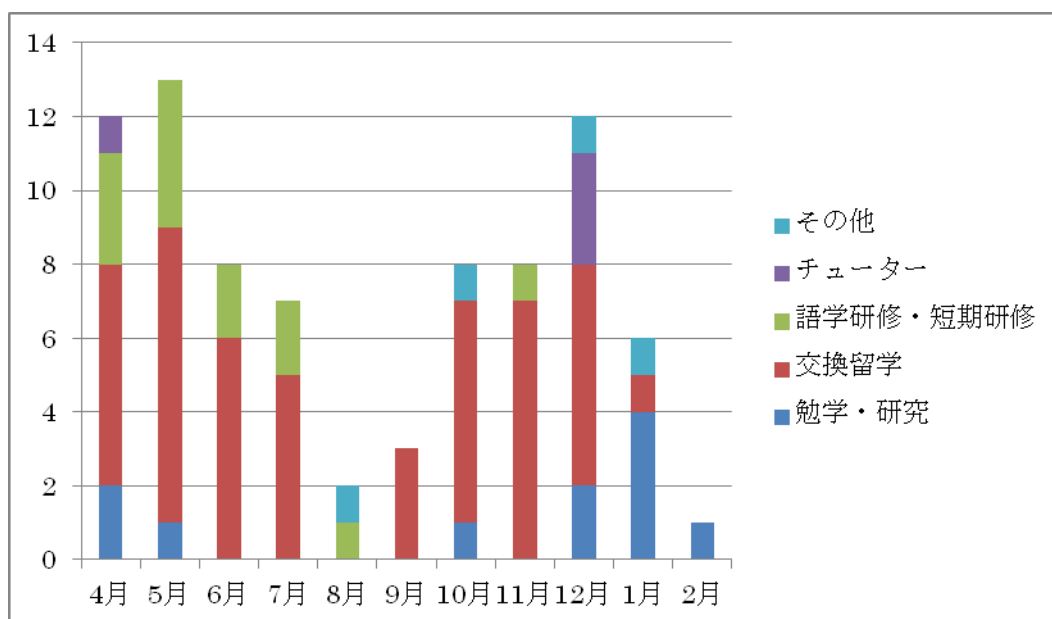
日時	講義の内容	担当者
10/5	日本語について学ぼう：日本語を外国語として見る	有田節子（大阪樟蔭女子大学）
10/12	海外の日本語教育事情：台湾編	城地茂（国際センター）
10/19	韓国人日本語学習者が教えてくれること：対照言語学の視点から	若生正和（国際センター）
11/26	国際教育と日本語教育	中山あおい（国際センター）
11/9	コミュニケーション能力向上のための教室活動	長谷川ユリ（国際センター）

8. オフィスアワー相談記録（平成 25 年 4 月～平成 26 年 2 月）

(1) 留学生



(2) 日本人学生



平成 24 年度 国際事業部門活動報告

1. 国際会議

第 3 回国際センターシンポジウム「アジアにおける民族音楽」を開催

「アジアにおける民族音楽—初等教育での取り組みを中心として」をテーマとした、国際センターと芸術講座の主催による第 3 回国際センターシンポジウムが 12 月 5 日（水）、柏原キャンパスで開催され、学生、留学生、教職員ら約 50 人が参加した。インドネシア、韓国、台湾、日本からパネリストを招き、各国での小学校音楽教育の現状や課題、グローバル化の時代に固有の伝統文化をどのように次世代に継承していくのかについて話し合われた。

最初に、「インドネシアの初等教育における民族音楽」をテーマにインドネシア芸術大学の Victor Ganap（フィクトル ガナップ）教授がインドネシアの島々で受け継がれている多彩な民族音楽や踊りを映像で紹介した。次に「韓国の初等学校国楽教育」と題し、全州教育大学の李相奎（イ サンギュ）教授が、韓国の小学校教育における民族音楽（国学）と西欧音楽の指導比率の変遷や音楽指導の現状について楽器の実演を交えて報告し民族音楽（国楽教育）の比率が増えていることを報告した。また、国立台北教育大学の黄玲玉（ホワン リンユ）教授が、台湾の音楽教育の現状にふれ、先住民族の民族音楽の伝統を保存する必要性を述べた。愛知淑徳大学の岩井正浩教授は、明治以降の日本の音楽教育の歴史について振り返り、「同じ芸術分野でも、美術が日本の伝統文化を重視したのに対し、音楽教育は西欧からの導入が圧倒的だった」と事例をあげて解説し、日本の学校現場における伝統文化を大切にする音楽教育の課題について持論を述べた。そのうえで、世界の楽器を通して各国の文化を教えている元小学校教諭の大原啓司氏の「諸民族音楽及び日本音楽の授業実践」を紹介した。

参加者からは、「子どもの頃から自国の伝統文化を学ぶとともに、他国の文化にも触れる機会をもつことが重要だと感じた」「音楽だけでなく、教育全体にかかわる考え方を学ぶことができた」などの感想が寄せられた。



2. 支援事業

(1) JICA 地域別研修「アフリカ英語圏サブサハラ理科授業評価改善」

本年度は、JICA 地域別研修「アフリカ英語圏サブサハラ理科授業評価改善」の 3 年目の研修を実施した。9 月 4 日（火）より 9 月 28 日（金）にかけて、アフリカ英語圏サブサハラ地区 7 カ国（ウガンダ、ナイジェリア、マラウィ、ザンビア、ガーナ、エチオピア、ケニア）より 17 名が本学で研修を受講した。これは、教養学科自然研究講座（向井 康比己教授、中田 博保教授）、科学教育センター（任田 康夫教授）、教職教育研究センター（島 善信教授）、国際センター（城地 茂教授）にまたがるプロジェクトである。

本研修では以下の四つの単要素からプログラムを構成した。これらは相互に関連しているので、研修の進行と共に、最も必要とする単元を随時、入れて研修を構成していった。また、今回は高校において、英語による授業を実践し、研修員、受け入れ校双方の好評を得ることができた。さらに、大阪府教育センターを見学できたため、視学官の多い研修生には非常に有益であった。以下のカリキュラムは、実際に研修員に対し実施したものである。

- 単元 1 日本とアフリカでの理科教育の現状の相互認識と授業改善点の認識
- 単元 2 アフリカで適用可能な実験教材研究
- 単元 3 授業見学と直後の集団授業評価による理科授業評価研究
- 単元 4 学習者中心および実験中心の理科授業案作成、授業実践、および授業評価実践

異なる学校（附属小中学校、公立小学校）の授業観察を講義、振り返りとうまく織り交ぜたカリキュラムであり、研修生の満足度は高かった。高等学校での英語による授業体験は、研修生の満足度が高いだけではなく、受け入れ校（大阪府立生野高校）の国際化推進にも貢献した。これは、新聞にも掲載され JICA 事業の社会への発信にもなった。

また、ビデオによる授業観察教材の満足度が高かった。このビデオ教材には英語の字幕もあり、字幕部分を予め印刷して配布できたので、研修者の授業理解に役立った。また、一部のビデオ授業は、日本の経験深い教員による評価コメントとその的確な分類が記されていて、理科授業評価の方法例として大変有効なものであった。



JICA 関西での閉講式



附属天王寺小学校でエチオピア正月を祝う研修生

(2) 「アフガニスタン教員養成支援事業－教育を通じた国際貢献」による短期研修

昨年度に続き、アフガニスタン・イスラム共和国の交流協定締結校であるラバニ教育大学（旧カブール教育大学）を対象とした教員養成支援事業を実施した。

今回の支援事業も特別支援教育講座と国際センターとが連携し、平成 25 年 2 月 4 日から 2 月 14 日までの 10 日間、ラバニ教育大学特別支援教育学科の Sayed Kalimulah Abed（サイード カリムラ アベ）講師（視覚障がい教育）と Khaja Sardar Sediqi（カハジャ サラダール サディク）講師（聴覚障がい教育）に短期研修を実施した。

カリムラ講師とサラダール講師は、大阪市内の聴覚特別支援学校の参観や講義および実習を通して、それぞれの専門分野の知見を深めました。さらに、ラバニ教育大学で昨年度 4 月に開設した知的障がい教育コースの教育にも携わりたいとの希望から、附属特別支援学校には二度の参観を行い、知的障がい児や自閉症児の教育方法及び教材教具に関する研修に積極的に取り組み、各教材を記録に収めました。また、障がい学生修学支援ルームが 2 月 6 日に主催した発達障がいに関する講演会にも参加し、発達障がいに関する基礎的な理解を深めた。

2 月 13 日には今回の研修のまとめと帰国後のアクション・プランに関する最終報告会が行われた。その後は長尾彰夫学長から 2 人の講師に修了証明書が授与された。

アクション・プランの主な内容は以下のとおりである。

1. 今回の研修で学んだことを学科の先生方と共有するために、報告会を実施する。
2. 知的障がい教育コースの先生方をサポートする。
3. アフガニスタンの特別支援教育の発展のために、今回の貴重な経験を活用する。

今後も、本学の特色を活かした発展途上国に対する教育支援活動を展開するため、平成 25 年度には、JICA 研修員の受入れ等が予定されている。



最終報告会

3. 特別講演等

(1) ロンドン大学のポール・ダウリング教授による特別講演会を開催

本学が学術交流協定を締結しているロンドン大学教育研究所のポール・ダウリング教授 (Dr. Paul Dowling) による特別講演会を 4 月 19 日 (木)、柏原キャンパスで開催した。国際センターと英語教育講座による共催で、教職員や学生約 50 人が参加した。

ダウリング教授は、現在ロンドン大学教育研究所に所属する著名な社会学者であり、教育学上の様々なコンテキストにおける情報を社会的に読み取るための方法として「社会的活動手法 (SAM : Social Activity Method)」を提唱されており、学生の研究教育にも尽力している。本学での講演は今回で二度目となる。

ダウリング教授は『教育研究における社会的活動手法(SAM)と分析』というテーマで講演した。まず、大学院博士課程の指導学生が行った研究例をもとに、簡単な二つのテキスト分析を含んだデータ分析を実施するうえでの一般的および細分化されたアプローチについて説明があった。その後、分析におけるカテゴリーの原点を論じ、SAM に関して具体的な例が紹介された。非常に高度な理論でありながら学生にも分かりやすく丁寧な講演で、参加者は約 1 時間半にわたって熱心に耳を傾けた。



(2) ロンドン大学教育研究所のジョン・オレーガン教授による特別講演会を開催

本学が学術交流協定を締結しているロンドン大学教育研究所のジョン・オレーガン教授 (John O'Regan Ph.D.) による特別講演会 (主催 : 国際センター, 英語教育講座) を 10 月 17 日 (水)、柏原キャンパスにて開催し、学生や教職員約 40 名が参加した。

オレーガン教授は著名な言語学者であり、最近では「グローバル化した時代における言語政策や異文化コミュニケーション」を研究テーマとし、大学では TESOL (他言語話者に対する英語教育法) の分野で修士および博士課程の学生を指導している。

今回の講演は『世界言語としての英語 : グローバル時代における英語の指導と学習』と題し、世界言語「英語」の成立過程とその要因と結果の分析、さらに日本を含めた東アジアを例に取り、話者の第一言語との影響関係を具体的に指摘するなど、日本の英語学習者および英語教員を目指す学生にとって非常に興味深い内容であった。

参加者は約1時間にわたり熱心に耳を傾け、その後の質疑応答では講演内容をよく理解した的確な質問、コメントがなされた。



4. その他

台湾教育代表团が来学

本学の協定校である国立台中教育大学の楊思偉学長、国立台北教育大学の張新仁学長はじめ、台湾の教育関係者総勢15名が9月4日（火）、本学柏原キャンパスを訪問した。

当日は、長尾学長、越桐理事、石田教員養成課程長、向井国際センター長、城地国際センター教授及び若井事務局長と、本学教育学部（教員養成課程・教養学科・第二部）の設置の経緯、本学のカリキュラム及び日本の教育制度について意見交換を行なった。



平成 25 年度 国際事業部門活動報告

1. 協定校交流

(1) 国立屏東教育大学（台湾）と学術交流協定を締結

本学は、台湾の屏東教育大学と教育及び学術交流に関する協定を締結した。調印式は、5 月 20 日（月）に本学の長尾彰夫学長が同校を訪問して執り行われた。

屏東教育大学は台湾南部に位置する屏東市にある国立の教育大学で、1946 年に台湾省立屏東学校として設立された。学生数は約 5,000 人で、3 学部（教育学部、理学部、人文社会学部）で構成され、教員や将来を担う人材の育成として、光（多元知恵）、熱（生命）、美（芸術涵養）、力（心身健康、科学創造）をモットーに教育活動を行っている。



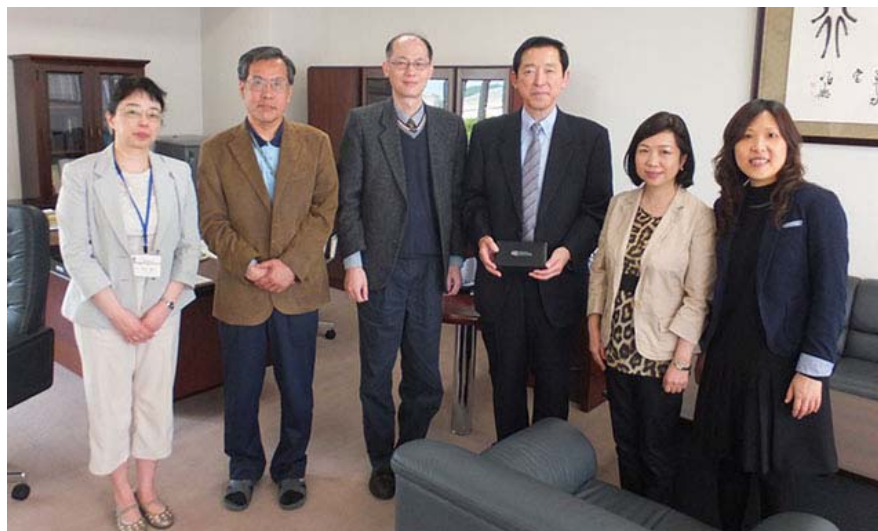
協定の締結を受けて、屏東教育大学の劉立敏准教授（人文社会学部視覚芸術学系主任）をはじめ、3 人の教員と視覚芸術学系の 18 人の学生が 6 月 14 日（金）、本学を訪問し、図書館、学内の彫刻作品等の見学の後、美術教育専攻の学生との意見交換会が行われた。

今後は、両国の文化理解を深めるだけでなく、美術教育についての日本と台湾の比較研究など、教員間の交流が期待される。



(2) 香港教育学院より訪問団来校

本学の協定校である香港教育学院の盧成皆教授をはじめとする 3 名が 5 月 17 日（金）、柏原キャンパスを訪問した。当日は、五月祭が行われているなか、附属図書館長室において、栗林理事やセンター教員とと主に大学院レベルの交流について意見交換を行った。



(3) カナダ・ビクトリア大学の Jacqueline Prowse 氏が学長を表敬訪問

平成 25 年 2 月に教育及び学術交流に関する協定を締結したビクトリア大学（カナダ・ブリティッシュコロンビア州）の English Language Center ディレクター Jacqueline Prowse 氏が 5 月 14 日（火）、長尾学長を表敬訪問した。

ビクトリア大学は、日本からアクセスの良い北米西海岸にある大学で、今後の交流の可能性などについて活発な意見が交わされた。

意見交換の後、新緑が美しい初夏のキャンパスを長尾学長が自ら案内した。

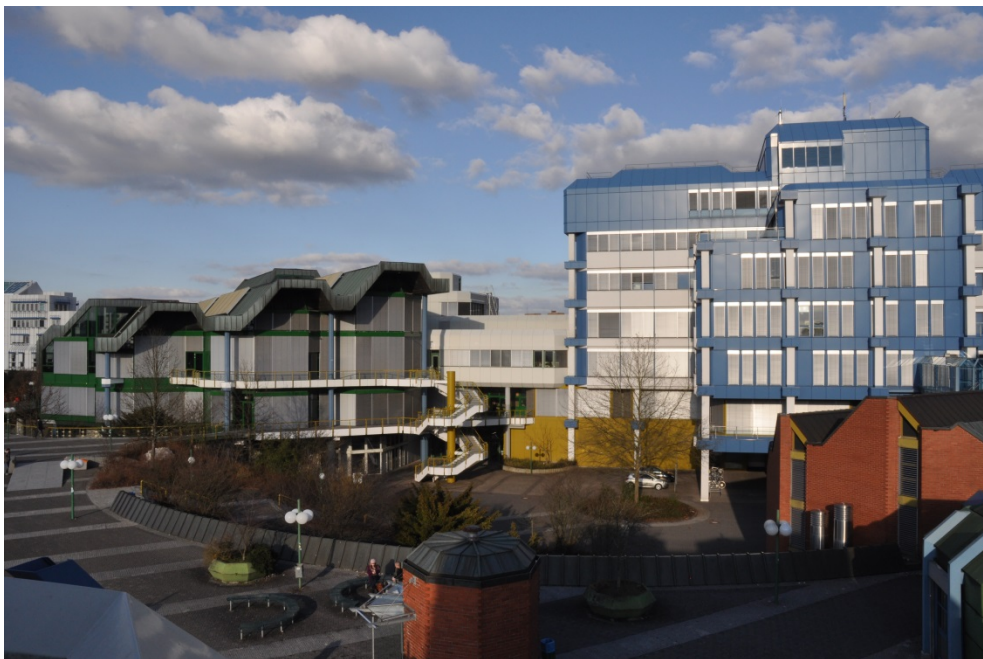


(4) トリア大学（ドイツ連邦共和国）第 2 学部（言語・文学・メディア学）と交流協定を締結

本学は 9 月 1 日付けでドイツのトリア大学第 2 学部（言語・文学・メディア学）と交流協定を締結した。トリア大学は国立大学で、学生数約 15,000 人（2013 年データ）、6 学部 30 専攻と神学部（カトリック）がある。ここは街全体に大学の施設が散在しているドイツの伝統的な大学と異なり、キャンパスを持っている、人文・社会学の教育研究を中心とした新しい大学である。ただし、その起源は古く、1473 年に遡ることができるが、1798 年ナポレオンの侵攻により閉鎖され、その後 1970 年にカイザースラウテルンとトリアの 2 つの都市に再び創設されたが、1975 年にそれぞれが分離独立し、現在に至っている。

トリア市（人口約 10 万 5000 人 2011 年現在）はラインラント・プファルツ州にあり、古代ローマに起源を持ち、モーゼル川沿いにあり、ドイツワインの有名な産地である。そして、フランス、ルクセンブルク、ベルギーとの国境近くに位置している。

トリア大学では、毎年 8 月に語学研修を行うサマーコース（4 週間）が開催されており、交流協定締結以前であったが、今年度本学から 4 名の学生が参加した。今後、さらに 1 年間の交換留学に加えて、日本学科所属の学生との共同学習プロジェクト（異文化理解をテーマ）も計画しており、活発な交流が期待できよう。



(5) ハノイ大学（ベトナム社会主義共和国）との交流協定を締結

ベトナムのハノイ大学との間に、「教育及び学術交流に関する協定」及び「学生交流に関する覚書」を締結し、2014年1月10日の署名をもって発効した。

ベトナムから日本への留学生数は、平成24年度で国別第4位となっており、日越外交関係40周年であった平成25年は、両国政府が主となっており、いろいろな事業が行われ、これをきっかけに学術・教育分野においてもベトナムとの交流が一層盛んになると予想される。

ハノイ大学は、1959年に設立されたハノイ外国語大学が前身である。国内有数の名門大学であり、特に外国語大学としてトップの実績を持つ。学生数は約12000名で、留学生は約600名である。学部は日本語をはじめ、中国語、ロシア語、スペイン語、フランス語など11言語の学科を有する外国語学部の他に、経営・観光学部、情報工学部、国際関係学部、ベトナム学学部がある。

最近、外国語学部が改組され、日本語学科は日本語学部になった。日本語学部は、日本語基礎学科、通訳翻訳学科、日本語学科、日本文学文化学科、専門教育学科の5学科から構成されている。



ハノイ大学本部棟



ハノイ大学国際教育センター



ハノイ大学外国語学部

(6) JASSO留学生交流支援制度（短期受け入れ）による研修 “2013 OKU School Internship and Cultural Experience Program (OKU SICEP)” を実施

JASSOの留学生交流支援制度（短期受け入れ）に申請したプログラム「日本における教育体験プログラム」が採択され、本学の協定校であるノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）（アメリカ）と香港教育学院（中国）から各2名の学生が奨学金を授与されて、7月3日から7月18日まで実施された本研修に参加した。

この研修はすべて英語で行われた。研修員たちは、日本の教育に関して「日本の教育制度」「日本の学校」「日本における特別支援教育」「日本の外国語教育」そして「学校安全」等の講義を受けた後、附属特別支援学校、附属池田小学校を訪問、施設や授業見学を行った。さらに奈良市立富雄第三小中学校において小中学校の生徒を対象に、自国の文化を英語で紹介する研究授業を実施した。また、週末を利用して、山本能楽堂や博物館「大阪暮らしの今昔館」を訪問し、日本の伝統文化にも親しんだ。

このプログラムは、研修期間を通して、英語の得意な本学の学生がチューターとして研修をサポートし、研修員のみならず、本学の学生にとっても国際交流あるいは異文化理解という観点から有意義なものであったといえよう。



2. 国際会議

第4回国際センターシンポジウムを開催

「国際協力シンポジウム ー国際教育協力の未来」をテーマとする第4回国際センターシンポジウムを11月27日（水）、柏原キャンパスで開催し、学生、留学生、教職員ら約90人が参加した。筑波大学、広島大学、青年海外協力協会、それに本学の卒業生で青年海外協力隊員経験者らをパネリストに招き、教員養成大学としての国際協力のあり方について話し合った。

最初に「JICA 事業概要 ～JICA ボランティアの活動、国内における開発教育支援」と

題し、青年海外協力協会近畿支部長の河合憲太氏が、JICA の概要を自らの経験に即して紹介した。次に「グローバル化時代において高等教育をうけることの意義と社会的責任」をテーマに、大阪大学人間科学研究科大学院生の末岡加奈子氏が、マラウイの経験を踏まえて、日本という豊かな国で高等教育を受ける大阪教育大生の社会的責任を報告し、貴重な体験に会場の学生も聞き入った。広島大学大学院国際協力研究科・馬場卓也氏教授は「内発性から見た 21 世紀のアフリカ社会における数学教育」と題してケニアにおける理科教育の経験を話し、国際教育協力を専攻とする日本の大学院教育について述べた。筑波大学教育開発国際協力研究センター・磯田正美教授は「知識基盤社会における教育協力の価値～日本による文化化」をテーマに、アジアの新興国における数学教育の現状と、現地の文化に根付いた教育を四角形の面積計算の事例をあげて解説し、文化の相互理解の重要性を述べた。最後に本学実践学校教育講座の秋吉博之教授が「国際教育協力の実際―海外で学んだこと、教えたこと―」と題し、国際協力は一方的なものではなく、相互の学びあいであることを強調した。

続いてパネルディスカッションに移り、会場からの質問を受け付けた。国際教育協力に参加を希望するという学生から熱心な質問が寄せられるなど、国際活動の希望の高さをうかがわせた。終了後の情報交換会でもここでも参加者は有意義な時間を過ごすことができた。



3. 支援事業

(1) JICA サブサハラ英語圏の理科研修プログラムを実施

JICA（独立行政法人国際協力機構）研修受入事業の平成 25 年度地域別研修「英語圏サブサハラアフリカ理科授業改善」を、9 月 19 日から 10 月 11 日にかけて実施した。

この事業は、国際貢献の一環として実施しているもので、今年度は英語圏アフリカの 6 か国（エチオピア、ケニア、マラウイ、ナイジェリア、スワジランド、ザンビア）から国家教育機関の専門官、指導官、指導主任など 19 人が参加した。

研修では、日本の初中等理科教育の現状を理解するため、学内での講義だけでなく、小・

中・高等学校の授業見学や、教育委員会、教育センターの視察をした。また、広島研修旅行では、広島平和記念資料館を見学し、平和教育についても深く考える機会となった。

プログラムの最後には、研修の成果を踏まえ、研修員がそれぞれ授業案を作成し、模擬授業を行った。

閉講式では、研修員の代表が研修の感想や今後の意気込みを語り、本学と JICA に対し謝辞を述べた。



(2) JICA プロジェクト「アフガニスタン教師教育における特別支援教育強化プロジェクトフェーズ2 (STESE2)」を開始 (平成 25 年 4 月)

このプロジェクトは、フェーズ 1 でアフガニスタンの教員養成校(TTC)に開設された特別支援教育概論 (2 単位) の講義の拡充・改善を目標とする。

協力期間は 2013 年 1 月から 2015 年 12 月の 3 年間であり、アフガニスタンの関連機関には本学が協定を結んでいるラバニ教育大学も含まれており、本学はインドネシア教育大学 (UPI) とともに、井坂行男教授を中心に特別支援教育講座および国際センター (国際事業部門) が担当部署として受託する。

この事業は長期研修 (1 年) と短期研修 (3 週間) から構成されており、前者は①マスタートレーナー研修②特別支援教育教員養成課程準備を目的とし、後者は①基礎知識の向上②教科書素案の改訂を目指している。

国際センターは 2013 年 4 月から本学で 1 年間の長期研修を開始した研修員 3 名 (教師教育局技官 1 名、TTC 講師 2 名) の日本語教育を担うことで本プロジェクトに協力した。

4. 特別講演

ロンドン大学教育研究所のレズリー・グーレイ上級講師による特別講演会

本学が学術交流協定を締結しているロンドン大学教育研究所（IOE）のレズリー・グーレイ上級講師（Lesley Gourlay Ph.D.）による特別講演会（国際センター・英語教育講座共催）を10月17日（木）、柏原キャンパスで開催し、学生や教職員約40名が参加した。

グーレイ氏はスコットランド出身で、応用言語学、特に「現代のリテラシー」を専門分野とし、IOEではアカデミック・ライティング指導部門のディレクターを務めている。

今回は、*Internationalization of the Curriculum: Advantages and Challenges*『カリキュラムの国際化：その利点と課題への挑戦』と題し、大学の国際化に関して具体的な事例を紹介しつつ、その可能性と課題について講演した。グーレイ氏は講演の途中で何度も質問を交え、常に聴衆の理解と関心を確認しながら講演を進めた。

「留学」をキーワードとしていたので、留学経験者や留学志望の学生、そして本学に留学中の学生たちにとって非常に興味深い内容となった。参加者は約1時間にわたり熱心に耳を傾け、その後のグループ討論では講演をふまえた活発な議論が行われた。



平成 24 年度 国際センター行事

新入生オリエンテーション・歓迎会

平成 24 年 4 月 5 日（木）

平成 24 年 9 月 28 日（金）・10 月 2 日（火）

平成 24 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを教員養成課程棟 1 階の会議室で開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年の新入生は右表のとおり 77 名でした。

向井国際センター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関すること等について説明を行いました。

夕方からは、指導教員や先輩留学生、日本人学生を交えた歓迎会が開催され、新入生の自己紹介、教員・先輩等の紹介を行いました。和やかな雰囲気の中新入生の緊張もいくぶんかほぐれた様子でした。

区分	前期	後期
学 部 生	14	—
大学院生	15	—
教 研 生	6	—
日 研 生	—	10
研究留学生	—	1
特別聴講学生	3	18
研 究 生	5	5
計	43	34

国立台南大学（台湾）黄教育学部長が来学

平成 24 年 4 月 9 日（月）

平成 24 年 4 月 9 日（月）に台湾・台南大学の黄宗顕教育学部を団長とする 12 名が来校され、本学長尾学長を表敬訪問されました。台南大学は、現在では総合大学となっていますが、日本統治時代からの台南師範学校を前身とする教員養成系大学です。これは、教員養成系大学が他の高等教育の学校と合併して総合大学となったのではなく、教員養成系大学が単独で総合大学に転換したというユニークな経歴を持つため、本学を表敬訪問されました。短い訪問ではありましたが、少子高齢化が進む日台の教育問題について意見の交換がされました。



「第7回かしわら国際交流フェスティバル」を柏原キャンパスで開催

平成24年5月19日（土）

大阪教育大学と柏原市のさらなる国際化を推進するため、本学留学生と市民との交流を図り、異文化理解、国際理解に寄与することを目的として「第7回かしわら国際交流フェスティバルーおいな一れ！世界へー」を開催しました。五月祭と同時開催となった柏原キャンパスでは、本学留学生、学生、一般市民を合わせ550人が参加し、大勢の人で盛り上がりました。

今年度は、「各国料理を提供する世界の食卓・フードゾーン」「歌・踊りを披露するステージ」「各国の文化紹介をするふれあいテーブル」の3つのイベントを同時進行で実施しました。

世界の食卓・フードゾーンでは、留学生が水餃子（中国）、小籠包（中国）、チャジャン麺（韓国）、グリーンカレー（タイ）、アイスフルーツ（インドネシア）の5種類の料理を提供しました。

ふれあいテーブルでは、マダガスカル・インド・韓国・アフガニスタンからの留学生がそれぞれ写真や地図を使って母国の文化や暮らし・伝統的な遊びについて紹介しました。また、内モンゴル出身の留学生によるモンゴルのゲル（移動式住居）体験では、参加者は実際にゲルの中に入って遊牧民の暮らしに触れたり、伝統的な民族衣装を着て写真を撮るなどして楽しんでいました。

メインステージでは、吹奏楽部によるオープニング演奏に始まり、長尾彰夫学長・吉田茂治柏原副市長による挨拶の後、地元柏原市の児童の皆さん「シラダンス・スペース」による創作モダンバレエ、留学生による美しい音色をもつ中国伝統楽器『二胡』の演奏、柏原市の団体「フラ オ ナニフラリマ」によるフラダンス、インド出身のマダンさんによる民族歌謡、学生サークル「いちやりばちょーで一エイサー隊」による沖縄エイサー踊り、留学生による中国民族舞踊、留学生と日本人学生の「International Dance Group」による踊り、よさこいソーランサークル「凜凜」によるよさこいソーラン踊りの披露があり、続いて留学生支援団体「国際ソロプチミスト大阪・柏原」による艶やかな着物の着付けが披露されました。最後は留学生がボーカルをつとめるバンドの演奏で大いに盛り上がり、会場はインターナショナルな雰囲気に包まれました。





春季日本文化研修－信楽・長浜－

平成 24 年 6 月 2 日（土）

平成 24 年度春季日本文化研修として、大阪教育大学に入学したばかりの新入留学生や彼らの日本人チューターを含めた 70 名が滋賀県に出かけました。

信楽陶園たぬき村では留学生みずから信楽焼の陶器作りに挑戦し、悪戦苦闘しながらも「ONLY ONE」の作品作りを楽しんでいました。その後訪れた長浜・黒壁スクエアでは限られた時間を有効に使ってスクエア一帯を散策しました。

留学生が日本の伝統文化に触れ、日本人学生と交流することを目的とした本研修。始めは少し緊張気味だった学生達も、帰るころにはすっかり打ち解けたように見えました。



留学生による無料語学教室 (Language Table)

平成 24 年 6 月～ 7 月

平成 24 年 11 月～ 12 月

本学で学ぶ留学生と日本人学生の交流促進を目的として平成 19 年にスタートした「留学生による無料語学教室」は、今年で 6 年目を迎えました。第 13 回・14 回となる平成 24 年度は、留学生との交流を希望する受講生 65 名が語学教室に参加し、留学生の母語をとおした国際交流を楽しみました。普段授業等で言語を学ぶ受講生も、同年代の留学生ならではの現地情報や若者文化の実情に聞き入っている様子でした。どの教室も和やかな雰囲気が進められ、留学生・受講生ともに言語学習を越えた文化交流という貴重な時間を過ごせたようです。本プログラムは平成 25 年度も継続して開講予定しています。

留学生向け就職支援ガイダンスを開催

平成 24 年 6 月 20 日 (水)

6 月 20 日 (水) に柏原キャンパスで留学生向け就職支援ガイダンスを開催しました。第 4 回となる今回は、昨年同様日経就職ナビを運営している株式会社ディスコの中川氏に加え、本学卒業生 1 名と在校生 1 名をゲストパネラーに迎えて開催されました。

就職氷河期と呼ばれる昨今、日本人学生も企業内定を目指して就職活動に全力投球しています。このような厳しい状況下において本学留学生達が異国である日本で遜色なく就職活動ができるよう、また、少しでも就職活動への不安解消につながるようにと願って開催したのが本ガイダンスです。参加した約 30 名の留学生からは、「日本の就職活動のことがよく分かった。」「先輩の話を聞いてやる気がでた。」などの感想が寄せられました。



中川氏によるガイダンス



卒業生の呂氏が体験談等を語る

留学生のための七夕祭りを実施

平成 24 年 6 月 27 日（水）

今年度も、シニア CITY カレッジと国際センター共催「留学生交流会」が 6 月 27 日（水）に開催されました。この催しは、カレッジ生のみなさんと大阪教育大学で学ぶ留学生との「日本の伝統行事を通じた国際交流」を目的とするものです。

今回は「七夕祭り」として、カレッジ生代表による七夕の由来の説明のあと、留学生全員が浴衣に着替えて、短冊作りや飾りつけを行い、七夕の歌を合唱し、楽しくにぎやかな時間を過ごしました。留学生は「七夕祭りは日本に来て初めてですが、楽しかったです。」と話していました。



柏原市民に講演 ―異文化の暮らしを学習しよう―

平成 24 年 7 月 4 日（水）

平成 24 年 11 月 7 日（水）

柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」では、本学の留学生が講師を担当しています。平成 24 年度は 7 月 4 日（水）と 11 月 7 日（水）の 2 回開催され、7 月にはインドネシア出身の日本語日本文化研修留学生 Eirene Putri, Suliyanto（通称イレネ）さんと Fitriyani（通称フィトリ）さんの 2 名が母国について紹介しました。フィトリさん、イレネさんともに美しい民族衣装に身を包み、会場の皆さんを魅了しました。

日本人にも人気のある観光地バリ島は馴染みがあるものの、多様な民族国家であるインドネシアの文化についてはあまり知られていません。今回は、ジャカルタ出身のフィトリさん、ジャワ出身のイレネさんが、それぞれの出身地の見どころ、食べ物、行事などにつ

いて写真を交えながら詳しく説明しました。

また 11 月にはマダガスカル出身の教員研修留学生、フランシア・ランジアティアナさんが母国について紹介しました。フランシアさんは、母国では高校の教員で、英語を教えています。

アニメーション映画「マダガスカル」がヒットして一躍有名になりましたが、日本人にとっては未知の国と言えるマダガスカルについて、フランシアさんは、民族構成や言語、伝統的な行事、食生活、教育制度、独特な生態系を持つ動植物の紹介等、幅広い話題を取り上げ、スライドで写真を見せながら一つずつ丁寧に説明しました。

聴講された市民の皆様からは「インドネシアの島の数や民族の数が多いことに驚いた」「衣装の美しさに感動した」また「マダガスカルは動物ばかりいる国だと思っていたが、すばらしい国だと思った」「日本語が上手で、話が良く分かった」等、様々なご感想を頂戴しました。毎回の講座を楽しみにしておられる方も多いということで、地域に根ざした国際交流の取り組みとして、今後も継続したいと考えています。



留学フェアに参加

台湾 平成 24 年 7 月 21 日（土）～22 日（日）

韓国 平成 24 年 9 月 8 日（土）～ 9 日（日）

香港 平成 24 年 8 月 18 日（土）

モンゴル 平成 24 年 10 月 5 日（金）～7 日（日）

今年度も 7 月～10 月にかけて、日本学生支援機構主催による「日本留学フェア」に参加しました。本フェアは日本への留学を希望する高校生・大学生等を対象として世界各国主要都市で毎年開催されており、今年度は台湾，韓国，香港，モンゴルの 4 カ国に参加し、日本留学を希望する多くの学生に大阪教育大学を P R しました。

《本学ブース訪問者数》

台湾（高雄・台北）

7 月 21 日・22 日開催 … 64 名

韓国（ソウル・釜山）

9 月 8 日・9 日開催 … 57 名

モンゴル

10 月 5 日・7 日開催 … 75 名

3 カ国 5 会場を通して計 196 名のフェア参加者が本学ブースを訪れ、熱心な眼差しで担当教員の説明に耳を傾けていました。

香港は、香港日本文化協会にて、大学案内のプレゼンテーションを行い、留学希望の高校生・大学生・教育関係者約 200 名の参加がありました。



オープンキャンパスを開催

平成 24 年 7 月 28 日（土）・29 日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの説明会と日本人学生向けの留学相談会を開催しました。近畿圏の日本語学校等から留学生 42 人、留学等に関心のある日本人受験者 28 人の参加がありました。本学へ進学を希望する留学生には、在籍留学生がチューターとなって、説明会の通訳補助や大学施設の案内を行い、進学相談にも応えていました。

また、留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生の支援制度についての説明が行われた後、私費外国人留学生試験等に関する受験資格や試験科目、注意事項についての説明が行われました。引き続き、先輩留学生の体験談として、28 日には李文昊さん（教養学科文化研究専攻日本・アジア言語文化コース）と鄒震さん（教養学科情報科学専攻）、29 日には方伝才さん（教養学科文化研究専攻社会文化コース）と田雪さん（教養学科健康生活科学専攻）が、それぞれ本学の良さや試験対策について語ってくれました。

並行して開催された交換留学や語学研修に関心のある日本人受験者向けの相談会では、熱心な受験者の質問に対して、国際センタースタッフが丁寧に応えていました。

平成 24 年度留学生修了証書授与式を举行

平成 24 年 8 月 8 日（水）

平成 25 年 2 月 20 日（水）

平成 24 年度留学生修了証書授与式が前期は 8 月 8 日（水）、後期は 2 月 20 日（水）に事務局棟 4 階大会議室で執り行われ、日本語・日本文化研修留学生（7 名）、別聴講学生（29 名）、教員研修留学生（6 名）に修了証書が授与されました。長尾学長から一人ずつ名前が呼ばれると、修了生は緊張した面持ちで証書を受け取りました。長尾学長、向井国際センター長が祝辞を述べた後、フィトリヤニさん（インドネシア）とルーベン・ホルツさん（ドイツ）が前期修了留学生の代表として、ジョシ・ルシャリ・ナラヤンさん（インド）とブルン・ダニエル・リーさん（オーストラリア）が後期修了留学生の代表として謝辞を述べました。

その後、大学会館 1 階第一食堂に会場を移し、地域の国際交流団体および教員とともに交流会を行いました。交流会では、国際センターの教員から記念品と花束が一人一人に手渡された後、修了生一人一人からお別れのスピーチが述べられ、本学の思い出に涙する人もいました。そして、修了生たちの前途を祝して、参列者全員で作ったアーチの花道で送り出しました。



夏季日本文化研修 ―プロ野球観戦―

平成 24 年 8 月 10 日（金）

留学生・日本人学生あわせて 23 名、引率 2 名が今年も夏季日本文化研修として、オリックス対楽天のプロ野球戦を京セラドーム大阪で観戦しました。野球観戦の前に、国際センターの長谷川教授および国際系の八杉係長より日本の野球のルールやチームプレイについて事前講義をしてもらい、野球が身近でない学生たちも熱心に聞き入っていました。試合は地元大阪ということで、オリックス応援席から観戦しました。テレビで見るのとは違い、実際の球場の雰囲気や選手のプレー、ファンの応援は迫力があり、留学生たちも夢中になって歓声をあげて応援していました。また、日本人学生から野球のルールについて教えて

もらったり、出身国の野球について説明したりと会話もはずみ、楽しい交流の機会となりました。



国立台中教育大学，国立台北教育大学等台湾の教育関係者が来学

平成 24 年 9 月 4 日（火）

本学の協定校である国立台中教育大学の楊思偉学長，国立台北教育大学の張新仁学長はじめ台湾の教育関係者総勢 15 名が 9 月 4 日（火），本学柏原キャンパスを訪問しました。

当日は，長尾学長，越桐理事，石田教員養成課程長，向井国際センター長，城地国際センター教授及び若井事務局長と，本学教育学部（教員養成課程・教養学科・第二部）の設置の経緯，本学のカリキュラム及び日本の教育制度について意見交換を行いました。会談は終始和やかな雰囲気で行われました。



秋季日本文化研修－和歌山－

平成 24 年 10 月 20 日（土）

平成 24 年 10 月 20 日（土）に秋季日本文化研修を開催しました。穏やかな秋晴れだったこの日、本学留学生 57 名、日本人学生 11 名、短期文化研修で本学を訪れていたタイ・ラジャパット大学の学生 10 名、および引率教職員 3 名を含む合計 80 名で、一路和歌山方面へ向かいました。

最初に訪れた和歌山城では城内の展示品をじっくり観察し、疑問に思う事を引率教員に質問しながら充実したひと時を過ごしました。和歌山城天守閣に続く石段は想像以上に長く、往復するといいい運動になります。すっかりお腹を空かせた学生達は、その後和歌山の郷土料理に舌鼓を打ちました。

午後からは安珍・清姫伝説で知られる道成寺を散策しました。国宝の千手観音を間近で拝観することができた他、参加学生達は、安珍・清姫伝説ゆかりの絵画や写真を興味深そうに観察したり、境内で記念写真を撮ったりと楽しそうでした。

行程の最後は待ちに待ったみかん狩りでした。みかん畑に到着するや、学生達は事前講義で学んだ「美味しいみかん」を探し始めました。お土産用のビニール袋に詰める傍ら、食べ放題のみかんをほおぼりながら、甘酸っぱい自然の味を心行くまで堪能していました。

春季・秋季日本文化研修は、本学留学生が日本（主に近畿県内）の伝統文化を体験することと日本人学生と交流することを目的としています。この日も留学生と日本人学生達は、各地での見学や散策をとおして貴重な思い出を共有したように見えました。



第7回東アジア教員養成国際シンポジウムに参加

平成24年11月3日（土）～4日（日）

11月に韓国・ソウル教育大学で第7回東アジア教員養成国際シンポジウムが開催され、本学からは長尾学長、教職教育研究センター富田先生、実践学校教育講座大脇先生・裴先生、向井国際センター長が参加しました。第7回を迎えた本シンポジウムでは「東アジアの大学における教員養成の質保証」を主題とし、韓国・中国・日本・台湾の4つの国・地域から約140人の大学関係者が集まり、母国の教員養成の現状や課題について議論し、活発な意見交換が行われました。

留学生に奨学金を授与

平成24年12月12日（水）

12月12日（水）に大阪教育大学留学生後援会奨学金等贈呈式を行い、私費外国人留学生に奨学金を授与しました。

留学生代表として挨拶した学部3回生の韓菁（カン セイ）さん（中国）は「いつも、私たち留学生を支援していただいて、言葉に表せないほど、ただ感謝の気持ちでいっぱいです。皆様の支援を有効に使います。学業に専念することはもちろんのこと、私は卒業後に日本で就職して、その時に「後援会の皆さまの支援があつてからこそ私」と言えるように頑張ります」とお礼の言葉を述べました。

留学生後援会は、留学生への経済的支援、地域との国際交流の促進を目的として、地域の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成15年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金3人、留学生後援会6人、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金3人の計12人に奨学金を授与しました。

奨学金等提供団体

- ◆ 国際ソロブチミスト大阪ー柏原
- ◆ 柏原ライオンズクラブ
- ◆ 大阪柏原ロータリークラブ
- ◆ 大阪教育大学生協
- ◆ 大阪教育大学留学生後援会



日本文化を楽しむ会着物体験 グローバル香芝主催

平成 25 年 2 月 9 日（土）

グローバル香芝様主催による日本文化体験が今年度も開始されました。先輩留学生から本行事について既に聞いている留学生もあり、期待に胸躍らせる女子学生 15 名・男子学生 1 名が、寒空のもと「日本文化を楽しむ会」に出かけました。

まず振袖と羽織袴に身を包み、後ろ姿を鏡に映して豪華な帯結びに大はしゃぎでした。その後着物姿のまま茶道体験にご案内いただき、伝統的な和菓子とお抹茶を堪能した後は、広間でお琴の手解きを受けながら、友人たちと賑やかに写真を撮りあいました。

賑やかなお昼時間を過ごし、午後からの日本文化は俳句でした。想いを 17 文字にしたためるのは、日本語を母語にする者にとっても容易ではありません。が、現在日本語学習中の留学生たちは、題材の草花や外の景色に目をやりながら、和気藹々と俳句づくりを楽しんでいる様子でした。



留学生日本文化体験研修 ―岡山・香川―

平成 25 年 2 月 14 日（木）～15 日（金）

平成 24 年度の留学生日本文化体験研修として、2 月 14～15 日の二日間、留学生および引率教員あわせて 36 名が岡山・香川方面の名所を訪れました。寒空の中バスで出発した一行は、事前講義で学んだ内容を間近で見られる瞬間に胸躍らせました。日本三名園のひとつである後楽園の美しさに感激し、宿泊地となる琴平に向かう途中の瀬戸大橋では、橋のダイナミックさに留学生は心から驚いたようでした。琴平温泉で日本の温泉文化をゆっくり堪能し、翌日は金毘羅宮を訪れた後、旅の締めくくりとして中野うどん学校で初めてのうどん作り体験を楽しみました。例年より若干少ない人数での研修となった今回ですが、参加者は互いに交流しながら日本文化について深く学び、研修を満喫している様子でした。

参加者の一人、中国出身の大学院生、周毓（シュウ ユウ）さんは、「後楽園はさすが日本三大庭園の 1 つとされているだけあってとてもきれいですが、中国蘇州の庭園とは全然違う風景でした。丹頂鶴がいる鶴舎で身近に動物を見るのはとても楽しかったです。瀬戸大橋を渡った時は本当にびっくりしました。現代日本建築の技術や素晴らしさに敬服する思いです。二日間の研修は色々な場所を見て回り、学ぶことが多くありました。また皆が仲良くなれたことがとても良かったと思います。」と感想を述べています。



冬季日本文化研修 ―大相撲―

平成 25 年 3 月 15 日（金）

国際センター・春の恒例行事として定着してきた、大相撲大阪場所観戦。3 月 15 日に 25 名の留学生が行ってきました。当日は出発前に国際センターの城地茂教授から相撲に関する事前講義を受け、心身とも準備万全の状態で会場の大阪府立体育会館へ向かいました。

会場に到着すると、入場前から、出入り口付近で力士の到着を待つ相撲ファンの熱気が留学生を出迎えます。学生たちも、しばしの間会場前の華やかな雰囲気味わった後、場内に入り観戦しました。土俵からはやや遠目の客席でしたが、力士たちがぶつかり合う音など、やはり間近で見る大相撲の迫力は圧巻です。留学生たちは取り組みごとに歓声を上げ、また近くのお客さんと一緒になって力士に声援を送っていました。また、通路に出て花道を出入りする力士たちの様子や表情をじっくりと観察しようとする学生もあり、思い思いにテレビでは味わうことのできない会場の空気を満喫していました。



忠南大学（大韓民国）との交流協定を締結

平成 25 年 3 月 21 日（木）

本学は、韓国の忠南大学との間に、教育及び学術交流に関する協定書、並びに、学生交流に関する覚書を締結しました。両文書は 3 月 21 日の署名をもって発効しています。

忠南大学校は韓国中部に位置する国立総合大学で、1952 年に創立されて以来、教育研究・人材養成・創意開発を理念に多くの卒業生を輩出してきました。とりわけ師範大学は技術教育が注目を集めるほか、優秀な中学・高校教員を養成し続けています。

専任教員数は 895 名で、学生数は学部が約 17,000 名、大学院が約 4,800 名です。師範大学（中等教育教員養成学部）を始めとし、自然科学・工学・法学・医学・芸術・生物学・看護・社会科学・経済経営・農学・薬学・生活科学・獣医学・教養学など大阪教育大学と共通する単科大学（日本の学部に対応）で構成されています。

平成 25 年度 国際センター行事

新入生オリエンテーション・歓迎会

平成 25 年 4 月 3 日（水）

平成 24 年 9 月 27 日（金）・30 日（月）・10 月 2 日（水）

平成 25 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを、教員養成課程棟 1 階の会議室で開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年の新入生は右表のとおり 87 名でした。

向井国際センター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関すること等について説明を行いました。

夕方からは、指導教員や先輩留学生、日本人学生を交えた歓迎会が開催され、新入生の自己紹介、教員・先輩等の紹介を行いました。和やかな雰囲気の中新入生の緊張もいくぶんかほぐれた様子でした。

区分	前期	後期
学 部 生	15	—
大学院生	18	—
教 研 生	7	—
日 研 生	—	15
研究留学生	—	1
特別聴講学生	6	21
研 究 生	2	2
計	48	39

「第 8 回かしわら国際交流フェスティバル」を柏原キャンパスで開催

平成 25 年 5 月 18 日（土）

大阪教育大学と柏原市のさらなる国際化を推進するため、本学留学生と市民との交流を図り、異文化理解、国際理解に寄与することを目的として「第 8 回かしわら国際交流フェスティバル」を 5 月 18 日（土）に開催しました。前回に引き続き五月祭と同時開催で、柏原キャンパスは大勢の人で盛り上がりました。

今年度は、「各国料理を提供する世界の食卓・フードゾーン」「歌・踊りを披露するステージ」「各国の文化紹介をするふれあいテーブル」の 3 つのイベントを同時進行で実施しました。

世界の食卓・フードゾーンでは、留学生が豆腐干・水餃子（中国）、湯圓（中国）、トッポキ（韓国）を提供しました。

ふれあいテーブルでは、中国の切り絵体験、中国語会話、台湾茶文化体験を実施しました。また、モンゴルパートナーシップ研究所の協力を得てミニグル組立体験、モンゴル占い、デール（モンゴルの民族衣装）体験などを実施し、参加者は遊牧民の暮らしに触れたり、伝統的な民族衣装を着て写真を撮ったりして楽しんでいました。

メインステージでは、吹奏楽部によるオープニング演奏に始まり、長尾彰夫学長、中野

隆司柏原市長による挨拶の後、地元柏原市の児童の皆さん「シラダンス・スペース」による創作モダンバレエ、同じく柏原市の児童・生徒の皆さん「ビーナス」によるキッズダンス、柏原市の団体「フラ オ ナニフラリマ」によるフラダンス、留学生による韓国の歌とダンス、留学生支援団体「国際ソロプチミスト大阪－柏原」による艶やかな着物の着付け披露、留学生によるキルギス民族舞踊、フィリピンの民族舞踊「スブリ」、留学生による中国民族舞踊が披露されました。最後には、会場から韓国の踊りをもう一度見たいとの声があがり、アンコールにこたえて急遽再演が決まりました。会場は大いに盛り上がり、インターナショナルな雰囲気になりました。

本学は、今後とも本学留学生と市民の交流を図り、国際理解を深める機会を設けていきます。



留学フェアに参加

ベトナム 平成 25 年 5 月 25 日（土）～26 日（日）

韓国 平成 25 年 9 月 7 日（土）～ 8 日（日）

今年度も 5 月～9 月にかけて、日本学生支援機構主催による「日本留学フェア」に参加しました。本フェアは日本への留学を希望する高校生・大学生等を対象として世界各国主要都市で毎年開催されており、今年度はベトナムおよび韓国の 2 カ国に参加し、日本留学を希望する多くの学生に大阪教育大学を P R しました。

《本学ブース訪問者数》

ベトナム（ホーチミン・ハノイ）	5月25日・26日開催 ... 67名
韓国（ソウル・釜山）	9月7日・8日開催 ... 66名

2カ国4会場を通して計196名のフェア参加者が本学ブースを訪れ、熱心な眼差しで担当教員の説明に耳を傾けていました。



春季日本文化研修－伊賀・赤目－

平成25年6月1日（土）

平成25年6月1日（土）、春季日本文化研修を実施しました。留学生に日本の伝統文化をより深く理解してもらい、留学生だけでなく日本人学生との交流を図ることも目的とする日帰りのバスツアーです。今回は留学生57名、日本人学生6名、引率教職員4名が参加し、早々の梅雨入りで心配された雨に降られることもなく、一路伊賀方面に出発しました。

午前中は、伊賀の伊賀流忍者博物館を訪れ、忍者屋敷では「どんでん返し」「隠し戸」など数々の仕掛けやからくりの実演案内に歓声が上がりました。続いて忍者体験館や忍者伝承館で本物の手裏剣などの忍具をはじめとする展示物を見学し、当時に思いを馳せました。

昼食をはさんで、午後からは忍者が修行したといわれる赤目四十八滝に向かいました。日本サンショウウオセンターで特別天然記念物のサンショウウオの個性的な姿に驚いた後、滝をつなぐ涼しい溪谷の遊歩道を歩いて大自然を満喫しました。

さらに、夕方には、奈良県桜井市の三輪そうめん山本さんの麺ゆう館に立ち寄り、参加者全員が麺延ばしを体験しました。切るうどんやそばと異なり、ひっぱって細く延ばすという独特の製法の一部を体験し、お土産に自分が延ばした麺を持ち帰って旅を締めくくり

ました。干していない生の素麺は珍しく、もちもちとした独特の味わいでした。

参加したみなさんには、充実した1日となったことでしょう。



留学生による無料語学教室（Language Table）

平成 25 年 6 月～ 7 月

平成 25 年 11 月～ 12 月

本学で学ぶ留学生と日本人学生の交流促進を目的として平成 19 年にスタートした「留学生による無料語学教室」は、今年で 7 年目を迎えました。第 15 回・16 回となる平成 25 年度は、留学生との交流を希望する受講生 44 名が語学教室に参加し、留学生の母語をとおした国際交流を楽しみました。普段授業等で言語を学ぶ受講生も、同年代の留学生ならではの現地情報や若者文化の実情に聞き入っている様子でした。どの教室も和やかな雰囲気が進められ、留学生・受講生ともに言語学習を越えた文化交流という貴重な時間を過ごせたようです。本プログラムは平成 26 年度も継続して開講予定しています。

柏原市民に講演 ―異文化の暮らしを学習しよう―

平成 25 年 7 月 3 日（水）

平成 25 年 11 月 20 日（水）

柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座、「異文化の暮らしを学習しよう」では、本学の留学生が講師を担当しています。平成 25 年度は 7 月 3 日（水）と 11 月 20 日（水）の 2 回開催され、7 月にはロシア出身の日本語日本文化研修留学生エフィーモワ・ダーリャ・ウラジーミロヴナ（通称ダーリャ）さんが母国について紹介しました。シベリアにあるイルクーツク出身のダーリャさんは、世界一の透明度を誇るバイカル湖やそこに生息するアザラシやオムリ、世界一寒い村とされるオイミヤコン村、「寒い国」という印象をくつがえすような黒海に面したリゾート地の様子など、スケールの大きな国、ロシアについてスライドを見せながら詳しく話しました。また、ボルシチ、ピロシキ、ブリヌイなどのロシア料理の話になると、会場は大いに盛り上がりました。聴講された市民の皆様からは「ちょうどロシアへ旅行に行こうと思っていたので、いい話が聞けてよかった」「あまり馴染みのなかった隣国ロシアのことがもっと知りたくなった」等々、様々なご感想をいただきました。

また 11 月にはチリ出身の教員研修留学生、エスカロナ・レケナ・フェリペ・アンドレス（通称フェリペ）さんが母国について紹介しました。フェリペさんは、母国では特別支援の教師で、本学で日本の特別支援教育について学んでいます。

フェリペさんは、全長 4630km と南北に細長い国チリの北部、中部、南部のそれぞれの地域の自然や風土、料理、音楽やダンスなどについて、映像を交えながら詳しく話しました。北部のアタカマ砂漠から南部のサンラファエル湖の氷河まで、変化に富んだ自然の美しさが特に印象的でした。

聴講された市民の皆様からは「チリはワインのことしか知らなかったが、いろいろ知ることができて興味深かった」「音楽のリズムを入れたビデオの説明がとても上手に構成されていた」等、様々なご感想をいただきました。

毎回楽しみにされている方も多く、地域に貢献できる国際交流の取り組みとして、今後も継続したいと考えています。





オープンキャンパスを開催

平成 25 年 7 月 27 日（土）・28 日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの説明会と日本人学生向けの留学相談会を開催しました。近畿圏の日本語学校等から留学生 76 人、留学等に関心のある日本人受験者 28 人の参加がありました。本学へ進学を希望する留学生には、在籍留学生がチューターとなって説明会の通訳補助や大学施設の案内を行い、進学相談にも応えていました。

また、留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生の支援制度についての説明が行われた後、私費外国人留学生試験等に関する受験資格や試験科目、注意事項についての説明が行われました。引き続き、先輩留学生の体験談として、27 日には黄掣さん（大学院・総合基礎科学専攻）、28 日には余澤清さん（大学院・学校教育専攻）が、それぞれ本学の良さや試験対策について語ってくれました。

並行して開催された交換留学や語学研修に関心のある日本人受験者向けの相談会では、熱心な受験者の質問に対して、国際センタースタッフが丁寧に応えていました。

平成 25 年度留学生修了証書授与式を举行

平成 25 年 8 月 8 日（木）

平成 26 年 2 月 19 日（水）

平成 25 年度留学生修了証書授与式が前期は 8 月 8 日（木）、後期は 2 月 19 日（水）に事務局棟 4 階大会議室で執り行われ。日本語・日本文化研修留学生（前期 10 名）、特別聴講学生（前期 17 名、後期 5 名）、教員研修留学生（後期 7 名）、研究留学生（後期 1 名）に修了証書が授与されました。長尾学長から一人ずつ名前が呼ばれると、修了生は緊張した面持ちで証書を受け取りました。長尾学長、向井国際センター長が祝辞を述べた後、クルマンベコワ・アリッサさん（タジキスタン）とジョン・ジウンさん（韓国）が前期修了

留学生の代表として、エスカロナ・レケナ・フェリペ・アンドレスさん（チリ）とナ・ヘミンさん（韓国）が後期修了留学生の代表として謝辞を述べました。

その後、大学会館 1 階第一食堂に会場を移し、地域の国際交流団体および教員とともに交流会を行いました。交流会では、国際センターの教員から記念品と花束が一人一人に手渡された後、修了生一人一人からお別れのスピーチが述べられ、本学の思い出に涙する人もいました。そして、修了生たちの前途を祝して、参加者全員で作ったアーチの花道で送り出しました。



夏季日本文化研修～浮世絵体験

平成 25 年 8 月 6 日（火）

平成 25 年夏の日本文化研修は、にぎやかな道頓堀界隈にひっそりと立っている上方浮世絵館に行きました。上方浮世絵は、主に江戸時代の大坂で制作された浮世絵です。研修当日は常設展に加え、「水のある風景と上方浮世絵」と題された特別展示も行われていました。館外は猛暑でしたが、水辺の景色が描かれた浮世絵を前に留学生たちも涼やかな気持ちになり、また親切な館長さんに説明をしていただきながら、熱心に作品を鑑賞していました。また、浮世絵制作体験の時間もあり、留学生たちは館長さんや職員さんに手伝っていただきながら、一生懸命に絵の具を付け、刷りの作業に挑戦していました。



第 8 回東アジア教員養成国際シンポジウムに参加

平成 25 年 9 月 25 日（水）・26 日（木）

9 月に韓国・ソウル教育大学で第 8 回東アジア教員養成国際シンポジウムが開催され、本学からは長尾学長、栗林副学長、教職教育研究センター富田先生、実践学校教育講座大脇先生、山口学術連携課長代理が参加しました。

第 8 回を迎えた本シンポジウムでは「東アジア教員養成の質保証」を主題とし、韓国・中国・日本・台湾の 4 つの国・地域から約 150 人の大学関係者が集まり、母国の教員養成の現状や課題について議論し、活発な意見交換が行われました。

秋季日本文化研修～姫路

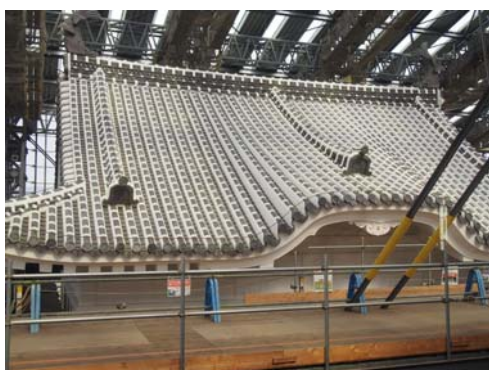
平成 25 年 10 月 31 日（土）

平成 25 年 10 月 31 日（木）、秋季日本文化研修を実施しました。留学生に日本の伝統文化をより深く理解してもらう事や、留学生と日本人学生（チューター）との交流を図る事を目的とする日帰りのバスツアーです。今回は留学生 62 名、日本人学生 10 名、引率教職員 4 名が参加し、兵庫県姫路方面に出発しました。

午前中は姫路城を訪れ、大天守保存修理工事中の姫路城を見学しました。留学生達は水

堀や外壁等の写真を撮たくさん撮り、城に入る前から興味津々な様子でした。その後城の内部に場所を移し、工事の様子を見学しました。なかなか見る機会のない工事の様子を目の前にした留学生達は、姫路城の職員に多くの質問を投げかけており、日本文化のより深い理解に繋がった様子でした。

昼食をはさんで、午後からはキッコーマン食品高砂工場を訪れ、しょうゆが作られる様子を見学しました。まずしょうゆについて工場の方に講義をして頂いたのですが、「新鮮なしょうゆは黒色ではなく赤色です」という説明と共に見せて頂いた赤く輝くしょうゆには、感嘆の声が上がっていました。その後工場に移り、発酵させるために一面に敷き詰められた大豆や、しょうゆを搾り出す大掛かりな機械を見学しました。しょうゆは世界中で販売されているので留学生達にもおなじみの調味料ですが、作られる行程を見るのは初めての学生が多く、興味深い様子で見学していました。参加者からは、楽しかった、勉強になったという声が多く、非常に充実した研修になりました。



留学生に奨学金を授与

平成 25 年 12 月 4 日（水）

大阪教育大学留学生後援会による 2013 年度奨学金等贈呈式を 12 月 4 日（水）に行い、私費外国人留学生に奨学金を授与しました。

留学生後援会は、留学生への経済的支援、地域との国際交流の促進を目的として、地域

の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成 15 年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金 5 人、留学生後援会奨学金 6 人、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金 3 人の計 14 人に授与しました。

留学生代表として挨拶した大学院 2 回生のコウ ショウリュウさん（中国）は「私の夢は日本の理科教育を体験して、進んでいる科学的な理科教育理念を中国に伝えることです。

（中略）今回留学生後援会奨学金をいただいて、私はこの貴重なお金を無駄がないように使って、自分の夢に向かって努力していきたいとおもいます。誠にありがとうございます」とお礼の言葉を述べました。

留学生後援会では、今後もこの制度の拡充をめざし支援の和を広げていくことにしています。

奨学金等提供団体

- ◆ モアコスメティックス株式会社
- ◆ 大阪柏原ロータリークラブ
- ◆ 国際ソロプチミスト大阪－柏原
- ◆ 柏原ライオンズクラブ
- ◆ 大阪教育大学生生活協同組合
- ◆ 大阪教育大学教育振興会
- ◆ 大阪教育大学留学生後援会



日本文化を楽しむ会着物体験 グローバル香芝主催

平成 26 年 2 月 8 日（土）

グローバル香芝様主催による日本文化体験が今年度も開始されました。先輩留学生から本行事について既に聞いている留学生もおり、期待に胸躍らせる女子学生 15 名・男子学生 1 名が、寒空のもと「日本文化を楽しむ会」に出かけました。

まず振袖と羽織袴に身を包み、後ろ姿を鏡に映して豪華な帯結びに大はしゃぎでした。その後着物姿のまま茶道体験にご案内いただき、伝統的な和菓子とお抹茶を堪能した後は、広間でお琴の手解きを受けながら、友人たちと賑やかに写真を撮りあいました。

賑やかなお昼時間を過ごし、午後からの日本文化は俳句でした。想いを 17 文字にしたためるのは、日本語を母語にする者にとっても容易ではありません。が、現在日本語学習中の留学生たちは、題材の草花や外の景色に目をやりながら、和気藹々と俳句づくりを楽しんでいる様子でした。



留学生日本文化体験研修～松江・出雲

平成 26 年 2 月 13 日（木）～14 日（金）

平成 25 年度の留学生日本文化体験研修として、2 月 13～14 日の二日間、留学生および引率教員あわせて 67 名が松江と出雲を訪れました。松江では小泉八雲記念館を見学、松江城を取り囲む堀川を船で遊覧し、冬の風物詩であるコタツ船も体験しました。玉造温泉で旅の疲れをとり、翌日は出雲大社に向いました。60 年ぶりの遷宮でよみがえった神社の境内を散策し、島根県立古代出雲歴史博物館で、巨大神殿であったとされる出雲大社の歴史について学びました。



冬季日本文化研修 ―大相撲―

平成 26 年 3 月 14 日（金）

国際センター・春の恒例行事として定着してきた、大相撲大阪場所観戦。当日は出発前に相撲に関する事前講義を受け、心身とも準備万全の状態で会場の大阪府立体育会館へ向かいました。

会場に到着すると、入場前から、出入り口付近で力士の到着を待つ相撲ファンの熱気が留学生を出迎えます。学生たちも、しばしの間会場前の華やかな雰囲気味わった後、場内に入り観戦しました。土俵からはやや遠目の客席でしたが、力士たちがぶつかり合う音など、やはり間近で見る大相撲の迫力は圧巻です。留学生たちは取り組みごとに歓声を上げ、また近くのお客さんと一緒になって力士に声援を送っていました。また、通路に出て花道を出入りする力士たちの様子や表情をじっくりと観察しようとする学生もあり、思い思いにテレビでは味わうことのできない会場の空気を満喫していました。

平成 24・25 年度国際センター運営委員会名簿

平成 25 年 10 月 1 日現在

区 分	氏 名	所 属	備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座（兼任）	委員長
国際センター専任教員	赤 木 登 代	国際センター	
	城 地 茂	国際センター	
	中 山 あおい	国際センター	（宿舎運営）
	長谷川 ユ リ	国際センター	
	若 生 正 和	国際センター	（宿舎運営）
国際センター兼任教員 ＊	加 藤 可奈衛	美術教育講座	（宿舎運営）
	小 林 和 美	社会科教育講座	
	水 野 治 久	学校教育講座	
	石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	（宿舎運営）
	住 谷 裕 文	欧米言語文化講座	
	藤 田 修	情報科学講座	
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座	
	辻 本 英 和	社会文化講座	
	中 田 博 保	自然研究講座	
学 長 指 名 委 員 ＊	安 部 文 司	欧米言語文化講座	
	東 善 和	学術連携課長	

＊任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

平成 24・25 年度留学生宿舎運営会議名簿

氏 名	所 属	備 考
中 山 あおい	国際センター	委員長
若 生 正 和	国際センター	
加 藤 可奈衛	美術教育講座	
石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	

任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

平成 24・25 年度国際交流委員会委員名簿

平成 25 年 10 月 1 日現在

	氏 名	備 考
副学長	栗 林 澄 夫	委員長
国際センター長	向 井 康比己	副委員長
国際センター 専任教員	長谷川 ユ リ	国際教育部門
国際センター 専任教員	城 地 茂	国際事業部門
国際センター 専任教員	赤 木 登 代	国際事業部門
国際センター 専任教員	中 山 あおい	国際教育部門
国際センター 専任教員	若 生 正 和	国際教育部門
国際センター兼任教員	松 本 マスミ	
国際センター兼任教員	水 野 治 久	
教員養成課程＊	加賀田 哲 也	
教員養成課程＊	臼 井 智 美	
教養学科＊	新 崎 国 広	
教養学科＊	中 野 知 洋	
夜間学部＊	裴 光 雄	
学術部学術連携課長＊	東 善 和	学長指名

＊任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

平成 24・25 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名		備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座	
国際センター（国際教育）	中 山 あおい	国際センター	
	水 野 治 久	学校教育講座	
	加賀田 哲 也	英語教育講座	

任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

平成 24・25 年度留学生推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名	備 考
国際センター長	向 井 康比己	自然研究講座
国際センター（国際教育）	長谷川 ユ リ	国際センター
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座

*任期：平成 24 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

平成 24・25 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿

担当言語	氏 名	所 属
英 語	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
中 国 語	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座
ドイツ語	赤 木 登 代	国際センター
韓 国 語	若 生 正 和	国際センター
フランス 語	井 上 直 子	欧米言語文化講座

平成 24・25 年度ダブル・ディグリー検討専門委員会委員名簿

	氏 名	備 考
副学長	栗 林 澄 夫	委員長
国際センター長	向 井 康比己	副委員長
国際センター 専任教員	長谷川 ユ リ	国際教育部門
国際センター 専任教員	城 地 茂	国際事業部門
国際センター 兼任教員	石 橋 紀 俊	
教員養成課程	鉄 口 宗 弘	
教養学科	松 本 マスミ	
第二部	大 脇 康 弘	
委員長指名	伊 藤 敏 雄	

委員長指名	白 川 和 弘	学務部長
委員長指名	東 善 和	学術連携課長
委員長指名＊平成 25 年 3 月 31 日まで	柏 本 昌 彦	教務課長
委員長指名	中 西 敏 彦	教務課長

編集後記

今回は2年度分をまとめて発行することになりました。原稿を早く提出して下さっていた皆様には、すっかりお待たせしてしまい、大変申し訳なく思っております。原稿をお寄せくださいました皆様には心より御礼申し上げます。次回からは定期的に発行できるようにしたいと思います。

2008年から6年にわたって国際センター長をつとめられた向井康比己先生が、この3月で3期6年の任期を終えられます。長い間、本当にお世話になりました。向井先生は、ご自身のご研究、学生指導、研究員の受入れ、自然研究講座の業務などでご多忙を極める中、国際センターの各種行事にも、常に率先して参加してくださいました。国際センターは、留学生のためのオリエンテーションや文化研修、学習支援や生活支援、海外留学に関心を持つ日本人学生を支援するための取組みなど、1年中イベントが続きます。また、留学フェアなどで海外への出張も頻繁にありますが、向井先生はいつでも嫌な顔一つせず、どこにでも行ってくださる、頼もしい存在でありました。

ベトナムをご一緒に訪問した時のことです。ホテルの朝食に、食べきれないほどの種類のおいしいパンがたくさん出ました。さすがに途中で全部は食べられないとあきらめたのですが、向井先生はなんと、(もちろんご専門のコムギのご研究と深い関係があるのですが、)全ての種類のパンを召し上がっておられました。きっとこの好奇心がエネルギーの元になっておられるのだらうと納得しました。この6年間、センターの方向性を見究め、現状に満足するのではなく、常に先へ先へと後押ししてくださいました。おかげさまで、色々な形で成果が上がってきているのではないかと思います。

国際交流に関してどのように戦略的に取組んで行くのか、質を確保しながら事業を拡大するにはどうしたらいいのかなど、課題は山積みです。今後とも引き続き、見守ってくださいますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

(長谷川 記)

次号原稿募集

本年報は、留学生教育や国際交流についての多様な考え方や意見を幅広く取り上げていくために企画したものです。次の要領で投稿を募集いたします。お問い合わせは国際センターまで。

枚 数：論 文 10 枚程度（ワード、40 字×36 行）

その他 2 枚～7 枚

（原稿のファイルと印字した原稿を頂ければ幸いです。）

2014 年 3 月 31 日 印刷

2014 年 3 月 31 日 発行

大阪教育大学国際センター年報 第 19 号

Bulletin of Osaka Kyoiku University

International Center No.19

編集兼発行者

大阪教育大学国際センター

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

電話 (072)978-3299, 3300

印刷所

カ ツ ヤ マ 印 刷

〒543-0044 大阪市天王寺区国分町 5-1

電話 (06)6771-1000